川柳塔

平成二十一年八月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻九八七号

日川協加盟

同人特集　海百句

No. 987

八月号

第15回 川柳塔まつり
川柳塔創刊85周年記念大会

《同　人　総　会》

と　き　　21年10月12日（祝）午前10時～11時
ところ　　ホテルアウィーナ大阪　3階　　生駒の間
　　（近鉄上本町・地下鉄谷町九丁目下車・TEL 06-6772-1441）
議　事　　平成20年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告
　　平成21年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

《各賞表彰式・記念句会》

と　き　　同　日　　午前11時開場・午後1時開会
ところ　　ホテル・アウィーナ大阪　4階　　金剛の間
表彰式　　路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬賞・一路賞・
　　各地柳壇賞の表彰式を午後1時から行います。
おはなし　「嘘の効用」　帝京大学教授・吉本興業顧問　竹本　浩三　氏
兼　題　　「招　　く」　番傘川柳本社　田中　新一　選
　　「シングル」　川柳文学コロキュウム　赤松ますみ　選
　　「長　　い」　川柳塔社　政岡日枝子　選
　　「回　　る」　川柳塔社　川上　大輪　選
　　「歳　　月」　川柳塔社　板尾　岳人　選
事前投句　　「　　顔　　」（9月4日締切）川柳塔社　河内　天笑　選
　◎各題2句・欠席投句拝辞　◎出句締切　正午（午後4時半終了予定）
会　費　　2,000円　当日いただきます。（記念品　呈）

《懇　親　宴》

と　き　　同　日　　午後5時～7時
ところ　　ホテル・アウィーナ大阪　3階　　葛城の間
会　費　　7,000円（会席料理）
宿　泊　　ホテル・アウィーナ大阪　　8,000円（朝食付き）

《翌　日　観　劇》

と　き　　10月13日（火）　開演　12時45分　終演　15時45分
ところ　　なんばグランド花月　吉本新喜劇　☎06－6643－1122
会　費　　4,000円　要予約、先着25名様にて締切ります。

＊事前投句および懇親宴・宿泊・翌日観劇のお申込は**チラシに刷りこみのハガキ**（御希望の方は事務所）にて9月4日（金）までに本社事務所宛、お送り下さい。
＊懇親宴・宿泊・観劇のご送金（句会費除く）は同封の振込用紙でお願い致します。

主催　川　柳　塔　社
大阪市天王寺区大道1丁目14番17号201
〒543-0052　☎・FAX 06－6779－3490

俄漫才師

河内天笑

関西国際空港が開かれたのが平成六年九月六日。その年の敬老の日のイベントに、当時奈良県高取町壺阪寺内にある特別養護老人ホームに勤めて居られた正司珠梨さん（当時番傘本社同人）の依頼で、月子にフラダンスを踊って貰えないかとのこと。フラを習いはじめて七年目の月子の「友達やし行ったげよか」で決まり、ノーギャラの仕事を受ける事となる。

当日は朝からのざざ降り。それでも九時前にはギター、ウクレレ、ギロなどを積んで奈良に向かって出発。途中あることに気付いた私が「お年寄りや体の不自由な人達ばっかりなのにフラダンスでええんやろか、漫才でも考えよか」と月子にもちかけたところ、暫く考えて「漫才なんかしたこと無いしムリムリ」とはねつけられた。

私はその数年前に当時タレント活動をしていた中村鋭一ことエーちゃん達と岡山ロイヤルホテルで、農協さんの団体のお世話をした事があり、その際いろいろな笑いのヒントを掴んで居た。丁度関空が出来て間もない事でもあり、タイムリーな話題が出来そうな気がして、月子に「農協さんの団体が関空でうろうろする様子を漫才のネタにしよう」と決断。雨降りしきる中、車を運転しながら月子には〝突っ込み〟を、私が〝ボケ〟て話題を引っ張る形でネタを五ツ六ツ考えメモして貰った。

「順番に突っ込んでくれたら俺が何とかするから」と無理遣り月子を俄漫才師に引きずり込んだという塩梅。マイカーは無事壺阪寺に到着。珠梨さんに漫才のことも伝え墨汁と筆を用意していただく。当時紙器印刷を生業としていた私の車にはいろんな紙があり、ピンクの紙をダンボールに貼りつけ「河内家天笑・河内家月子」と太い目に書いて舞台に立てると当時よく売れていたミスハワイ・暁伸よろしく吉本の芸人が来たと錯覚するに充分な演出であった。

ムウムウと派手なアロハの二人がステージに立つとやんやの拍手。そしてぶっつけ本番の漫才がはじまる。思わぬ漫才のプレゼントに町会長も院長さんも漫才に溶け込んで大いに笑ってくれた。ギロを片手にお尻ふりふり月子もすっかり乗って、十五分が予定のところ二十五分ものパフォーマンスと相成った。

このあと広間で皆さんとお食事。そして午後二時からは予定通りの歌と月子のフラダンス。しかし漫才の方がよかったらしくイマイチの反応。全てが終わって玄関前の記念写真の折、私の横の町長さんに「どっちがよかったでっか」と聞けば「そら漫才や、農協さんのうろうろしてるとこが笑わされたワ」。

帰路は雨も上がって「よう漫才なんか出来たもんやなァ」「席題つくるみたいなもんや」お陰様で滅多に出来ぬ経験をさせて貰った。

座右の句
子を育て子に育てられいのちの賦　（みつ子）

私の句
深く腰かけて出直す時を待つ　田中章子

川柳塔　八月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田　尋「小豆島」

■巻頭言　俄漫才師……河内天笑…（1）
俳句と川柳の仲……仁部四郎…（2）
川柳塔（同人吟）……河内天笑選…（4）
川柳塔の川柳讃歌(56)……木津川　計…（47）
自選集……（48）
温故知新……（51）
水煙抄……小島蘭幸選…（52）
麻生路郎句抄……（71）
愛染帖……新家完司選…（72）
同人特集　海　百句……（76）
檸檬抄「保　険」……髙瀬霜石・木本朱夏共選…（79）
誹風柳多留一一篇研究　48……（82）

俳句と川柳の仲

仁部四郎

この稿は、『川柳塔・九六九号』に書いたものの続きである。唐津地区の校長会の研修会に頼まれている講話の原稿の一部でもある。講話の題は、「五・七・五で十二月」で、タネ本は、『きょうの一句』（村上護・新潮文庫）と『現代川柳必携』（田口麦彦・三省堂）である。

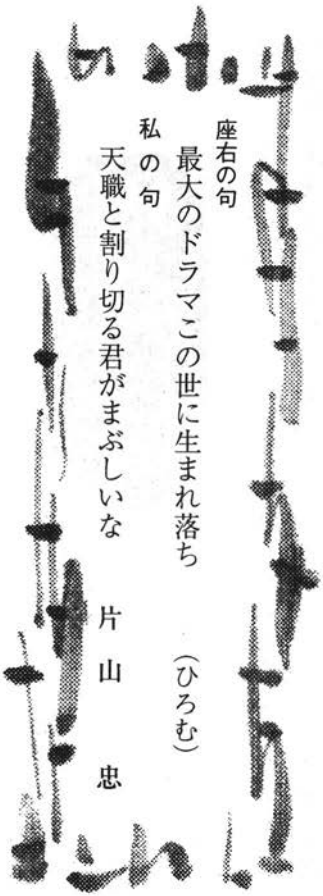
春A　（1）眠し昭和一桁ことに眠し　大牧　広
　　㋐朝　㋑春
　B　とても明るい（2）の献血車
　　㋐早春　㋑三月　森中　惠美子

昭和一桁も、国民学校と旧制中等学校の経験の有無深浅によって、ものの見方考え方がずいぶんちがうようだ。私は昭和7年生れだが胸の名札に血液型が書いてあり、落ち落ち本も読めなかった。

夏A　湾曲し火傷し爆心地の（3）
　　㋐マラソン　Ⓑピカドン　金子兜太
　B　まだ（4）が抜けぬ八月十五日
　　㋐釘　㋑刺　岸野　岸柳

金子兜太は、無季の俳句の代表的作家だそうだが、川柳の側に居る者が欲しくなる句の一つだとこの句を読んで私は思った。

一路集
「乾　く」……安藤寿美子選……(84)
「　貝　」……福士慕情選……(84)
「ほがらか」……古久保和子選……(85)
初歩教室「激しい」……鈴木公弘……(86)
秀句鑑賞「同人吟……吉岡　修……(88)
　　「水煙抄……青戸田鶴……(90)
■エッセー　札幌の旅……宮崎シマ子……(91)
路郎忌　七月本社句会……(92)
各地柳壇（佳句地十選／有沢せつ子）……(96)
全日本川柳2009年札幌大会……(111)
柳界展望……(115)
八月各地句会案内……(116)
各賞選考規定……(118)
■編集後記（ひとこと／山崎武彦）……希久子・光久・尚士……(120)



座右の句
最大のドラマこの世に生まれ落ち　（ひろむ）

私の句
天職と割り切る君がまぶしいな　片山　忠

秋A　（5）の五つや六つおでん鍋
　㋐生き恥　Ⓑ吐いた嘘　穴井　太
B　（6）十一月も既に過ぎ
　㋐不採用　㋑不合格　手嶋　吾郎
「〈五つや六つ〉の大層さが笑いを誘う」と村上護は書いているが、「既に過ぎた」十二月ともなれば、おでん鍋にもありつけぬ平成〇〇年がある。
冬A　（7）うつしうつされわれら聖家族
　㋐風邪　㋑インフル　伊藤　白潮
B　一月一日わたくしに（8）を点ける
　㋐火　㋑気　門脇　かずお
イエスとマリアとヨセフの三人家族を、聖家族として憧憬の対象にするのなら、うちだって、定額給付金で、新型インフルエンザに抵抗するスキヤキを食べた聖家族だろう。めでたく風邪に勝って、数の子も少しは買ってお元日にはお屠蘇で火を点けてみたい。
ペーソス、ユーモア、軽み、風刺、うがち、滑稽、などを評語として使えば、俳句と川柳の垣根を越えて（潜って）通じ合う味をいくつも発見できると思っているので、クイズの形でアピールしてみようと考えている。
この稿は、一〇〇〇字の枠なので、春夏秋冬の四組八句を紹介したが、クイズの俳句の答えは左記のとおりである。
1春　3マラソン　5生き恥　7風邪

川柳塔

何くそが過ぎて可愛くないおんな
ワクワクを見事裏切る試着室
心経もワルツになりそ嬉しい日
蜜蜂が来てくれました苺の木
喧嘩でも売ろうか今日は暇すぎる
何くそが功を奏したダイエット

鳥取市　福西茶子

ゴミ袋暮らしの無駄を詰めて出す
病院は病気探しに行くところ
贅沢に慣れ危機感のない暮らし
蹴躓く度に図太くなってくる
日の丸に思うシンプルイズベスト
助走しただけでやめとく喜寿の恋

大阪市　小谷集一

ヒソヒソと話して高い笑い声
リモコンの林の中で迷ってる
居酒屋にストレス捨てるイエスマン

大阪市　大川桃花

河内天笑選

畦道でランチ済ませる農繁期
自転車に遠慮しながら歩く道
詐欺かなあ親切すぎるアドバイス

松山市　古手川光

春が好きプラス思考にしてくれる
どさくさがチャンス商魂たくましい
裁判員ボケタボケタと言うとこう
親超えてくれた子供よありがとう
西方浄土思う夕陽が美しい
外は真夏財布の中は未だ真冬

大阪市　小泉ひさ乃

いい出逢いまでは人生プロローグ
世渡りへ作り笑いがうまくなる
幸せ度私妬まれてるらしい
治療待つベッドの上で寝てしまい
もりもりと食べた結果の血糖値
ひとことの重さを知って立ち直り

目覚めよくさあ今日こそと思う朝
怠け心と仲よく組んでいる暮らし
アルバムを閉じるとみんな老いている
真相は笑って済ますほどの事
合わせ鏡にわたしに似てる鬼がいる
程々に弾んでくれる君は毬

堺市　宮本　かりん

出不精と出好き総じて仲が良い
前向きを許してくれる健康度
姿勢良いスマートな他人歩いてる
外も内もくずれぬ人はしんどかろ
擬餌鉤に釣られたような顔しとく
意見する私に意見する子供

大阪市　古今堂　蕉子

過ぎてゆく今を大事にして生きる
不揃いのどの子も愛し塩むすび
クシャミして何を話してたか忘れ
母の日にサプリメントがプレゼント
ゴールドの免許娘に叱られる
庶民にはメリットのない民営化

羽曳野市　吉川　寿美

石舞台あっけらかんと陽の下に
タカラヅカの舞台をめざす蛙の子
お手本が良すぎる習字あきらめる

豊中市　安藤　寿美子

薬飲む事飲んだ事みな忘れ
豚インフルもう第二波が心配だ
可燃ゴミ不燃ゴミこれどっちやろ

京都市　西村　益子

今日の嘘枕カバーにへばりつく
特等席に自分の蒲団乾しておく
買いすぎぬよう小さい財布でスーパーへ
今二人やっと気楽になりました
他人の目気にせず生きる強い人
献立が浮かばず安いサンマ買う

鳥取市　中宇地　秀四

ストレスは溜まるお金は貯まらない
わだかまり我慢重ねて胃潰瘍
夕ご飯今日のしあわせ噛みしめる
病院にご無沙汰すると案じられ
しあわせの秤小さい方が良い
免許証ボケの検査もしてくれる

八尾市　生嶋　ますみ

日焼け止め念入りにぬる今朝の空
華やかな夏が燃えてるターミナル
しっかりしてる積もりの勘定が合わぬ
たこやきを食べておさめる腹の虫
よく動く十指しあわせここにある
言い訳を重ねて傷を広げてる

切った跡見せられている見舞客
関白も所詮は妻のたなごころ
お皿からピーマン除ける三歳児
喋りすぎ渡る世間を狭くする
下向いて聞いているふり妻の愚痴
妻だけは味方と思う勘違い

大阪市　伏見雅明

プラス思考の燃えたつ赤と旅に出る
なま温い風は魔物を連れてくる
年一度の情け七夕の夜にもらう
灯台の光りにもらう安堵感
間違えてバラの蕾を切り落し
老いに親切何を狙っているのだろ

八尾市　宮崎シマ子

呼ばれたと思いでっかい返事する
我がことと知らず一緒に大笑い
なみだ目はあくびを噛んだだけのこと
盲導犬寄り添うさまに威厳あり
酔っぱらい転げるとこまで見届ける
ふるさとを映す画面に指触れる

堺市　奥時雄

猫の手も借りたい猫は出かけてる
蓑虫が頼りきってる命綱
赤とんぼカラスにすればゴミの歌

尼崎市　加川靖鬼

青虫が試食してます無農薬
わたくしを三文判が保証する
連れ歩く影もだんだん淡くなり
論敵も同じ意見で飯にする
生き方に目覚めて昼寝欠かさない
花鋏裁つべき過去が一つある
頑張れば夢はかなうと嘘をつき
じゃんけんは無敵を誇る雨男
立呑み屋酒と直球勝負する

羽曳野市　吉村久仁雄

春仕度すすまぬままに季の移り
想定外だった私に老いなんて
眼中に無いなら無いで生き易い
欲得すてはんなり埋める未来地図
奮戦中です自己暗示かけながら
吹っ切れて素直に風と戯れる

尼崎市　長浜美籠

板前の誇り自筆のおしながき
文楽人形息がかよってから主役
ライバルは自分自身と言う若さ
ええ仕事したと自負する名外科医
主役から脇にまわった卵焼
趣味の友過去は語らずまた問わず

堺市　柿花和夫

和歌山市　岩本　美智子

インフルにもそっぽむかれる歳になり
お地蔵さま四十男もわたしの子
夫逝き紫陽花の花色かわる
市民参加裁判官が裁かれる
蛙笛吹き子亀踊って梅雨がくる
空梅雨に雷様も昼寝する

藤井寺市　鴨谷　瑠美子

紫外線コワイコワイとコマーシャル
旅先が竜宮ならば断らぬ
成績は中ほどでよい茄子の出来
咲いた日もあった梅酒になった梅
鏡拭く作り笑いもこの程度
なんじゃもんじゃの花をしげしげ当麻寺

和歌山市　古久保　和子

パンパカパーン鉄砲百合が咲きまして
紫陽花のうつむいている雨の寺
梅雨一日エラ呼吸して差し向い
若者と回転数の違う耳
ゴミ箱の蓋は雑食性らしい
マスクして人遠ざけた街の色

吹田市　穴吹　尚士

国民のためと称している政治
欲捨ててやっと世間が見えてくる
まだ若いつもりで跳んだ水たまり
一本を惜しみそろりと髪を梳く
ガス消した鍵は掛けたと点呼する
勘違いだろう美人が会釈する

鳥取市　鈴木　公弘

消化よい物ばかり食う天下り
どしゃぶりに備えて溝を掃除する
手に職をつけて嫁入りさせる愛
姦しいくちびる細く描いてあり
通販のモデルの演技力を買う
嗚呼ここは故郷トンビが舞っている

大阪市　板東　倫子

鳩山と吉田の孫が大さわぎ
待ち人は来ず冷え過ぎたメロン切る
「かぐや」発緑の地球に息を呑む
迷い来し鯨哀れや紀伊の湾
サクサクと骨切る音よ鱧の旬
愛憎で貴方わたしを裁けるか

富田林市　中井　アキ

たこ焼の列に並んでいる文化
倖せに差をつけたがるクラス会
失った刻から輝く過去になる
外見はどうあれ残り火抱いている
頼られて足腰ピンとなってくる
ポイントを貯めてまだまだ欲がある

可も不可もない一日の灯を点ける　和歌山市　木本朱夏
夕焼けがきれいに洗う現在地
再生紙くらいの存在感はある
カーネーションの赤がお墓に馴染まない
ロボットの首すげ替える世襲制
塩むすび敵にまわせば手強いぞ　東大阪市　久米奈良子
足の爪医師のおん手にゆだねたり
入れ歯やや自分のものになった夜
歯の調子満更でない笑顔湧く
母の日の母は心の中にいる
警報器つけてひとりの城守る
亡きひとを偲ぶ城北花しょうぶ　藤井寺市　太田扶美代
神様にご都合わたしにも予定
年齢のせいにするのは止めました
大丈夫恋という字がまだ書ける
胸底に人には見せぬ水溜まり
しみじみと産んでよかった長女次女
もう一つ越えねばならぬ坂がある　鳥取県　石谷美恵子
便利だが老いには使いこなせない
磨かねば練習せねばなまる腕
理屈っぽい人だ小骨が多過ぎる

建前と本音でピント食い違い
肚の虫宥めて受けた役不足
拉致を見た浜に尋ねる娘の行方　八王子市　播本充子
米五キロ　マスク百枚備蓄する
悪口を言わないようにマスクする
形から入るゴルフも結婚も
班長になりたい人が二人いる
担任はもう来られないクラス会
まんじゅうも恐いがやさしさが怖い　堺市　山本半銭
仙人になる山頂の雲の中
考える前に母の手動いてる
深読みの答はきっとつまらない
横一列平等だとは限らない
次の世も横であれこれ言う積り
集まった人だけ元気同窓会　大阪市　井丸昌紀
青信号何の役にも立ちません
今一つわからぬものに民主党
なに色に塗っても浮かぬ今日の僕
名も知らぬ九番打者にしてやられ
学校は学ぶとこではないらしい
師匠から悪いとこだけ貰う弟子

大阪市　谷口　義

本物の男は風になるだろう
小骨がささる何の罰かと思う
改札が中途半端なとこにある
奥行のたっぷりとある父だった
ひらめきがないのでゆっくりと歩く
巻き戻しすると溢れてくるこころ

倉吉市　松本　よしえ

お早うと元気な声で通学路
雨の日も届く朝刊濡れてない
騙すのは騙されるより難しい
方言の通じないオレオレの声
他所の児は一寸見ぬ間に背が伸びる
大きいと褒めると背伸びして見せる

松山市　髙橋　宏臣

割算の円周率が果てしない
秒針を止めて私の時間帯
聞き流し安楽椅子は眠りこけ
苦も楽も同じ音色の古時計
思考ゼロ病衣の葦が枯れてゆく
複雑な過去を引きずり黙秘権

弘前市　髙瀬　霜石

ちちの歳越せば親孝行になる
車窓から見える田畑は頼もしい
粒々辛苦金はあとからついてくる
遊ぶなら都会　住むなら地方都市
いい時も確かにあったループタイ
通帳の奥に底なし沼がある

高知市　小川　てるみ

青い実が熟し切れずに落ちている
日に月に急き立てられて生きて来た
ケセラセラこんな一日だってある
おトイレへ連鎖反応してしまう
気前よく棄てて夫に叱られる
脳味噌も老化呂律が回らない

橿原市　居谷　真理子

母の芋いい塩梅に煮くずれる
耐えている日記は白いまま続く
透明な時を醸して老夫婦
火の用心噂の好きな人が来た
仏壇の母にも赤いカーネーション
人として生きよう逃げるなよ心

吹田市　山本　希久子

八月の海に漂う悔いの数
武装するよう紫外線から身を守り
自然解凍時が解決する仲だ
一病を抱えて力み過ぎている
老後という重いテーマがのしかかる
献立はMサイズからSサイズ

日替りのコース喜ぶ万歩計
奥さんも花も隣は美しい
五七五不老長寿のサプリかも
咲き終えた花へひと言有難う
読経より演歌が好きな仏様

宇部市　平田実男

水面下に葛藤があり聞き流し
年金が入りなかなか死ねません
沸点にあるは孤独な影だった
芯のある話饒舌だと思う
一本の葦と流れていく浄化

美祢市　安平次弘道

どの色も元を辿れば無垢の白
肩の荷が下りて始まる認知症
亀だって切羽つまれば走り出す
ゴキブリも人間恐いと言っている
誉めたなら花を一鉢頂いた

東かがわ市　川崎ひかり

倖せは近くにあるが掴めない
近道を覚え人生狂いだす
ありがとうの笑顔の中に妻が居る
人間にまた生まれたい走りたい
嘘ひとつ抱いて仏の顔でいる

東かがわ市　原賢

弟が生まれ一匹増えた鯉
水槽の鯉が夢みる滝のぼり
時計ばかり気にしてサボリたい会議
腹時計あまり狂うたことがない
鉾先を笑いにかえて生きる術

東かがわ市　清川玲子

ジョギングで朝の笑顔がすれ違う
聞き分けの無い児に戻る認知症
舌の根に亡母の味覚がまだ残る
万歩計生命支える土踏まず
過去は皆笑って水に流したい

東かがわ市　伊勢八重子

メインストリートでした賑わいありました
大臣のコメント値打ち下げただけ
悪代官の顔で鳩山邦夫さん
いい人を止めると肩が軽くなる
ピクニック気分もいいナ墓まいり

松山市　宮尾みのり

Tシャツでビヤガーデンの客となる
投げ返す球を大事に持っている
しっかりと受け止めるはず緩い球
送り人あれは単なるショーでしょう
後何年生きれる年を数えてる

大洲市　中居善信

身に過ぎた欲をいっぱい抱いている
嫋やかに生きてゆきたい無理しない
普通の暮らしよく見ると感動がある
農に誇り若者捨てたものじゃない
朝寝坊低血圧に罪着せて

西予市　黒田茂代

あの街に面影ひとつ旧そば屋（三十年ぶりの軽井沢にて）
一適も残さず干したワンカップ
過労死を知らぬ働きバチもいる
ギャルと老人同じメニューで食べている
混浴につられて過疎の村に来る

高知県　小澤幸泉

超米寿生かしてくだされ済みません
長生きがなんだか怖い記事ニュース
弱い者食いものにする法の穴
些細でも体調のぶれ身構える
年寄りの殺人記事に不眠症

唐津市　井上勝視

初デート手も握らずに今は妻
いい距離を保って妻も古稀になる
雲悠悠さて何しよう妻の留守
妻の留守迷走する気にもなれず
薄っぺらだけど裏ならちゃんとある

唐津市　坂本蜂朗

空海の遺跡巡るや鈴の音
歳かいな古刹巡りが好きになり
エリートが女の森に迷い込む
公金を使う悦楽（よろこび）憶え込み
与党なら人頭税も出し兼ねぬ

唐津市　山口高明

ヒョイヒョイと検疫を抜け帰宅する
旬の野菜届き予定のメニュー替え
遺言書全財産を介護士に
朝刊の折込み広告痩せて来る
力士輸入野球選手は輸出する

唐津市　市丸晴翠

変哲の人と連れ添い五十年
そそくさと焼香済ませ飲むビール
大敗しそそくさと去る野球場
八十路坂いまもお酒は修行中
ひとり居で分かった妻の有難味

唐津市　樋口輝夫

忠告の痛さ親友なればこそ
努力かな笑む俳優の歯の白さ
北鮮に過去の日本も斯くあらむ
地球上に僕だけのものＤＮＡ
ハウスから野菜の旬がこわれかけ

熊本県　髙野宵草

熊本県　岩切康子

老化防止弁当造り楽しもう
青虫の食べ残し採る庭キャベツ
旅先で記念日迎え夫に詫び
熊野古道夢実現の歩く杖
投函の帰途の買物楽しみだ

熊本市　永田俊子

梅は実に私の手には何もない
信じてた道間違えた百の悔い
気がかりを捨てよとふわり春の雲
すぐ飽きる美人ばかりのコマーシャル
最後までじっくり聞かれる恐ろしさ

シドニー　坂上のり子

快晴のこの大空に潜む菌
マスク買う足しにはなった給付金
咳一つ猫にもジロリにらまれる
鍬を持つ無理を知りつつ耐える膝
風呂かシャワーかちょっぴりよぎる後始末

砂川市　大橋政良

かさぶたに時折り愚痴をこぼされる
もう一つ裏に図太い顔を持ち
過去みんな捨てて一歩を踏み出そう
デザートのシュークリームのような女
母の味試食品にはありません

弘前市　岡本花匠

無神論者祭りばやしに踊らされ
真夏の宵庭で焼き肉きずなの輪
福相のいのち温める長寿箸
酒ほろりOB会の輪が和む
作り笑い出来ぬなやみの瞼垂症

弘前市　高橋岳水

六法をかじって迷路擦り抜ける
迷彩を上手にまとう保身術
傘立てにいつもの傘がある平和
ふるさとの訛りに四季の音がある
白神の五月の風に癒される

弘前市　今愁女

猫の出世駅長になり客を招ぶ
なにはともあれ町おこしには奇を衒う
ようニッポンW杯に一番乗り
売り家貸し家貼り紙目立つ街の中
休耕田地価がどんどん下落する

弘前市　福士慕情

山笑う蕨こぶしを振り上げて
郭公が連れてきたのは初夏の風
花柄の日傘が目立つ交差点
血圧計おいてあるから入れる腕
校外に出され惨めな喫煙者

弘前市　須郷井蛙

お隣の根ッコ地下から攻めてくる
ドタキャンも慣れております老いの会
半額をぎっしり詰めた冷蔵庫
ジャパン製安心剤が入れてある
小粒でも努力教えた日馬富士

弘前市　櫻庭順風

弟を焼く煙に一人無口なり
警戒をし過ぎた弟にすまぬ嘘
あずましい墓地へ収めた弟の骨
積みにくい石やっと積む恐山
振り向けば妻のいびきが暖かい

弘前市　相馬銀波

スタンドの油価右上り泣く財布
解散と候補ニュースは夏の陣
農政は自給率とも放棄地とも
生ビール演歌で僕は呑み繋ぐ
三年目休耕田に見る草種

黒石市　相馬一花

金婚のマンネリズムに飽きてくる
階段のように格差のある社会
松竹梅縁起をかつぐ酒の味
価値観の違う男女のすれ違い
どんぶり勘定好きでたまらぬ縄のれん

平川市　小寺花峯

選挙ポスターみんな当選する笑顔
しあわせは笑顔に咲いた笑い皺
二日酔い冷や水ゴクリ胃の目覚め
仏壇の言葉を知った茄子の馬
葉桜に見向きはしない観光地

十和田市　阿部進

何時までも元気で居たいコラーゲン
うまい酒あるので長生きしています
飛び出すな走る車がかみつくぞ
コンビニで売って居ませんジャッパ汁
週一度私はカレー食べて居る

青森県　松山芳生

この先も夢をひきずる芋かぼちゃ
丹精の野菜に祖母のひとり言
わたくしを奮い立たせる風に逢う
自画像の血圧今朝も正常値
野次馬に見られて消える火事現場

さいたま市　星野育子

ピンからキリまである国民目線
プライドが過ぎて上から物を言う
アナログの終了知らせる無理強い
仕事に行くには惜しい五月晴
バアチャンの知恵がクイズになる時代

日高市　根岸方子

マニキュアを変えて梅雨空やり過ごす
スーパーもバイトを増やすボーナス日
人の輪が生きる勇気の下支え
亡母の齢越えてホントの友に逢い
久方の友好物と共に来る

東京都　清原悦子

正しいと思い込んでるから難儀
うっぷんを晴らした靴が裏返る
人並みの暮らしご飯が炊き上がる
大根をひとつ買うにもよく吟味
贅沢は申しませんと神頼み

東京都　岸野あやめ

東京に住んで京都の墓守る
サマータイム忘れてエコだ省エネだ
曲線美プールサイドで勢揃い
後期高齢裁判員を免れる
身を庇うことにも馴れて老いゆくか

武蔵野市　亀井円女

晩酌を夢追い酒と呼んでいる
残り火を抱きしめながら今日も暮れ
食べてねと笑ったらまた食べてます
歌はジェロのみギターはニコラデ最高だ
時よお願いあなたの足は早過ぎる

横浜市　菊地政勝

張り合った意地へ結論宙に浮き
追い風に乗って自分を見失ない
ささやかな遺産へ欲が絡みあい
子育てをめぐり母娘が揉めている
ミサイルを飛ばし誇示する射程距離

横浜市　小野句多留

韓国へ野次馬に乗るブラリ旅
郷に入り郷に従えなんて無理
買う気ない免税店をもて余す
カリスマの末期凶器の沙汰に出る
新党が出来るだろうという私見

静岡県　薗田獏沓

思い出し笑いしながら茶を啜る
一番機歴史の一歩幕が開き
彼方には富士山視野に一番機
世渡りへ笑顔こぼれる生き上手
ふる里の森に素敵な童うた

富山市　島ひかる

しゃくなげに父想い出す甲武信岳
底無しの愛があるから生きられる
基礎代謝わたしに課した一二〇〇
ますずしに成る身と知らぬ稚魚が跳ね
精巧な擬似餌を見分ける魚の勘

犬山市　金子　美千代

幸せと思う日もあり一周忌
日本が一番良いと知った旅
生水の飲める日本のありがたさ
一回で捨てるマスクを躊躇する
中国産買ってしまった道の駅

犬山市　関本　かつ子

あの方も香典無しという訃報
あじさいの雨も一役買う見頃
お誘いが続いてきっと今が花
口紅がついてる内にハイポーズ
生活を見抜かれそうな腰回り

犬山市　吉田　幸子

かぶせ茶もUVカット旨味増す
滝イオン浴びてお肌がピッカピカ
もう遅いまだ早すぎる種を蒔く
エピソード交え勝者のお立ち台
一匹の蚊さえスルリと手を抜ける

愛知県　早川　遡行

いい風が吹くまで羽根を休ませる
枯らさない程度に水を遣るいじめ
ターザンはジョニーワイズミラーの頃
鯵二匹今宵も妻と差し向い
どう頑張ったって年金のくらし

可児市　板山　まみ子

うなぎ買う待ちに待ってた一人の日
ワラビ取り日焼予防のあで姿
料金の分は浸かった露天風呂
冥土への土産のひとつナイアガラ
名瀑に潤っている市の金庫

京都市　高島　啓子

張り変えた畳抜け毛がよく目立つ
マスクして疑い深くなってゆく
寝る前の体操体調がわかる
年を経て億ションしどろもどろなり
勝鬨をあげつつ雨が降っている

京都市　三宅　満子

説法も椅子で拝聴高齢化
汚い言葉たまに吐いたら胸がすく
片思いばかりせず嫁連れといで
同窓会自慢話が浮いている
うちの猫なんにも持たず幸せそう

京都市　桝本　宏子

エプロンのポッケ深くにある秘密
夫いない景色慣れたは他人さま
世話焼きの好きな言葉はありがとう
生きる事に気合い入れてた木の校舎
身の内にある北風や南風

京都市　坪井孝一

四季通じ叱ってくれる海がある
平凡でも未だ跳んでいる足の裏
いつ来ても許してくれる故郷の山
アルバムに精一杯の顔を貼る
スイミング今も抜手を切っている

亀岡市　井上森生

落巣ヒナ爺渾身の親代わり
身に合うた晴登雨読のあり難さ
登山も読書も今からやるぞ気は若い
生き抜ける力をつけるのは自分
ゆっくりジョギング脳によし身にもよし

長岡京市　山田葉子

地面這う木木が境界越えたがる
鍵穴の向こう秘密の匂いする
草書体のお手本だけが置いてある
対策はマスクを買うただけのこと
それぞれが好きにしてても続いてる

大阪市　津村志華子

母さんはどうしてるかな雨しとど
行間に寂しさ滲むかなだより
せせらぎも蛍の歌も風の中
朝採りのトマトの味はほんまもん
貧乏に得心をして恙ない

大阪市　熊代菜月

紫陽花に慰められたウツの朝
カミナリが御輿とめる夏祭り
鼻の差でまたやられたと負け惜しみ
段差だよ言われやっぱり踏みはずす
夕日落つ明石の渦がのみ込んだ

大阪市　小糸昭子

度忘れはこうも酷いか八十路坂
イベントが中止マスク屋高笑い
おかしいなビリケンさんもマスクする
咳一つ気兼ねしてます満員車
婚活に嵌って詐欺に遭っている

大阪市　田浦實

ちっとも年とらないんです生駒山
スーパーショット偶に出るから止められぬ
春の声音譜に変えるシュトラウス
同病の猿に声かけ花粉症
鍵盤にのって雨だれ歌ってる

大阪市　川原章久

掻き氷旗ひらひらと音がする
日本酒とビールをのどは選ばない
窓の灯の二人の影は仲が良い
同じ干支十二違いも良い仲間
何時までもついて行きます万歩計

日本語で外人さんに道聞かれ
賞味期限切れたと思うのは他人
短命の家系で美人居りません
スリーサイズ皆同じを自慢する
ありがとう言った手と手が涙ぐむ

大阪市　榎本　日の出

新型インフル大阪神戸狙い撃ち
牛乳を豆乳に変えこれも老い
昨日今日傘が要るので家を出ず
山椒炊く季節ヒリヒリつまみ食い
負けててもこの大観衆阪神戦

大阪市　中村　叡子

新しい発見散歩の道変える
ニュース見て子を思いやる昼下り
竹の子が食べれる元気感謝する
ストレスを捨てにカラオケ行って来る
太陽に当たって湿疹でて困る

大阪市　松尾　柳右子

核廃絶世界の息が合ってきた
原爆症やっと政府が頭下げ
庶民の骨削ってなにが骨太か
妻が病み味噌汁の味聞きに行く
炎天下彬を偲ぶ百日紅

大阪市　近藤　正

ハワイアン流れて腰が揺れ出した
不倫情報流れ大臣首が飛び
拉致家族時の流れを耐えて待つ
見ておれぬトラ　チャンネルを切り替える
携帯で娘に緩く監視され

大阪市　池上　清治

アピールが下手道端の十円貨
その先がわかる話を聞いてやり
暇つぶしとは似て非なる孫の守り
迷い箸するほど膳に皿がない
ユニークな人と変人もちあげる

大阪市　升成　好

仕事しか知らぬ親父の定年後
満足で無いが歩けるありがたい
職も無し貯金ゼロでも明日はくる
子が巣立ち責任おえた認知症
他人前は息子の嫁を褒めちぎる

大阪市　奥村　五月

不安感ときどきふいに胸をつく
年重ね丸くなるのは背なばかり
泥沼の泥に染まらぬ蓮の花
髪形を変えて何かを期待する
髪切って白い襟足風が撫で

大阪市　原田　すみ子

大阪市　岡本久峰

易易とクスリを飲んでいる怖さ
死ととなり合せで生きている老後
大盤振舞い一体どこへ消えたやら
消費癖大黒柱傾ける
死に損ないせめて感謝の花手桶

大阪市　岩崎玲子

このお腹かくれる服をさがしてる
気に入った服はわたしのサイズ無し
何年もタンスの肥やしだけの服
服選び中身磨くのつい忘れ
落ち着くしいつもの服に袖通す

大阪市　森田明子

万感を込めてひとこと有り難う
永遠の平和手にする棺の中
来し方と行く末想う雨の夜
暇つぶしカフカ再読してウツに
自由とは手の鳴る方へ寄らぬ鯉

大阪市　坂裕之

他人のため少し時間を割くゆとり
物欲を捨てて楽しく生きていく
真っ直ぐに走るだけしか出来ぬまま
二人居るだけで空気がまろやかに
幸せは損得なしで感じ取る

大阪市　福岡末吉

相互い日日のお詫びと歩み寄る
甘辛の味を滲ませふたり旅
ふたりして消去法だと笑いこけ
支持率の保持向上に励む夫
次元の差遅きに失し涙する

大阪市　岩崎公誠

賞めすぎの祝辞は耳にこそばゆい
素手素足流転の旅もフィナーレ
わたくしの中のほんとを探す酒
お祝いは古今東西金がよい
宝くじ末尾一字で汗を吹き

大阪市　津守なぎさ

青空とみどりルンルンバスツアー
人まばらアメリカ村もマスク減る
お馴染みにされて節目の奉賀帳
かたくなな心をほぐす花の種
朝夕の散歩手ぶらがたまらない

大阪市　榎本舞夢

異郷の地愛確かめる絆欲し
迷ったら湯舟につかり策をねる
一夜漬け舞台を見事遣り遂げる
お互いにリモコン操作して夫婦
生意気な人は仲間に入れません

後期高齢戦後ささえた礎なり
獄中の彬を思い夏耐える
走らない次の電車も明日もある
打ち水は向こう三軒両隣
終戦日球児と共に黙祷す

大阪市　川端一歩

原爆忌昔話になりそうだ
ご近所にまたも気兼ねな救急車
老夫婦長いトイレの事でもめ
しきりに齢聞くので若く言っておく
真っ直ぐに歩くぶつかることはない

大阪市　神夏磯典子

大丈夫と思った人が先に逝き
わだかまり解けて仲間と大ジョッキ
給付金あっという間に消えました
生活がにじみ出そうな顔の染み
まだ少し未練があって同居する

大阪市　西川更紗

寝姿は誰とは言わんまるでトド
すくすく育ってほしい今小犬
もう一生歯医者に行かぬ治療済む
アメリカのシンボルたちが総崩れ
かぐや姫とうとう月に骨埋める

大阪市　江島谷勝弘

振り向けば上り下りの道ばかり
眼差しの熱い写真はセピア色
亡父の戒いま古書を読み噛みしめる
映る皺過去の起伏にドラマ見る
しょぼしょぼ目かくす私のサングラス

大阪市　中村れんげ

ひとことが回りまわって自分刺す
回覧板お宿りさせぬよう回す
子の誕生姑との壁に風通り
腸壁の三つの突起取りのぞき
目くばせの友の気転にすくわれる

大阪市　平嶋美智子

スーパーのチラシ見比べ家事開始
お賽銭五の数いいとバスガイド
中傷もうまく素通り遠い耳
窓からの三日月かくす家が建ち
子をあやす口鼻ピアス若いパパ

大阪市　澤田定子

八月の涼を求めて貴船川
まあいいといった程度の許し方
夏の夜の饗宴空を画布にして
ほほ染めて日暮れを知らす酔芙蓉
奮発をして鰻買う土用丑

池田市　栗田久子

家事皆な妻に任せた日々進む
満天の星に願いの手を合わす
正直の頭が白い年重ね
心電図俎上の鯉となり申し
良妻に恵まれ生きる日を数え

和泉市　西岡洛酔

タクアン漬け上手な嫁が気に入られ
サングラス男が弱味持っている
森を描く空の青さも少し入れ
あじさいに躊躇している花鋏
からくりと分かって妻に歩を合わす

和泉市　横山捷也

家事免許皆伝介護したおかげ
ベランダは四季の野菜を飾るとこ
あの行進ブリキの兵隊さんみたい
針に糸通すが見ている人がない
義理で書くように昨日の日記書く

泉佐野市　山本蛙城

腹立ちは酒に溶かしてから帰る
毒舌を吐くのはいつも負け惜しみ
単身赴任ズボンのままで寝てしまう
図書館に私の森を持つ憩い
ぶぶ漬けが美味いすぐきは京の味

茨木市　藤井正雄

感染の疑い世界中が揺れ
ナツメロで疲れた頭リフレッシュ
あれ話そこれも話そと里帰り
無農薬ふつふつマーマレード煮る
これからはやさしくなろう誕生日

大阪狭山市　矢野梓

手の音で主人が分かる池の鯉
カーテンの代りに植えたゴーヤ苗
山猿が柵のりこえて芋畑
葬式でおくりびと券無駄となる
国民栄誉賞八十九歳森光子

交野市　山川日出子

母の日も父の日もパス老い二人
あの頃の父の苦労を見る日記
買い換えのテレビサイズでするケンカ
妻の皺はっきり見える眼鏡買う
足湯ならご一緒します若い足

交野市　森本弘風

足腰が弱くなるのに口達者
退院が出来て思わず深呼吸
妻よりも娘の一言が千の風
露地産の野菜ほんもの旬の味
叱っても一寸良いとこ誉めておく

河内長野市　黒岩靖博

河内長野市　井上喜酔

闘病へ薄味に慣れ自己管理
紫陽花が見頃で稼ぐ寺の庭
正義の血騒ぎ大臣辞職する
仏さま贅沢するのもお盆だけ
商店街つぶしたスーパーも倒れ

河内長野市　村上直樹

近ごろは五勺も飲めばいい気分
ウイルスの目覚め騒乱罪を科す
なぜ地デジそのからくりがわからない
手弁当町内会も楽じゃない
気転など利かず愚直に生きた自負

河内長野市　植村喜代

どっち向いてもマスクが歩いて来る
インフルエンザこんなに騒いだ年もない
夫ショートステイ私三日寝て終り
いつからか蓮華も見ない春が行く
長生きとは山を幾つ越えるだろう

河内長野市　水谷正子

メリットを数えて盆の里帰り
畑仲間ここにもやはりボスがいる
女性歌手好きよ好きよと十八回
無実晴れ消えた青春誰の罪
竹箒蛍とり用買い求め

河内長野市　山岡冨美子

千切れ雲いつも現在進行形
桃源郷こころの中にある故郷
幸せの原点がある飯茶碗
シャッター街どこまで続く水溜り
良心に背いた胸にある廃墟

河内長野市　坂上淳司

早乙女に代わり無骨なコンバイン
校庭にお芋を植えた遠い夏
川の字で寝ていた子らに介護され
ビール飲みトイレに困る川下り
ワーストワンの大和川にも鮎の影

岸和田市　原さよ子

逆らうまい病気が無理を言っている
主治医から気長にいこと励まされ
ある時はとぼけて見せるのも夫婦
仲直り互いに短気認めあい
孫の手の温みとのぼる寺の段

岸和田市　米富淳風

孫誕生まっさらですね何もかも
友と会いランチでなごみリフレッシュ
故郷がぐっと近づく幼な友
憎めない楽しい嘘のつける人
ハイカラな和菓子横目に御座候

岸和田市　雪本珠子

どうすればいいのと猫が目で訊ね
太陽に愛され肝斑がまた増える
ときめきの心が若さ作りだす
初夏の風心のドアー開けに来る
もう一度貴方信じて見ようかな

岸和田市　堤　楢代

鉢植のトマト色づきまちかねる
忘れても苦にせず生きることにする
充実の明日にしたいと悩んでる
主役にはなりたくなくて下をむく
百までは少し間がある何しよう

岸和田市　林　力子

ズル休み常習犯の猿芝居
少女から女に変る身拵え
散らかした部屋でゆっくり猫昼寝
霧吹きで防除新芽の油虫
思い出を集めて作る一代記

岸和田市　井伊東吉

快眠の目覚めにすらり出来た二句
母の顔見たいと全盲ピアニスト
神風かハイブリッドの風が吹く
自販機にホットが消えて夏に入る
カラフルなファッション梅雨を吹き飛ばす

岸和田市　土橋房枝

父の日は父の好みの味付けに
病快復お粥の味がうますぎる
高齢化地域の愛が見直され
旅の恥掻き捨て出来ぬ歳になり
雨の日は時差惚けおきる二十四時

岸和田市　森元ふみよ

血の気引く古日記帖隠す妻
軋んでるあっちこっちの蝶番
羨やまし喜寿のグループフラダンス
クール便通過見送る日日ばかり
老妻のサプリメントの量が増え

堺市　齋藤さくら

還暦の花の値踏みをしてしまい
何もせぬ一日としたはずだった
大臣が変わり悪政変わらない
カメラに囲まれて紫陽花誇らしげ
病院へまめに行けたらまだ元気

堺市　源田八千代

金婚の御祝切手肖ろう
七十路を派手に装うクラス会
還暦の婆ちゃんパワー過剰気味
歯磨きを歯科衛生士ほめてくれ
早起きと朝寝坊が夫婦のリズム

夜が明けて昨日の悩み消えている
スマイルの裏にも別の顔がある
非常袋に気休めつめて枕もと
けとばされ踏まれて石がまるくなる
この国になぜか殺人鬼が増える

堺市　大久保　のん子

手抜きして緩んだネジを締めてます
シナリオ抜き今日もどきどきして生きる
持て余す日はなくいつも追われてる
時により知らぬ振りしている情け
相棒に仮面はいらぬ笑ろて生き

堺市　西村　りつえ

一本ですまぬが妻のため薔薇を
勘違い重ねて恋がふくらんだ
すこしだけ歪な愛で長続き
ものうげに私の胸を行く嫉妬
薄情な人琴線に触れたがる

堺市　和田　つづや

ひまわりに疲れ宵待草を待つ
駅名の漢字検定しつつ旅
恋人でない人と結婚をした
奥様の老眼鏡が汚れてる
頑張りすぎはた迷惑でございます

堺市　志田　千代

民芸品の店に元気な紙風船
窓をでて春風にのる紙風船
ふわりふわり北の国から紙風船
末の子は両手でうけます紙風船
紙風船息こめたまま部屋のすみ

堺市　近藤　豊子

ぐずなのに夫おんなに目が早い
入れ歯がちゃがちゃ隣が急に立たはった
かあちゃんは抱き上げるほど軽くない
縄のれん溢れる酒が嬉しくて
なめらかに言えたことない悔み言

堺市　荻野　像山

褒められて迷路抜け出す勇気出る
お薬とサプリメントがぶっつかり
こんな和歌作れる人がホームレス
空模様今日着る服が定まらず
電池切れみたいな顔で昼寝中

堺市　矢倉　五月

朝顔に声かけてゆくスニーカー
母の日の妻主演賞助援賞
タレントも議員も世襲うらやまし
痛い目にあっても酒は止められず
あんないい嫁でも浮気する男

堺市　加島　由一

心臓に悪いので見ぬサスペンス
別姓で通す有名人夫婦
損得で転び道義に蹴躓く
くそ暑いけれどマスクをして出掛け
見てられぬ今年の虎の負けっぷり

堺市　村上玄也

回り道寄り道みんな糧にする
長々と経聞いてても救われず
青汁もスッポンの血も飲んでみた
凝り性と飽き性だからぎっちらこ
ごくんごくんすぐ踊りだす喉ぼとけ

四條畷市　吉岡修

無駄ばなし横一列を組んで来る
干涸びた男の汗を絞り切る
民主主義もコカコーラも来た昭和
分別をされて私はゴミになる
動揺を隠した腕が縺れだす

吹田市　太田昭

痛くてもまだ歩けます遊べます
振り返ること止めにした赤い靴
衣更えまだ着れるわと古い服
お互いの知恵出しあって隠し味
足痛へ痩せなさいよと簡単に

吹田市　木下敏子

思わぬ時骨折をして白い部屋
痛み止め飲んでも疼きせまり来る
体温でしんどさはかりながら生き
病室でコーヒー緑茶飲んでいる
半年で二回もオペを受けている

吹田市　大谷篤子

タンポポの絮毛見るほど芸術品
七夕を気付かせまする笹売り場
職人の勘数字より冴えている
仏壇に手を合わせつつ無神論
勿体ないは除外する化粧品

吹田市　瀬戸まさよ

特別じゃなくてもいいさ普通なら
一匹の虫をお腹に沈めてる
三回忌母は私の中に居る
鏡見りゃはっとするほど母に似て
脳みその髄まで癒す若葉風

吹田市　須磨活恵

成程ね育ちの良さは死語でない
良妻のテレビにワイフ横を向き
二人してタレントの名を探してる
出世払い大きな顔で物を言い
クジラでも何故か日本が好きらしい

吹田市　野下之男

高石市　浅野房子

心配事一つ消えるとまた一つ
クラス会どんぐり同士背くらべ
旅先で迷子になった夢を見た
お医者さん予約予約と縛らはる
ああでもないこうでもないと八十路坂

高槻市　指宿千枝子

スイッチを入れてすっかり忘れてる
紙屑の株券なのに捨てきれず
困ること今は笑って話せます
部分麻酔手術の様子みな聞こえ
ええタフです百まで生きるつもりです

高槻市　左右田泰雄

絵手紙に遊び心をにじませる
ふっくらとメリハリのある頬のつや
安物買いの財布小銭がよくたまる
困ってもくじけず生きて来た自信
うそ八百並べてあごがくたびれる

高槻市　富田美義

愛嬌にお世辞も言わぬ心電図
計算がちらつき愛が掴めない
裏おもて無けりゃ男は詰らない
ここからが地獄でござい橋の色
低頭で詫びる舌にも裏表

高槻市　生田義一

ランドセルかけっこ眩し午後三時
尼僧さんバイク颯爽月参り
どちら勝つ祖父の後継ぐ関ヶ原
クールビズだらしなさ増す永田町
虎早く目覚めておくれ交流戦

高槻市　峯村勲弘

新水着メタボ締め上げ新記録
引退はしません誓う森光子
内部から告発があり事実知る
妻や孫害が及ぶと煙草やめ
弁柄の格子ひっそりビル谷間

高槻市　乙倉武史

仁義なき戦永田のていたらく
思惑の通りに行かぬのが浮き世
タイガースこんなはずじゃあなかったが
たかが野球されど気になるタイガース
敗けがこみファン自棄酒纏いつく

高槻市　杉本義昭

一番をゆずり人間らしくなり
一冊の詩集返せぬままでおり
にくめないあいつほんとに象のよう
寡黙だが広い心に憧れる
演歌よりダンスが好きと妻はいい

高槻市　井上照子

よい知らせあって動きもリズミカル
嫌だよと言いたい犬に雨コート
修学旅行自分の国を深く観よ
貶し合い野次る国会烏合の衆
孫の名も忘れる老いの恐しさ

高槻市　佐甲昭二

几帳面に教わり迷路はまり込む
追伸でちらり炎をたきつける
表まで使いいっぱい書くはがき
この人に出会えるまでの長い道
あいまいな態度が答かも知れぬ

高槻市　執行稲子

限界の切り札抱いて生き延びる
念願の舞台でミスの臍を噛む
ボール投げ子等もボールになってこけ
米寿祝さくらの園のはらはらと
よちよちと満面笑のお餅踏み

高槻市　安田忠子

旅帰りマスク姿の滑稽さ
北京からマスクが届きキュンとなる
給付金振り込まれても変化無し
路地一つ間違え知った京の街
すごいなーオシッコを飲む岩田さん

豊中市　松尾美智代

閃きを期待している散歩道
メモするの忘れ逃がした大きな句
逢うたびに孫はずんずん大人めく
気持良い風吹き抜ける今が好き
友とお茶してやすらぎをもらってる

豊中市　水野黒兎

指切りを果せず風邪の長い梅雨
屋根裏に鬼平といて雨を聴く
ねこじゃらし手に廃線のハイキング
装って他人の顔の妻となる
辻々のコンビニが今道しるべ

豊中市　藤井則彦

国境も知らずに暮らす日本人
この上司スイッチできぬもどかしさ
お互いの弱みはつつけない夫婦
一〇〇〇円が流れを変えたハイウェー
薄型のテレビで部屋も広くなり

富田林市　大橋鐘造

逆風へ熱い男の血が騒ぐ
反骨がグッドデザイン生み落す
叩かれた数だけ視野が広くなる
人間に疲れた仮面干してある
よく滑る舌が墓穴を掘っている

富田林市　稲川恵勇

当落が微妙で諭吉狩りだされ
除け者と知らずに顔を出したがる
片肌を脱いで借金背負わされ
夫には内緒で二億掛けてある
定年日やっと仮面を脱ぎすてる

富田林市　片岡智恵子

言葉にも目方があった寂聴さん
これ以上拭いたらメッキはげてくる
豊かさのグルメグルメの果ての糖
夕陽落つどこかで秋刀魚焦げている
善人の本音ぽろりともれてくる

寝屋川市　冨山ルイ子

高額の買い物思案せず求め
正社員の身分ボーナス支給され
自分に褒美清水寺からとびおりる
職業に貴賤はないと二度の職
裏作の梅はたったの十個だけ

寝屋川市　森田麗

卒寿まで障壁越えて舞扇
未練より捨てる勇気の粗大ゴミ
羊羹が機嫌なおしの策と知る
ひとことが未だに惑う人生譜
プライドはきっぱり捨てた惚け話

寝屋川市　森茜

この頃の孫は保護者の顔をする
生きている限りシャッター開けておく
真っ白な話のできる娘に育ち
高かった靴と十年歩いてる
極彩色の街で混乱する思考

寝屋川市　籠島恵子

マスク着用笑顔が見えぬではないか
事件が事件握りつぶしているニュース
絵手紙のドクダミ草が凜と咲き
麦の穂の波うつさまにある故郷
客二人セルフサービス押し通す

寝屋川市　太田とし子

美しい啖呵を胸にユーターン
若者の地下足袋頼る過疎の山
笑い袋仰山縫って差上げる
思い出し笑い床屋のおやじ腰抜かし
ダルマさん一度笑ったらいかが

寝屋川市　平松かすみ

八月は百六歳の生誕日（父）
故郷の野菜で洗う私の血
ありがとう隅まで詰めたダンボール
一言を大事にしてるこんにちは
里芋の葉ッパで遊ぶ朝の露

羽曳野市　永田章司

カリスマに表に出ない影の人
真っ直ぐに伸びてくれよと添え木する
リハビリはロボットに似る動きから
アラフォーに頼る猛虎に勝ち遠く
傘マーク無視して天の罰を受け

羽曳野市　酒井一壺

お返事のない神様へ祈ってる
風呂上がりジャズ聴きながら缶ビール
その昔罪着せられて泣き寝入り
ゆとりとはこんなものかな缶ビール
ひ孫誕生給付金では足りません

羽曳野市　福田悦子

八月の祈り球児の甲子園
西瓜割りデイサービスで湧く笑顔
一言のジョーク笑いの波が出来
アッパッパ戦後の夏を話しだし
リサイクル母の形見が蘇る

羽曳野市　安芸田泰子

ありがとう心の中で言う頑固
何もかも知った無口の腹の中
やんわりと例え話で釘を打つ
カタログを開いて夢を遊ばせる
お世辞だと思いたくないほめ言葉

羽曳野市　三好専平

冤罪に国家は知らんふりをする
介護エコまたハゲタカの餌になり
魁皇は八勝したら負けつづけ
タイ産のコメがイヌネコ育てあげ
あせらずに歩いていてもけつまずく

東大阪市　笠井欣子

リハビリは情け掛けない荒治療
百害の長に背かれ点滴す
墓参り出来る幸せくれる花
梅ラッキョ漬けて八十路の株上がる
転んでも何も掴めず捻挫する

東大阪市　米田水昇

休耕田実る日本を夢見てる
温暖化翻弄される暑い日々
合掌し心の曇り取り除く
しゃれた服買って女に浸ってる
さまざまなペンの暴力人をさす

東大阪市　北村賢子

つらい時かごめの友のメール来る
二人目の孫がぬくもり倍にする
まんねりの暮らしへ赤い灯をともす
モヤモヤが晴れ青空へ深呼吸
とり返しつかぬひとこと吐いた酒

東大阪市　佐々木　満　作

朝顔が窓から蔓を覗き込み
花筏に僕のこれから問うて見る
世の早い流れにとても折り合えぬ
ゆったりと流れる川も牙を剥く
紙屑にされても履歴書書きつづけ

東大阪市　中　岡　妙

罪のない顔して爪を研いでます
どん底もバブルも生きてきた昭和
エコバッグ持って地球の端っこに
ベランダのゴーヤ朝顔夏を待つ
テレビから良い所取りの生きる知恵

枚方市　丹後屋　肇

ハイキングシューズがハモる終着地
ジャズ合戦宿場の格子窓が開く
腰痛のくしゃみに星が飛散する
無味無臭管理の届く河川敷
朝市に分け入る電動車椅子

枚方市　伊　達　郁　夫

モノクロで私の今日が暮れていく
面倒を見たい女が居て困る
病室に作り笑いが落ちている
人間が好きでお酒が止められぬ
無機質な風が舞ってる歩道橋

枚方市　森　本　節　子

老人には見向きもせずにインフル去り
目前の森眺めつつ湯につかる（松本扉温泉）
扉峠天の岩戸が落ちたとか（日本神話）
まだ雪の残る山山見ての旅
ギヤマンの三日月の箸置きおみやげに

枚方市　小　林　わ　こ

人間が生み出す恐いもの無限
ときめきの衣はおって街に出る
アリガトウもゴメンもノートなら言える
旅支度シフォン帽子も夢を見る
肩の荷を下ろした母の声変わる

枚方市　安　達　忠　央

女房はマメにスイッチ切りまわり
駅中で済ます散髪めし土産
法螺吹いて抜き差しならぬ過去を持ち
恋さなかスイッチ入りっぱなしなり
おおらかな流れにのって天寿待つ

枚方市　寺　川　弘　一

ジャニーギターに今も感傷的になる
焼酎も洋酒も俺はロックだけ
愛は純粋いつも答はひとつだけ
来世は俺も白馬の騎士になる
裁かれるように老老介護する

枚方市　海老池　洋

行事いろいろ書かれ喜ぶカレンダー
情報の海で自分を見失う
無欲にはなれずに迷うことばかり
前向きになると勇気がわいてくる
本当の勇者は多く語らない

枚方市　二宮紫鳳

紫陽花の色鮮やかに梅雨に入る
水田のネオン揺らして梅雨に入る
目玉焼夫の手作り朝の膳
病魔などに負けてはおれぬ万歩計
ペアカップB・G・Mの昼下り

枚方市　二宮山久

趣味舞台三十年の夢叶う
血糖値下がれ下がれとペアシューズ
勝ち取った夢の兜の紐しめる
晩酌をすっかりやめた血糖値
病む右手梅雨に入りて痺れ増し

藤井寺市　鈴木いさお

本当に妻は一番の味方か
好きだとは面と向って言えません
元亭主関白今はめしも炊く
体に悪い食べ物なんでこう旨い
幸せになろうなろうで古稀の坂

藤井寺市　高田美代子

なつかしくて大好きな香よ墨を摺る
逢いたいと思うがこちらから言えず
プレッシャー零で余生をのんびりと
図書館でクシャミするにも気がひける
足の爪きるのに苦労しています

藤井寺市　増井ヨシ枝

玄関の窓いっぱいにバラの花
お祭りにもらった金魚三年目
メールメール赤いポストが欠伸する
車椅子土を知らない靴をはく
幸運を呼ぶという木を植えました

藤井寺市　伊藤アヤ子

さわやかに髪撫でてゆく若葉風
病院の待合室であら元気
これ以上熱くなったら火傷する
幸せはいつかメタボになっていた
テレビからマスクの話題消えている

藤井寺市　津田シルク

首横にふらぬ人だとみんな知り
極小のたい焼オチョボぐちで食べ
よくすくお腹体調不良疑われ
健康でタフと自分に暗示かけ
紙屑と化した証券まだ金庫

藤井寺市　若松雅枝

年だとは言うが譲ろうとはしない
紅生姜漬けてベテラン主婦の顔
勿体ない勿体ないとメタボ症
贈られた梅酒独りで舌鼓
墓掃除跡継ぐ子らがいてくれる

藤井寺市　俣野登志子

古稀だからそんなもんだと鏡言う
たたみ替え妻が古くてすみません
安穏な暮らしに孫台風近し
強がりは止そうしんどい歳なりに
最近のメカ複雑でギブアップ

箕面市　広島巴子

眼科医が年や年やとたたみかけ
払っても眼の中嫌な飛蚊症
心の目曇らぬように磨いてる
遠近の眼鏡に慣れず顔上下
サングラスちょい悪気取り掛けてみる

守口市　井上桂作

肩書におじぎするのももう飽きた
人生の波に乗れずに時は過ぎ
自分流などと言ったら自己弁護
それぞれに人は痛みを持ち合わせ
言葉尻本音どこかに滲みでる

八尾市　高杉千歩

祈ることばかり戸惑う梅雨最中
目から鱗久方ぶりの菖蒲園
西暦に迷い手帳カレンダー
あちこちが軋み意固地になってくる
駅弁の半分夕餉の皿に盛り

八尾市　笹倉ひろし

薫風にやっと馴染んだランドセル
国縮み至る所で軋む音
一瞬の誤信まさかの逆走行
バックスピンかけて老化を一時止め
ケータイを通じワイフの指示で買う

八尾市　村上ミツ子

新インフルに振りまわされたマスク
どぶ掃除昔の娘ばかりなり
父の日へ娘いそいそ墓参り
ミスはミス下手な言い訳などしない
どっこいしょこらしょとのぼる老いの坂

大阪府　米澤俶子

ほどほどが見える眼鏡があれば買う
競うタネも早やなくなる日の孤独
裏返る値札にあった落し穴
オンリーワン私だけの花咲かす
成り行きで啖呵を切ったあとの悔い

兄弟愛絆深める旅枕
電気水エコした分は酒に落ち
くよくよはギヤチェンジして縄のれん
感激の涙は宝石の雫
豊かさに攻められているメタボ腹

大阪府　野田栄呼

駄々こねて核で挑んで非礼国
買い溜めたマスク未練を封じ込め
一っぱしはお仏壇へと給付金
ポジションを上げた気分の薔薇の風呂
エコ車買う算段点火ボタン押す

大阪府　桑田ゆきの

早乙女の摘んだ一番茶を立てる
ファミリーの傘から抜けて独り立ち
鉄砲玉にケイタイ持たし捕獲する
ぬれぎぬが晴れても時間戻らない
酌むほどに涅槃にひたる飲み仲間

大阪府　籾山隆盛

生き延びるたびに命に礼を言う
恋をしているな声まで更衣
イメージとは別人だった初対面
わがままを言える妻子がいて安堵
有り余る玩具じじばば四人いる

大阪府　澤田和重

票集めの策をひたすら練る議員
バイパスが出来てさびれた商店街
一曲のヒットで十年食いつなぐ
マスク完売石油ショックを思い出す
本音しか言えぬ我が子のＤＮＡ

神戸市　伊勢田毅

悔しくてけった小石がはねかえり
大雨になって諦めやっとつく
人間をざぶざぶ洗う大自然
役不足言わぬ若さに期待する
ストレスを束ね一気に火を付ける

神戸市　両川無限

さやさやと若葉が語りかけてくれ
とある日に昔の基地に寄ってくる
廃村の証し残している礎石
四分音符山盛りにして鳴く蛙
残り火に再チャレンジの絵を描く

神戸市　山田婦美子

吹けば飛ぶような夫も宝物
妻という空気のような宝物
押入れの隅に仕舞っている家宝
バーゲンで宝探しの目が競う
目の前の宝の山に気づかない

神戸市　山口光久

夕焼へ名残りを惜しむ野球帽
さよならを何度言うたか立話
ブランドのよさがわたしに分からない
楽し気に紫陽花雨に濡れている
朝顔をゴーヤにかえて盛夏待つ

神戸市　山口美穂

子を思う心に重ね親憶う
紙屑も資源に還しエコに生き
権力を死守する北の核実験
挑発に核持つ悪夢湧いて出る
身を削り無駄遣いせよと言う国家

神戸市　木村貴代子

買いたての卵落とした今日のウツ
素振りする夫の弱点ならわかる
行動を逆さにたどる探し物
限定に急かされて買う不要品
ただいまとお帰り一人芝居する

神戸市　田中章子

横文字のはびこる花屋四季がない
担がれて迂闊に本音さらけ出し
せっかちで罠にはまった勇み足
試行錯誤男に雨が降り止まず
石垣の石のゆるみにスミレ咲く

相生市　中塚礎石

つまみ菜の旬の緑を食べている
偽ものと知らされるまで光ってた
簡単に約束破る午後の雨
目の前をかすめていった石つぶて
探しものの時間も入れておく予定

芦屋市　黒田能子

息災で子供孝行しています
ケアホームロマンス聞いてあげましょう
ハイキング雉が飛んだと騒がしい
会いそうな予感が悪い人に会う
聞き役にされるお茶でもとの誘い

尼崎市　山田耕治

春菜煮びたし一人の膳に灯がともる
ビタミン注射すぐビタミンの息を吐く
コルセットはずした背中見てしまう
骨折で亡夫の知らぬ猫背なり
ここまでは夫も生きていた投句

尼崎市　春城年代

インフルに手洗いの雑叱られる
銀行にマスク外してATM
戦中派辛い毎日マスク捨て
世の中をも一度見たい眼の手術
公園の三人掛けにみな一人

尼崎市　軸丸勝巳

伊丹市　山崎君子

胡蝶蘭元気出してね外は雨
ベゴニアは真っ赤に咲いて友を待つ
宅急便節句のちまきそえてある
インフルエンザやっと落ちつく町の中
マスクはずして朝の挨拶さわやかに

川西市　米原雪子

梅雨晴れ間パンクしそうな家事予定
後輩のミスを繕う思いやり
未練あり運賃かけてまで運ぶ
クリニック誰かに会える楽しみも
苗植えて早や収穫の夢を見る

川西市　西内朋月

墓の草抜き缶ビール飲みながら
毎月は行けぬ先祖の墓参り
仏壇が喜ぶ水をあげている
新聞のお詫びの文字に虫眼鏡
家中の電気を点けるひとり者

三田市　石原歳子

忘れ物旅の宿から宅配便
朝早く昨日の日記付ける夫
追い払うだけの対策鳩公害
考えをかえて気持が楽になり
肚かかえ笑った後の心地よさ

三田市　堀正和

夏が来る裸足で土と喋りたい
セールスが親戚回りする不況
百年に一度と白寿言いません
元気出る話探しにビヤホール
二つ三つ明るい話題抱いている

三田市　福田好文

夏近し歩幅狂わす通り雨
反則キップ切るお巡りの丁寧語
未だ懲りず少し上ると見る株価
本人と分かりますけど判がない
三か五か四はだめだとのし袋

三田市　臼井二英

不況から悪賢さが生れ出る
落ち込むとすぐ思いつく寺参り
二十年前のムチ打ち蘇り
正の字で数え飲んでるコップ酒
ソバだけで物足らなくてワラビ餅

三田市　上垣キヨミ

渋滞を颯爽と越すパトロール
バス旅行りんごの歌と炭坑節
駆けっこに老人会の息あがる
カタコトの電話に爺のうれし泣き
新聞を傘に飛び出すにわか雨

三田市　北野哲男

Uターンみみずの怖い嫁連れて
名の通りドリームジャンボ夢ばかり
意味深なあなたらしいと言う評価
自分史に濃淡のある愛と憎
大臣の辞めるニュースを猫と見る

三田市　久保田千代

精一杯今日を生き抜きたい笑顔
待つ人が来ると輝く部屋の中
神様に見透かされてる願い事
茶柱が中吉なのかやや斜め
父の日はついでに買った缶ビール

姫路市　古川奮水

常緑の楠初夏へ衣更え
潮騒を眺めて癒す旅途中
留学へ機影見送り無事祈る
横に立つ着た付け下げはぼくの妻
棟上がり一先ずここで祝酒

西宮市　緒方美津子

保険屋の鞄はそれとなくわかる
加害者に被害者になる車持ち
一面にトラが踊るとめしうまい
覗けない無口の人の肚の中
出来るだけ使わぬ駅のお手洗い

西宮市　井上松煙

丹精にトマトにこにこ鈴生りに
幸せはいまだ碁友と楽しめる
趣味の不出来もう気にせずに興じてる
坪庭の野菜に余生預けてる
失敗を忘れストレス乗り越える

西宮市　亀岡哲子

愛一杯受けて育った嫁が来る
五分咲きの紫陽花胸で膨らます
移りゆく四季にゆだねている心
立て籠り所詮鍵なき四畳半
上等の古い背広で医者通い

西宮市　山本義子

冥利だな子役喝采ひっ攫う
鮨屋の段わかっているがいつも泣け
南座は脳から足もリフレッシュ
太郎冠者ええとこでハイ参上す
回り舞台泣いて笑うて暗転す

西宮市　藤本直

べったりと鰈のように休みたい
どないです安いもんだけこうてます
赤い糸乾きすぎてもほどけない
太陽は闇を知らない楽天家
愛情の味付け足らぬカップ麺

西宮市　西口いわゑ

この窓はわたしひとりの万華鏡
いちご達のプライド充たす白い皿
針山の針も失業しています
嫌いだと思ってた人に助けられ
こだわった白が汚れて楽になる

西宮市　秋元てる

ホテル泊卒業二人のクラス会
よくもまあしゃべり続けたまる二日
逆らって暮せるうちが華だった
お誂えのよう葉桜の木のベンチ
ホーム入居と昂る友のテレ続く

西宮市　片山忠

青汁も飲んで気合いを入れる朝
平凡がいいと一度は言う女
バカばかりやっていますと自慢する
運動が下手でも被る野球帽
ご近所が気になり呼べぬ救急車

西脇市　七反田順子

錆ついた夫が叙勲で甦る
東京は空も道路も垢抜けて
東京はジョーク通じぬ冷めたとこ
内助の功東照宮にお伴する
いろは坂新芽なよなよ真っ盛り

奈良市　天正千梢

生き金か死に金か勘違いしてる
成功へ試行錯誤をくり返えし
風の吹きようで政策までかわり
それ見たことかと溜飲下げている
身の丈に合うた考えだけ語り

奈良市　米田泰昌

横道にそれた講義がうけている
下手で結構あんたに言われたくはない
通天閣ビリケンさんもマスクして
福寿草祝う米寿のいい笑顔（れんげさん米寿祝　2句）
れんげ草今を盛りと咲き誇る

橿原市　安土理恵

多情多恨泣いて恨んで恋もして
おだやかな死は望めない糸切歯
ホタル追って深い森から抜けられぬ
赤ちゃんポスト母の祈りを信じたい
さみどりの息吹きわたしも生き直す

大和郡山市　坊農柳弘

人生いろいろ至るところにある虚飾
人間の脆さを包み込む菩薩
灼熱にシャキット向日葵の主義
赤字国債策士が策に溺れてる
ふる里に心を洗う川がある

生駒市　飛永ふりこ

本心をさらりと出せるありがたさ
些細でも当人さんには大事よ
気に障る言葉尻だが笑っとく
イケメンの隣声まで若返り
ウエストに睨まれながら大ジョッキ

香芝市　大内朝子

ぶち当る壁に度量を試される
妹が母に似てきて甘えたい
秘めごとを抱いて女のおんなたり
真心を込めれば風も凪いでくる
懲りもせず恥をかきつつ生きている

奈良県　渡辺富子

日本中不況に喘ぎ梅雨に入る
世直しの旗手を待ってる日本丸
蛍飛ぶ闇の深さを恋しがる
職あぶれ食いしばる歯も欠けてくる
修羅語る女三人生き生きと

和歌山市　福本英子

もう少し酔わせてほしい千の風
表彰状以下同文に一張羅
ただ一歩出ただけなのに風当り
近道の矢印信用した迂闊
ほとぼりの冷めるのを待つ流行風邪

和歌山市　玉置当代

真実を隠すメッキはすぐ剥げる
頑なに貝口を閉じ妥協せず
ひと休みせねばこの膝ストをする
帰国した娘夫婦に甘えてる
これからを考えながら散歩する

和歌山市　堀畑靖子

ストレスがたまると殖える鬼ヒトデ
エコエコと使えるものを買いかえる
毒舌をキャラに生きたくなる余生
妖怪の域に達してきた容姿
シルバーカー並ぶ接骨院の朝

和歌山市　喜田准一

その笑顔こんちくしょうが消えて行く
言い過ぎたのか雨足がきつくなる
程のよい距離で会話が弾んでる
ひと言で話せと忙しい時代
豹変もそうかそうかと聞き流す

和歌山市　田中みね

賢いひとと思えぬ君の言葉じり
スイッチON五体が跳ねる気も跳ねる
この時とばかり揚げ足取りにくる
如才無い仮面の裏を見たショック
入梅も楽しからずや待つ挿し木

和歌山市　武本　碧

殿方の知らぬ熟女の憂さばらし
羞恥心脱ぎ身も蓋もない本音
ふっ切れて単細胞になる私
裏切りへいつものことと事も無げ
コーヒーと過ごす私のいい時間

和歌山市　松尾和香

星空に亡夫のシグナル見る時間
骨太の母のタクトはリズミカル
心根は優し骨身を惜しまない
五月晴れ耕耘の音梅雨を待つ
紫陽花も僕も生き生き梅雨の入り

海南市　堂上泰女

軽い傷へ拡大鏡をあてる人
グミ取った友懐しむグミが成る
なるようになると信じる脳回路
父の日を忘れています子供達
おしゃれして月に一度のうさばらし

田辺市　岡本昇

木魚よりギターを磨く若い僧
みちのくの広さに酔ったバスの旅
ロボットに教えています田植え歌
母に似たひとの荷物を持ってやり
あっけらかんもオホホも集うクラス会

鳥取市　夏目一粋

にんげんの臭いしてきたマスクする
意のままになればいつかは踏み外す
お金さえあればペコペコなどしない
正直に生きると息が詰まりそう
どこからが愛と言うのかまだ迷う

鳥取市　春木圭一郎

その人に合った呼び方考える
朽ち果てる姿を見せるのも役目
疲れてる時こそ一歩前に出る
元気づけ時には傷つける言葉
結果よりプロセス重視しているか

鳥取市　永原昌鼓

妻の振るタクトで今日も動き出す
尾を振ってついて行きます諭吉さま
ない袖も振ってみせよう孫のため
風向きをしかと見極め尻尾振る
反抗期かわいい孫も反旗振る

鳥取市　倉益一瑶

井戸端から回りまわってきた噂
負けん気のシャツはボタンを外してる
ブラウスの白にちょっぴり自負がある
折れそうな母抱きしめて時雨ゆく
旅立ちの準備しないでおかあちゃん

鳥取市　岩崎　みさ江

逞しく育てよ過疎の鯉のぼり
さもしいことはするなと父も言っていた
殿様も貰う手盛りの給付金
鏡から阿修羅の貌を教えられ
沈黙の背なには深い訳があり

鳥取市　田村　邦昭

終焉をにっこりできる道探す
飽食が好きと嫌いを加速する
チェンジしたつもり中味は変らない
よく見える眼鏡つまらぬ乱つくり
老人は宝といわれ百めざす

鳥取市　山本　益子

墓参り老鶯の音に癒やされる
厨から愛する子らへにぎり飯
砂像解体ああファイナルへ人の群れ
芍薬は開花して見にゃ色ひみつ
いつの日か幕引き風に出合うかも

鳥取市　吉田　弘子

お婆さんの資格孫からもらってる
一番に咲く庭の花仏壇へ
検査前生年月日念のため
百歳の歌唱力には武者震い
幽玄の世界飛び交うホタルの灯

鳥取市　中村　金祥

期待した老後も孫に操られ
女神だと思って尻に敷かれてる
自分史の空白埋める寄り道だ
にんげんが裁く般若の仮面つけ
アイラブユー言えなんだのを悔いている

鳥取市　山宮　愛恵

青空よ今日はわたしの誕生日
母と娘に鍋が行ったり来たりする
リーダーが変わり明るくなってくる
あの手この手打ったら先が見えて来た
ほっとけぬ質ですぐさま口が出る

鳥取市　岸本　宏章

いい夢を見させてくれた砂像展
無記名のアンケートにも見栄がある
ライバルに弱味も少し見せておく
値上げするときは大きく派手に書く
手抜きしたしっぺ返しを倍受ける

鳥取市　岸本　孝子

流行に取り残された服ばかり
都合など聞かずに友が誘い出す
違和感も薄れた後期高齢者
ユニクロが着られるようにダイエット
遺言をするなら私家族葬

鳥取市　有沢　せつ子

青色の空気がうまい初夏の風
雨つづき料理に香り工夫する
家計簿も日記も趣味としてつける
勉強のはずがマンガの中にいる
二週間えんどうごはん飽きもせず

鳥取市　奥谷　彩子

からくりのもつれほどけぬ永田町
本当に当たれば困るジャンボ籤
夕陽のみ漁火ゆらす浜に佇つ
ダイヤモンド婚老々介護視野に入れ
古里の緑に燃える父の山

鳥取市　西川　和子

診察の度に薬が増えている
惚け予防の薬と思うボランティア
形見になったもんぺで今日も畑を打つ
戦中も戦後も耐えて来たもんぺ
正座して思う八月十五日

鳥取市　平尾　菜美

いつみても平常心の石地蔵
自信へともやもや雲がたち込める
雲路へと迷い残して旅最中
あきらめの境地根雪よはよ溶けて
行き抜いて掴んだ神の黙秘権

鳥取市　加藤　茶人

言うべきか言わざるべきか好きの二字
ヒロシマとナガサキ歴史から消えぬ
良い事は内緒いくらか小銭貯め
エコエコと僕の小遣いにも波及
ただ酔えば良い焼酎は過去の事

鳥取市　宮脇　道子

愛の虹見たいものです夢でよし
風呂のバラ再度艶出し笑ってる
新築に明かりがついて謎の人
咲いたバラ散らずにいてと祈る歳
飛行機でウイルス地球に散布する

鳥取市　土橋　睦子

夏祭貝がら節の総おどり
ひまわりも首筋痛のギブスする
老化とは思いたくない事ばかり
裏山に香りも凄い栗の花
言い勝って見てもやっぱり二人部屋

鳥取市　池原　天馬

花も見た知らぬ土地見た夢つづく
代満(しろみて)の祝いもなくて田植すみ
交配の蜜蜂駄目で地獄みた
三年ぶり燕巣つくるにぎやかだ
空家二軒続いてつぶす過疎深く

寝不足に陽がギラギラと照りつける
じゃまたね軽く別れてそれっきり
転ぶ度何か掴んで起きている
永遠に続くだろうかこの地球
仏壇に今日も相談して決める

鳥取市　植田一京

桃の香の中で曽孫とご対面
天女とも貧乏神ともお友だち
木も草も声掛けあって春謳歌
あのひとによく似た雲に吸いこまれ
昼顔の絵手紙砂丘から届く

鳥取市　近藤佳子

妙なる筆に引かれて書道展へ行く
重箱の隅置き去りにされた胡麻
水溜まり飛ぶ勇気さえ消えている
沈黙は返事のつもり身じろがぬ
思い掛けぬ形見となった友の文

倉吉市　山本玲子

万歩計今日も清やかな風拾う
給付金一役買ったフルムーン
呼び捨てにされ少し距離が縮まった
築き上げた富も名誉も置いて逝く
遅刻した極楽行の渡し舟

倉吉市　野口節子

友愛の政治奇麗で分からない
総理職だんだんお顔痩せてゆき
厚労省アレもコレもで熱を出す
去る人が吠えて政局かき回す
早過ぎる復帰の陰にカネと欲

倉吉市　猪川由美子

古里に思いを馳せて六十年
お疲れさん嫁に言われて吹っとんだ
ふるさとの夕陽に亡母のおもかげを
血圧を下げるトマトが得意そう
余生まだあちこち掛ける修理代

倉吉市　山中康子

労いの言葉に勇気戴いた
背を押す人がスカート踏んでいる
歌姫の喉破れないようおまじない
皺の顔だけども笑顔忘れない
種袋破り期待の種を撒く

倉吉市　最上和枝

すれすれの数値なんでも加齢です
響かなくなった耳休ませてあげる
勇気うろうろ息子についていくのかな
芝居終って役者の顔を洗ってる
約束を破り大袈裟な言い訳

米子市　政岡日枝子

米子市　野坂なみ

菩提寺からオーケストラの新風が吹く
すれすれの車互いに礼し合う
芝居することも覚えたランドセル
配給のコッペチョコより甘かった
敗けて勝つ気力も持って生きてきた

米子市　白根ふみ

駆け出しは雲を掴んでばかりいた
人間の味深くなる回り道
人間にしてくれたのはどん底で
神さまに試されているのだ迷路
見ないふり聞えないふりして生きる

米子市　青戸田鶴

息抜きをしたくて友と食事会
給付金まだ大切にしまってる
ぼんやりと出来ぬ惚けたと思われる
孫たちが都会の風をもってくる
フィリピンの介護士が来る楽しみだ

米子市　門脇晶子

常識を破ると落ちる目のうろこ
ポケットが破れて嘘がばれて出る
日記書く昨日の嘘を織りまぜて
沖合は海の男の社交場
悲なく明日に向って夕ぐれる

鳥取県　北村稔

愛情をこめれば庭木答えだす
好きなのにアイラブユーがなぜ言えぬ
吾が家ではワンマンなんて通じない
裁判員おれなら全部死刑にす
過疎村はマスクなんかはいりません

鳥取県　竹信照彦

団塊の世代へ譲るボランティア
のんびりとしてもおれない畑作業
買った方が安い野菜を作ってる
吹く風をキウイのつるがもて遊ぶ
よりましに野菜作りもして生きる

鳥取県　深田倶久

兼務でもやれる大臣つぎつぎと
子育ては燕に学べヤングママ
マイ・エコを目指し一人で自転車に
手を抜いた化粧マスクでカバーする
鶯に遠慮して鳴くホトトギス

鳥取県　佐伯やえ

朝まだき手作りの花くばり終え
ありがたや梅つけなされ食べなされ
会者定離ことしも咲いた夏椿
ハードルをひとつ越えては山をみる
先祖のくしゃみ畑売ることやめにする

鳥取県　松川行男

六月の結婚式に招かれる
誘われる間は元気さあ行こう
ビデオ取り只それだけの趣味活かす
ライバルのカメラの虚勢気にかかり
鯛焼のおばさんが居るビルの影

鳥取県　山本正光

生きている限り老後も税取られ
忘れてた活断層の上に住む
酸欠の脳です愚痴も聞きとれず
極楽へ行く旅費工面して生きる
十七年無罪で牢屋とじ込める

鳥取県　山下節子

座長さん役者が足りず馬の足
砂浜の熱さ知ってる足の裏
砂文字を背に書き合った浜がある
後期です相談役と言うポスト
戦争を語り継ぎたい穴もある

鳥取県　伊藤寿美

亡くしたものの大きさを知る白い道
悲しみを襞にたたんで笑う山
辛口の皮肉ジョークで切り返す
終い湯に今日の鱗を浮かばせる
三面鏡独り芝居が終らない

鳥取県　細田裕花

無口でも泥は時時吐いている
正論は遠慮しながら口に出す
懸命に私を守っている私
予定表書き込む夫嬉しそう
父さんへ十七音のラブレター

鳥取県　盛田夢路

シャボン玉やさしい世界信じ飛ぶ
ほととぎす鳴いて緑を濃ゆくする
束の間の夢と分ってクジを買う
膝小僧労りながら初夏の旅
浮き雲が亀に兎に姿変え

松江市　津川紫晃

屁理屈をぴたりと止めた咳払い
手帳から素顔のわたし現れる
欲の虫上手に飼って生きている
同居した孤独は誰も気がつかぬ
身に合った穴を見つけて背を伸ばす

松江市　三島淞丘

決着がつくまで鬼面外せない
正論を通し真っ向勝負する
ライバルが私の影を踏んでいる
大舞台踏んで一皮剥けてゆく
ロマン追い未知の世界へ一歩出る

松江市　川本　畔

真剣な嘘がお芝居演じきる
レモン水かすかに涼を響かせる
幻の母がときどき揺り起す
亀裂音蛍ぶくろが逢うている
カタツムリ背負う勇気をくれました

松江市　小川注湖

紙芝居あの戦後の街の角
夏祭り太鼓の響きわれを呼ぶ
この紋所見せたい者が多過ぎる
破り捨て楽になったと怒り失せ
お似合いの夫婦と言われ敷かれてる

松江市　安食友子

スケジュール寄る年波が邪魔をする
新茶入れ小満の日に灯も揺れて
格子なき牢獄のようです無音
アドバルーンその揺れ動き呪文かい
剪定も愛の鞭だと思ってね

松江市　松本知恵子

新緑の森に生命の声響く
これからが花踏んばって六十路坂
ほととぎす響くお山でリフレッシュ
幻想的な夜ふくろうと交信中
女ゆらゆらぼけ芝居の崖っぷち

出雲市　岸桂子

他愛ない悩みと友に笑われる
安木節不景気風を吹きとばす
好きなだけ泣かせてくれた一人部屋
少額の貯金通帳ばかり持ち
好きな色聞かれてすぐに赤という

出雲市　富田蘭水

母と子の遊びに愛があふれてる
孫の未来しょうこりもなく考える
三文の得は知らねど目がさめる
さだめとは無常の風が吹く事か
生きている朝飯うまくプランねる

出雲市　持田多輝子

人の名が急には出ないじれったさ
孫たちに恥じる事なき老いの日日
国運を背負う総理の改造案
逆境で結んだ友情うら切らぬ
仏壇の母の年齢こえて生き

出雲市　小白金房子

尼方の仏間ご恩の香を焚く
鍵かけぬくらし故郷の風が待つ
ひと時の余裕子牛と対話する
導入の子牛名づけて愛される
灯り消し牛も安堵の眼をとじる

出雲市　森　茂美

窓開けて朝のおいしい空気吸う
蜘蛛の糸背中に付けて出る花壇
花は葉に牡丹畑に夏が来る
夕方の月を隠して降りはじめ
山里は今日もおだやかさで暮れる

出雲市　伊藤玲子

賑やかな囀り夢の中で聞く
枇杷熟れて黄色くなった我が家です
天辺の枇杷は小鳥の唄代に
蚊遣り火に酔うた蚊とならいい勝負
欲しがらぬ胃袋なんて淋しくて

出雲市　石倉芙佐子

白い薔薇刺が無ければ良いものを
紅バラを息子にもらう誕生日
黄のバラ境界線はどのあたり
妖艶に黒バラ刺を隠し持つ
バラ園の香りに酔うている私

出雲市　多久和敬子

水溜り飛べる勇気をポケットに
幻の恋をさがして日が暮れる
泣いた日は自分の影を踏んでいる
勇気出しまっかな服を買ってくる
幻になってしまった母の味

雲南市　毛利幸

ほのぼのと癒しの女にふと出会う
五月雨に濡れて紫陽花生き返る
こっそりと他人の秘密嗅いでいる
へらへらとしては居れないこの時世
雨続き空を眺めて息を吐く

倉敷市　撰喜子

新人を教えるうちに教えられ
教えたい叶わぬこともある浮き世
やさしい目で時々嘘を言う天使
老いたとは言いたくないが顔の皺
議論よりまず実践と鍬を振る

真庭市　福嶋智恵子

孫巣立ち手持ち無沙汰の衣紋掛け
久し振り樟脳匂う着物着る
今までの苦労掻き消す披露宴
人並に孫の婚礼みる至福
更新のハードル高い高齢者

真庭市　国米きくゑ

曽孫の来る日暦に三重丸
指引っ張り二階に先導している気
泣き笑いアッと言う間の一週間
旅に出る留守は近所にまかせきり
ツーカーの付き合い近所のありがたさ

美作市　大石　あすなろ

弥陀の掌の中で転んでばかりいる
お茶の間で世界遺産の旅をする
二兎三兎追うて余勢を謳歌する
七十五日噂ばなしはシャボン玉
一枚のカルテと長い闘病記

美作市　福原　悦子

線香の匂い仏間に亡父が居る
招き猫ついでに財布覗いてる
年金の先細る夢老いの坂
故郷の視野に広がるれんげ草
草餅に亡母の面影甦る

美作市　山本　玉恵

多面体の女にもある愛一途
小走りも母似なるかとにが笑い
一言の軽さ命の火がゆれる
立ち直る日を信じての種を蒔く
睡蓮の花うぬぼれていませんか

竹原市　石原　淑子

奔放を求め魂海に出る
この指に止まってるのは陽炎か
ちいさいちいさい入道雲笑う
立ち尽くすうすずみいろの雨の瀬戸
地球大好き仲間と思う蛍とぶ

竹原市　岩本　笑子

迷ったらどうぞと石の地蔵さん
落ち着かぬ席だビールがぬるくなる
愛燦燦この世は常に不平等
くすぐってみたい夫の無表情
バラ活けるバラの心になり切って

竹原市　時広　一路

元気かでいつも始まる子の電話
春から夏さあ草共に負けられぬ
僕の顔しかうつせぬ鏡可哀相
さあ今日が始まる朝の眼鏡拭く
指十本まだまだ動きます八十路

川柳塔のぞみ 8月句会

日　時　**8月25日**（火）13時～
場　所　銀座区民館（地下鉄東銀座3番出口）
宿　題　（各2句）
「ワンコイン」「茹でる」「知らんぷり」
「自由吟」　1句
欠席投句　8月22日　必着　播本充子　宛
〒193－0832 八王子市散田町2－31－3

お知らせ

本社8月句会より、開場時間、締切時間が変更されますのでご注意下さい。
午後5時半開場→**午後5時開場**
締切6時半→**締切6時20分**
披講開始7時～

川柳塔の川柳讃歌 ㊻

木津川　計

悲しみの極みで声の無表情

居谷　真理子

声にも表情がある。滝沢修は「ベニスの商人」のシャイロックを演じることになったとき、演出の浅利慶太にある場面の台詞を悲しくはこう、怒ってならこう、泣きながらでは、憂うつそうには……、どのトーンでやりましょうかと、七通り語り分けたという。

見ていてしらけるのは、下手な役者が号泣しながら一滴の涙も流さない場面だ。そんな演技を山田洋次は許さない、とは以前にも書いた。声の無表情も御免蒙りたい。

春うらら甲斐も信濃も花の海

播本　充子

俳句のようにきれいな情景句である。もし「山梨も長野も花の海」だったら、この句はなんの取り柄もなかった。〜ウララウララウラウラヨ、山本リンダの「狙いうち」で随分値打ちを下げた「うらら」は、本来春の空の美しく晴れた田園風景を伝えて、〜春のうららの隅田川、に思いをいたさせたのである。「うらら」は都会的でなく田園的、今風でなく昔風、だから語感に敏感な充子さんは昔の地方名で「うらら」に対応させたのだ。

魂を実印に入れ生きている

鶴田　遠野

「人は一代、名は末代」、町奴の面目にかけ、幡隋院長兵衛の名を汚す訳にはいかなかった。たとえ命を失おうとも何のためらいがあろう。水野十郎左衛門ら旗本奴の槍ぶすまを前に、長兵衛はまっ裸で立ち向い、惨殺されたのである。まさに魂を実印に入れ、町奴の気概を見せたのだ。魂を三文判に入れる輩が多い世の中、遠野さんに見習わねば。

生きている証しに時々は怒る

堀　正和

嫁さんや家族への怒りが生きている証しなら、そんな大層な、で僕は採らなかった。

そうではあるまい。実際、日本人は怒らなくなった。60年の「国会解散、岸を倒せ、安保粉砕」の60年安保闘争を最後に国民的怒りは粉砕され続けて今日に至った。学生運動を四分五裂させ、総評を解体し、社会党を消滅させ、小選挙区制で共産党を封じこめ……、今や組織的反体制運動は、ない。生きている証しは、いつの選挙で明かされるのか。

コーヒーは二杯目沈黙がつづく

大石　あすなろ

小畑実の「高原の駅よさようなら」が泣かせた。〜いわず語らずに心とこころ、またの逢う日を目と目で誓い、涙見せずにさようなら。なんと無口で高倉健的な別れ方であろう。が、あすなろさんは別れもやらず、氷の如き沈黙が続くというのだ。

外食の寒きテーブルに話途絶え

文庫本読めば妻は泣きだす（宮崎健二）

辛い断絶である。あすなろさん、長い長い沈黙のあと、どうなったのですか。

狂言とお能　川柳と俳句

黒田　茂代

うまい！　茂代さん、いい得て妙です。

室生犀星は隅田川を羊羹のように流れている、と。比喩はかけ離れるほど面白い。梅雨とかけて何ととく。巫女の鈴ととく。その心は、きつうは振らん（降らん）。木津川計の「川柳讃歌」とかけて何ととく。鍵のかかったドアととく。その心は開（あ）かんがな、と編集部の方々が嘆いたはります。

茂代さん、歌舞伎と文楽は何になりますか、ぜひなにかになぞらえてください。

（『上方芸能』誌発行人）

自選集

森下愛論

新聞を全面読んで日を潰し
部屋中を奇麗にしても誰も来ず
夕映えの山を見つめて止まる足
沈みゆく夕日に照って山紅く
静かさはふと草木を友と見る

八十田洞庵

継いでは呉れぬ坐職の親父背が曲がる
前人の椅子は才能くらべてる
儲かりまっか誰も言えない世が悲し
アドリブも入れてまことしやかな笑み
タイミングよい冗談にぬくい風

両川洋々

反骨の虫がDNAを継ぐ
飢餓の子へ会席メニューなど毒だ
臨終と知らずに春の風覗く
辞世の句候補の句なら二つ三つ
忘れまい恩と言う木を胸に植え

阿萬萬的

高望みばかり足下揺れていた
微熱少々ついはまつてた虚脱感
雑学をぺらぺら浮いていた自分
大袈裟に喋り淋しさだけ残る
馬鹿になり素直に出直す事にする

板尾岳人

いつ迄も恋をしている陶冶の詩
恋人にしたいと思う銀の匙
責任は軍艦島に置いてある
母と来て翔べない父と笑う父
長い塀を疑っている妻の耳

奥田みつ子

五月雨に恋の古疵また疼く
はじめてなのに見覚えのある街並だ
胸底に正体知れぬ深い森
生き方を変えると空が高くなる
いきいきとまたしみじみと喜寿迎え

河井庸佑

曖昧な態度は嫌い父律儀
体調に合わせて変える散歩道
茶柱が立ち機嫌よく出掛け
分相応覚って無理はしない主義
スランプもプラス思考で堪え忍ぶ

鏡から不意に親父が顔を出す
人間だからみんな同じで皆違う
一本杉はずっと黙ったままである
表札の横から伸びている若芽
以下余白青いテントも悪くない

川上大輪

キノコ雲日の丸の旗持ってゆき
戦勝を信じて散った若桜
八月十五日玉音聞いた淋しい日
ソロモンで三年過ごした日を想う
都市を皆灰にしてから幕下りる

木村あきら

やることがまだある義父の眉涼し
平均寿命はとっくに過ぎている手術
義父の眼よ大手術にも耐えた眼よ
オペをした医師の笑顔を見ましたか
機関銃のように喋ってくる術後

小島蘭幸

文月へまた亡母を恋う雲の峰
溜め息をハローワークで二度三度
幸せを顔に出すので近寄れぬ
気化熱にむせぶ近くに君がいる
タンゴならまだ踊れると信じよう

小西雄々

人情味しっとり匂う電話口
無我夢中でした私の開拓記
どぼけてる顔はいませぬ蟻の列
無駄口は決して吐かぬおじぎ草
七十の絵皿薔薇色ばかり溶く

斉藤姦

この秋に鶴彬忌やって来る
妻の庭先ず朝顔の花咲きました
孫娘今年ナースになりました
ヒロシマへ平和行進やって来た
総選挙平和な日本作ります

塩満敏

ゴビ砂漠よりも寂しいシャッター街
テポドンに関心のない喉自慢
無愛想な顔ですどうぞご容赦を
引き潮に取り残された雑魚である
未来図のどこにも僕の影がない

新家完司

破る子もいない障子へ老いの影
心にもない冗談で芝居めく
一合も入ると勇気湧いてくる
家と家お茶を囲んでいる絆
まめなかと懐かしい字で来る便り

恒松町紅

三猿の吃水線を越す雀
床柱揺れて自立の旗を振る
三役をこなす女に城がある
青春を知らぬモンペが老化する
奇数でははた迷惑なバス旅行

津守柳伸

大阪に三日と居れず母帰る
そうやって子等でして来た送りびと
漬物の極みは母の塩加減
出稼ぎの月に白髪をいたわられ
裏山が売れ一丁目一番地

遠山可住

建前の一歩手前で立ち止まる
ひとり芝居の春の乱梅雨の乱
雑草に貰う懐し草いきれ
音もなく通帳に載る給付金
家庭ゴミイコールコンビニからのゴミ

都倉求芽

何もかも承知しているサングラス
源氏蛍も平家蛍もやがて死ぬ
魂が夢まぼろしに溶けてゆく
人の世に大きな波をたてている
山頭火の詩字足らずに雨が降る

土橋螢

心の臓おだてながらに古稀の駅
手さぐりに先の先まで道があり
永遠に命を乞うて生くとする
ことば惜しんで抜けた歯も悔い遺す
人混みの流れよ杖を庇えぬか

中原諷人

般若心経夫へ朝のご挨拶
いたわりの言葉に胸をえぐられる
自問自答堂々巡りばかりする
言うなれば目下青春後期です
節約とケチを一緒にする勿れ

西出楓楽

ウオーキングちゃんと講師に払ったか
こども会の会費公的援助はまだ
清談の会の会費も消費税
ドタキャンの会費が取れて名幹事
会費制ですが来賓名を呼ばれ

仁部四郎

手帳から若いわたしを掘り起こす
神さまの美学よ麒麟と象の脚
夏空へ放つ空想と言う翼
温顔の沖でときめく蜃気楼
身に付いた礼儀か医師のおごそかに

林瑞枝

七年会予報裏切る好天気
浜松は迷うことなく鰻飯
後期高齢航空基地もフリーパス
極楽は朝日を浴びて檜風呂
三年先幹事も決めて旨い酒

前　たもつ

アリバイのある一日で味気ない
失言は計算づくの上のこと
父の鉄拳は加減をされていた
健康なときは望んでいた告知
飛魚も地球脱出したいのか

三宅保州

外国の旅でインフルもらってくる
此の度のインフル命ねらわれる
五ヶ月もすれば新米取れますよ
インフルは何処の国もあわてさせ
田植すみ行く農協のバスツワー

宮口笛生

深夜便大人眠らす甘い声
人間が小粒に見える上り坂
転んでも土のにおいと苦のにおい
沈黙も刻も金なり梅雨晴れ間
石庭のみどり息抜く思いやり

宮西弥生

温故知新

氷屋の旗だけ夏がまだ残り
的確に且つ迅速に金銭が減り
働けど働けど蟻やせている

宮田不二

内幕は言えず矢張り寄付を出し
肩書きが変わり役得また変わり
割勘で出れば十五夜冴えわたり

村上ゆづる

お茶漬けで育った癖が抜け切れず
名刺など要らない程にのし上り
診断書書かせるための薬瓶

牟田一哲

学校へ持たせるだけのバラ咲かず
待合室みんな表紙のない雑誌
また一人癌の話に割り込んで

森本法泉子

―合同句集『私達』―
昭和三二年発行　選者麻生路郎

丸漫抄

小島蘭幸選

古稀過ぎて少し疲れた力こぶ
七回忌亡夫の笑顔まなうらに
湯煙の中へうっぷん捨ててくる
孫が来た日は新鮮な風が吹く
圏外でケータイ今日は休ませる
風の道知ってる母が水を撒く

芦屋市　竹山千賀子

新緑で快晴なにかしなければ
生きている顔は赤みを帯びている
転んだらそのままじっと考える
そろそろと決めねばならぬ臍の位置
正眼の構え時々脈が飛ぶ
不意打ちにあわないように散歩する

紀の川市　辻内次根

エプロンの似合う女に無駄がない
赤いばら抱いてわくわくする出会い
ユニークな顔が職場を和ませる

紀の川市　北山絹子

晴れた日は姑を連れ出す車椅子
充電をしながら明日の絵を描く
少子化へ国が傾きかけている

鳥取県　斉尾くにこ

手に残るアップルミントラベンダー
初夏愛でるナチュラリストのシクラメン
愛されずドクダミ白い火を燃やす
享楽の世を浄化して螢草
励まさず寄り添う露草のブルー
必要とされる日のためスクワット

鳥取市　近藤秋星

シンデレラも居たよ砂像フエスティバル
元の砂に還るか世界の砂像たち
覚えにくい名前だロシア大統領
亡母の夢見たよ泣いたよ叫んだよ
男気がほしい男の介護士に
交流会園児がくれたプレゼント

八十一たらふく食べて誕生日
覚悟したとおりの老いにまず安堵
そばにいるだけで嬉しいなんて嘘
幸せの各駅停車欲しいもの
言われても言われなくても庭は掃く
テレビ観てひとり政局叱ってる

竹原市　國實　力

人裁く自問自答の灯がゆれる
愛を盛る皿は素焼のままがいい
解決の鍵はこぶしの中にある
帰農する覚悟で郷の駅に立つ
アルバムに想い出遊びする良夜
蛇行して川はふところ深くする

和歌山市　福井菜摘

福祉から心尽くしがまた届く
タンポポの綿毛となって孫自立
生きた金生きてる中に使いたい
ダイエットする気はないと食べ盛り
偶然に手にした縁だ大切に
一枚を纏い酷暑に立ち向かう

雲南市　武島ちよえ

考えがまとまらなくてガムをかむ
生きるすべ一番疎いのはヒト科
スローライフ牛車で闊歩してみたい

大阪府　神野千恵子

一癖も二癖もあり書が生きる
人生の袋小路で遇った友
でこぼこの道ふるさとが語りかけ

横浜市　長島亜希子

元気だなあどなりあう声隣から
不況下で流行るお店の知恵と汗
妻子と夢見なさい僕も見たように
教育ババにならないようにさりげなく
これからは若い友達増やしたい
見かけより便利さリュック背負う歳

堺市　大隅克博

平凡な中に溶けこみ色を出す
現実を少しぼかして楽になる
歯痒いがやはり真面目が性に合う
中傷を素手で受け止め痛かった
査定額ゼロと言われていとおしく
生真面目に女性のいやをいやととり

海南市　小谷小雪

福も禍もお入りなさい半開き
半畳間座り直して読書する
会議前半分以上決めてある
ごっくんと清水飲み込む道半ば
休肝日危うい場所に近付かぬ
ピーナツをほちほち名案を探す

メルボルン　藤原　ポン吉

マスク着け逆に疑惑の目が光る
咳払い受ける視線の痛いこと
風邪引いてみんなこぞって休み推す
そのうちにマスクに国旗付きそうだ
大流行それでもマスク着けぬ国

札幌市　三浦　強一

不言実行愚直の汗が美しい
酸欠の街でケータイ溺れてる
メイドインチャイナにいつか馴らされる
ウォーキング同じメタボの犬連れて
妻の留守独り暮らしを試される

藤沢市　加藤　スズコ

命日に花を供えてくれた嫁
シベリヤに花も咲く頃亡夫の忌に
うぐいすの初音目覚めるみどりの日
風を読み春をさがしの車椅子
笹まきが里の香りを乗せて来る

横浜市　巌田　かず枝

健康に良かった日焼け悪となり
品格は家に忘れて食べ放題
会議室大きな声に流される
菜園を荒らすバッタのおちょぼ口
愛犬も介護保険のいる時代

横浜市　川島　良子

プライドのカケラがあちこちに刺さる
記念樹も孫もスクスク初夏の風
私も変り者ですキミが好き
縛られるくらいでないと続かない
いつもなら笑えるはずの今日のウツ

静岡市　渡辺　芳子

地球人地球の幸せ考えて
握手して別れたかった旅立つ子
涙出る落語に一年生きのびる
つぎつぎと芽吹く花芽に負けました
おみやげの茶碗に書かれた無理はするなよ

岐阜市　平野　あずま

ホテルには行かぬ僕にはホームバー
国文科誤字堂々とラブレター
五七五学ぶ余生のかたつむり
衣替えもったいないを再度着る
里山の緑地球の呼吸きく

和歌山市　堀　冨美子

スイッチの切り替え私を軽くする
嫌悪感今日の私をシュレッダー
舌を噛むカタカナ病に悩まされ
梅雨空へ少し派手めの服を選る
御苦労様鏡の皺に労られ

和歌山県　森下　よりこ

遊びか仕事か時々分からない畑
ちょっと留守にしますラジオをつけて出る
少しずつみんな許して花暦
人の作った野菜をたまに買って食べ
どくだみが裏の空家をとり囲む

紀の川市　宇野　幹子

両の手で掬えば水も丸くなる
追憶の中へとつづく狐雨
終章の駅で外した鬼の面
乾いたら故郷の森を見に行こう
ブクブクと感謝忘れた蟹の愚痴

田辺市　大峠　可動

暁のラッパはむかし鶏だった
百花繚乱呪縛が解けぬピカソの目
末弟が我より先に逝く嵐
散り際の花もこの世が好きだった
この掌からやがて生命野に落ちる

大阪市　萩原　大朔

連れ添うて六十路の坂をどっこいしょ
夕暮れが人寄り添わす中之島
同情が微妙に変えた風の向き
抱く猫に幼馴染みの温かさ
偉いのはアナタでなくて会社です

大阪市　安藤　なつこ

祈る時女は一番美しい
風邪の神どうか静かにおやすみを
精出せば仕事の神が降りてくる
あの世にもイケズやワルサはいてるかも
葬式でしか会えないねいとこたち

大阪市　尾崎　ゆめ

テコ入れにバラを一本加えよう
ロマン追いかける男に苦労する
だんだんとかかとの皮が厚くなる
でもいいのどうせ届かぬお月さま
情熱の果てにくるのは夏の風邪

河内長野市　山室　光弘

趣味の縁つかず離れず心地よい
ひらめきが行きつ戻りつ句が育ち
負けるもんか金はないけど意地はある
鬱の字を覚える根気とてもなし
可愛いね機嫌良い日の妻の顔

河内長野市　木太久　正一

だんだんと進む老化に向い合う
老齢をかしこく生きる術を聞く
愛犬を話し相手にする暮し
主夫として料理の腕を磨かねば
テレビから献立ヒント貰う日々

どっこいしょ今日も元気な母がいる
もったいない癖が身につき片付かぬ
元の値を見せびらかしている半値
片減りの靴磨いて父に感謝する
ゴミ出しは父の仕事で家平和

泉大津市　助川和美

無口でも二人でごはん食べてます
携帯は通話ゼロでも持っている
実家では娘お客になっている
笑わない夫が綻ぶ孫が来る
米寿の師祝う我等も古稀の坂

羽曳野市　宇都宮ちづる

休校が続き学校好きになる
雑踏は避け連休は草むしり
ほどほどに飲んでカラオケ吉幾三
頼んでもいないサンプルよく届く
宇宙にもやがて国連ゴミ処理課

箕面市　寺井柳童

あじさいの上が天下と言う蛙
献金のからくり澱む風となる
マジックは嫌いサギ師に見えるから
絶えるまで目覚めることのない目高
淋しさは愛車に愛想尽かされる

豊中市　源田啓生

陽の恵み布団に溢れ子を包む
人を優しくして夕焼けが山に入る
ばあちゃんの知恵それとなく三つ四つ
若緑何も足さない清らかさ
初月給バラとケーキで迎えられ

八尾市　赤木妙子

不意の帰省喜ぶ母の顔がある
日曜日高速道ののろいこと
ささやかな妻の反抗仮病です
考えずとも足は交互に前に出る
考える人いつになったら答え出る

尼崎市　藤岡りこ

青空を見上げて想う八月忌
ラムネガランと真夏の涼を流し込む
のほほんと心配ごとがひとつあり
舟唄に揺られて独り眠ります
あの世やら此の世やら炎天下に独り

西宮市　吉井菜々子

折れそうな心にしみる友の声
親しい人の訃報が続く雨の音
明暗を分ける言葉のヤジロベー
お一人様一枚だけのマスク買う
どちらかの一人が残る舟を漕ぐ

三木市　広瀬房江

喪中なり心のドアは半開き
家族絵に座った猫はもう居ない
詐欺罪になりはしないか梅ジュース
私だけ見つめてくれるペット飼う
ソラマメの綺麗に割れる潔さ

鳥取県　稲村遊子

給付金受け取りました総理殿
人生に笑いも貰い泣きも見た
一日の代償ポンと発泡酒
深夜の電話術後の兄を胸過る
憂うつな胸を開きに友が来る

鳥取市　津村律子

手探りの中で掴んだ遊び部屋
真夜半の月が小窓から覗く
ゆりかごに救い求める郷里の駅
達筆にしばし見とれる師の手紙
おにぎりに塩を効かせて子に持たす

鳥取県　大塚美代子

立山の天辺で野点と洒落てみる
酒煙草ない地球なら住み易い
旅三日戻る故郷の赤い夕日
残るは五人兄弟みんな後期高齢
諦めたら負けだライバル追いかける

安来市　原　煩悩児

給付金思い通りに使えない
友からはプラス志向のメッセージ
作業着の言葉やさしい田圃道
変らない花も笑顔の里の庭
梅干しも絶やさぬように漬けている

松江市　山根邦代

従順でないヒマワリも異端者も
紙コップ握りつぶした癇の虫
豆腐油揚まだ路地裏にある昔
田植しただけでコシヒカリは食えぬ
夜明けまでに牛の草刈る農だった

美作市　小林妻子

自転車に夏の空気を入れてやる
いつまでも夢の続きをみて飽きず
一枚の絵にうずくまる軽い罪
握手する貴方のぬくみ抱きたくて
この世にはこの世の音色鈴を聞く

府中市　馬場利子

世界はどうあれ頑張るのは私
つっかい棒私にいつもある幸よ
待ち合わせ自販機のある場所がいい
笑顔送ると笑顔の嫁のEメール
手作りのおじゃみ枕の癒す梅雨

竹原市　若年幸子

九十歳えびすの面を外さない
読み違いの弔辞を誰も咎めない
過去の恋ばっかり喋る鳩時計
お行儀の悪い客居るバーゲン日
当り前が感謝に変る自立の子

竹原市　土井輝恵

八起き目に老人力が試される
努力目標あと八年の米寿まで
敵味方そんな区分けはもうやめた
おっかないお方がやがて杖になる
生きたくも死にたくもないこれ本音

香南市　桑名孝雄

人はみな優しくなれる愛されて
母の愚痴さらりと流す父である
クラス会心の隅にある火種
古傷に時々レンズ当ててみる
蕗の傘コロボックルが出てきそう

大洲市　花岡順子

時流れ夢消えてゆく寝台車
犯罪も都会並ですわが里も
人生のチェンジ時代の波にのる
幸せが涙にかわる絆かな
氷山が地球変化の鍵にぎる

唐津市　吉冨節子

命絶つ人を救うは政治のみ
自殺者を無視してなにがインフルか
核持たぬ誇りを示せ日の丸で
核持たぬ先進国と言われたい

シドニー　三谷たん吉

せんべい布団これが私を強くした
百歳にみんなで行けば楽しかろ
ユーモアも虫の居所で敵となる
新子節花の結び目二度捲る

札幌市　小沢淳

家計簿に赤字の訳は書いてない
うちはまだ去年のいもを食べている
年金の額で序列がまたかわり
本心は素直に絵馬に書けもせず

佐渡市　高野不二

心を癒すこの一杯の旨さ哉
長生きを趣味道楽で呆けず居り
スニーカーに発破をかける万歩計
先輩と言われ割勘言い出せず

東京都　井上つよし

ルーキーを我が子に重ね熱くなる
新型も高齢者には旧型に
参観日手を振りすぎて苦笑い
白髪染め今日ははつらつお出かけ日

東京都　高岡弥生

石庭をツツジが調和して映える
学校出の造園業の腕の冴え
柳誌来る頃だとポスト二度三度
医も警も当てにはならぬ自己管理

草加市　飯土井　健翁

トップにはなれぬが足はすくわれぬ
大見出しだけが頼りのスポーツ紙
肩書きの消えた名刺が出たがらぬ
ふるさとの山はやっぱり登るもの

昭島市　野口　忠

子に願う考える力と和の力
明け易い昔々の家に住み
鯉はねる音今日を元気に生きる音
薫風をうけて唯今吟行中

栃木市　岡野　すみれ

新緑が記念写真を引き立てる
知らぬ間に地名が付いたブランド牛
父の日を知っているかと孫に聞き
郵便は急がなくても着く日聞き

野田市　高橋　保雄

新モールシニア様用ありません
禁煙席申し訳にと仕切られる
どの党も組織の土台砂の上
マスク買う列に並んで身構える

北名古屋市　片岡　文男

サービスをされた覚えもないチップ
冒険も遊びも知らぬ規格品
お局が新芽を摘んだ更衣室
解決へ特効薬となる諭吉

豊橋市　藤田　千休

田植えすみ緑の風も心地好く
失敗談わらい飛ばしてくれた友
好きなことつづけてアハハへこたれず
さあ田植え皆で父さん持ち上げる

和歌山市　根田　よしこ

晴天の天気予報に蛙鳴く
スーパーで出逢う彼氏が多くなる
たわい無い話で終る親子丼
アンパンのあんこも減って遣る瀬無い

和歌山市　坂部　かずみ

長男は叱り長女は諭す父
写メールが北海道を近くする
マドンナが微笑み返す給付金
ごみ袋隣りの家が透けて見え

和歌山市　磯部　義雄

すこしだけ嘘も加えて孫自慢
泥んこの遊びで心洗う子等
面白い話に嘘のかくし味
ティータイム田植の顔は泥化粧

岩出市　村中　悦男

止めさせるそれも愛だと知りました
居酒屋でちょっとほろ酔い夢語る
哀しみを黒いドレスに閉じ込める
大皿にあふれんばかり愛を盛る

岩出市　藤原　ほのか

妙な時妙な度胸が顔を出す
水平線が包んでくれた叫び声
どん底に落ちて目覚めた真人間
転落し目覚めた初心抱いて生き

橋本市　石田　隆彦

一言をぐっと呑み込む胃の重さ
約款の小さな文字に意図がある
素顔で嘘つけず助けの紅を引く
此処だけの話のドアに鍵欲しい

京都市　藤井　文代

老いた木を抱いて木魂の声を聴く
インフルのマスク美人はそこここに
迷い込んだ道それなりに生きて来た
亡き母の鎮魂の沙羅咲く忌日

京都市　清水　英旺

傷心をやさしく癒す釈迦の笑み
傷ついて人の優しさ知りました
介護する太いやさしい掌が温い
ウォーキング路地吹く風が心地好い

奈良市　矢野　良一

山焼きの火の粉を受けて縁起よし
阿修羅様江戸へ出張しています
阿弥陀堂森閑として霊気受け
落語好きどっぷり漬かり弟子となる

奈良市　阿部　茶々

老い二人猫がとりもつ昼さがり
躓いて今いるところ確かめる
シンプルに生きるわたしのくつろぎ場
テレビは仲間時々は意見する

奈良市　尾畑　なを江

定年後ひとり遊びを身につける
一円のこだわり主婦の底力
モナリザの謎の微笑み真似てみる
悔しさを丸めて飲んでバネにする

奈良県　谷川　憲司

鍵要らぬ田舎の暮らしまだ残る
美意識が少しズレてるオシャレして
五月の庭誰かに自慢したくなる
親知らず今も大事に持っている

奈良市　辻内　げんえい

密林に潜み祖国の母想う
何しても合格点をくれぬ妻
付和雷同楽に生きるがつまらない
青梅を漬けてワインと飲み較べ

奈良市　岩本　浩二

奈良市　田中賢治

添え書きの挿絵あやかるかきつばた
水平線夕日添い寝の波枕
仲良しも相合傘で照れている
千年も添わす匠の樹の命

生駒市　小西稔

乳飲み児に添う母親の目に涙
夫婦仲けんかの元は勘違い
街角の荷車消えて競馬のみ
村祭りさむらい姿馬上芸

大阪府　小栢こずえ

もう捨てる言うと何だか惜しくなり
欠点の一つや二つ笑みで消す
頼るのが嫌いでついつい無理をする
赤提灯ないが蛍が癒しです

大阪市　橋村容子

深緑に野山が私を呼んでいる
ほほえみが自然に湧き出る菖蒲園
泥沼に田植嬉しい一年生
想い出す懐中時計に父のこと

大阪市　寺井弘子

五月晴汚れた心洗い上げ
洗い浚いぶちまけ晴れてハグされる
祭囃子鎮守の森も目を覚ます
商魂に便乗される給付金

大阪府　西川冷子

流行り風邪やっと治まりママ自由
最後の釘孫に打たせる道具箱
バイキング取ってきすぎて苦労する
桶風呂を話して聞かすバスルーム

大阪市　浅田操

孫作る紙人形と二人づれ
ラブレター肉筆でこそ涙落ち
字が下手と言い訳しつつ記帳する
万一に住所書き込み持ち歩く

大阪市　笠嶋惠美

満足度五〇と決めてから気楽
晩節に有るがままゆく命の火
ストレスにケーキ食べさせさようなら
趣味のあと食事をかこむ良き仲間

大阪市　吉川弘泰

ほがらかに笑い転げる一輪車
盃回る浜焼きされたほたて貝
遠花火蚊の一匹に邪魔される
日焼けした肌にシャワーで一呼吸

大阪府　畑中節子

おいしさの秘伝を捏ねる深い皺
インフルに祭も消える風邪の神
鶯のわかき初音に足を止め
茄子トマト畑で力貰う朝

大阪市　太田　としお

慣れました新インフルもテポドンも
居るだけで絵になるような妻と添い
ライバルが育ててくれた今のボク
刻々と命を惜しむロスタイム

大阪府　松田　聰

九条は継がねばならぬ子に孫に
発泡酒の味にも慣れてきた不況
遼君の素直さうちの子に欲しい
大不況だけどビルたつ家も建つ

大阪市　山本　加お里

食欲を満たしてくれる旬のもの
無農薬虫も寄り付くほんまもん
手抜きして老々介護きりぬける
定年後暇を楽しむ人と住み

大阪府　高木　道子

蕗さんしょ田舎の味に嘘がない
温暖化そのうち地球が赤くなる
童謡に心優しい四季を聞く
明け放ち水無月の風とりこにし

大阪市　平井　露芳

脳からの指令通りに鶴折れる
安全宣言マスク外してほっとする
いらっしゃいマスクの上の眼が笑い
何でやねん気象予報士みな美人

大阪市　吉田　富美

かまきりの構える鎌を風くぐる
真夏日の小さな母の束ね髪
朝露の残るトマトを食べた日よ
人生の旅に節あり点滴す

大阪府　若月　祐作

鬼太鼓男の背なが躍り出す
米寿までそのままいけと夢枕
日本海北の空から鉛色
給付金足して施設に届けます

大阪市　吉内　タカ子

納得の行かぬがままにペンを持つ
見捨てねば思う夫に構い過ぎ
浮世です灰汁を上手に使い分け
風向きをどうあれ通す真正直

羽曳野市　森下　一知

近道にドリンク剤の空容器
拘りが牛のよだれを守り抜く
海岸のゴミにアジアの三つ巴
外材に押されて怒る杉花粉

羽曳野市　仲谷　真一

マスク無い石油ショックを思い出す
大不況鉄腕アトム助けてよ
現代の浦島太郎冤罪人
自動車が電気屋さんの店頭に

田圃にはおたまじゃくしが生まれてる　羽曳野市　松本静子

紫陽花に蝸牛居て安堵する
紫陽花は雨が似合うの青ピンク
鴨川の納涼床で食べた鮎　八尾市　前田紀雄

駅ホーム前後左右を見て並ぶ
梅雨に濡れ完熟を待つ茄子胡瓜
梅雨入りで晴耕雨読恙無し
ちっぽけな選択よりも大手術　八尾市　田邊浩三

腰も膝も脳も体操待ってます
電子レンジだけが頼りの妻の留守
連休はスポーツジムの皆勤賞
月給が上がらず血圧が上がる　八尾市　松葉君江

体操でよどむ血液すみずみへ
好奇心若さ引きだすエネルギー
読み聞かせ親から子へのラブレター
川柳の温い空気が人を呼ぶ　八尾市　中島春江

ちょっと見は真面目な人の裏の顔
ほんわかとぬけた人だが人気者
豌豆飯をうましと言いし友偲ぶ
梅酒の封切って米寿の姉祝う

さくらんぼ試食で逃げる高価なり　枚方市　坂本ミヨノ

酢の勝った激しい妻のすしの味
梅雨晴れ間紫陽花の露花鋏
太らない秘密聞かれて苦笑い　枚方市　小川良吉

スーパーのチラシで決まる晩ご飯
ミス続きボケが気になる傘寿まえ
北鮮の民も平和がほしいはず
梅桜あじさい続く寺めぐり　枚方市　河田洋子

今日からと買った日記が続かない
今からは好みの趣味で惚け防止
今だから言える初恋エピソード
趣味仲間増えてすてきな年をとる　河内長野市　内海綾乃

田舎には自然が一杯来てほしい
右に杖左重いが歩いてる
きれいずきで家具の上など撫でている
子供三人大学出したのに皆無職　河内長野市　辻村洋子

突風に帽子とばされバレました
ダイエットあっと言わせてみたいもの
濡れネズミ天気予報に逆らって
英会話老いた脳にも活性化

河内長野市　針生和代

にぎり飯だけでご馳走登山帽
主導権だんだん妻へ移り出す
梅・ラッキョ・生姜を漬けて夏を待つ
孫と行くデパート老いの華が咲く

河内長野市　山本莞子

ずっこけた母が気になる簾れ越し
電話口ボンボン時計久しぶり
年金も三度の飯も有難い
天保山登り切ったと誉められる

堺市　羽田野洋介

同じ時間昔はもっと長かった
川一つ越えれば空気変わるかも
あの頃の奇妙なことがいま普通
たかがテレビされどなしではすませない

堺市　近藤治子

玉の汗かいて働く君に惚れ
別々の趣味ではじける定年後
非常時に備えた物で狭く住む
役立たぬ非常袋が有難い

寝屋川市　小嶋みさと

額紫陽花（あじさい）は王女の気品漂よわせ
早逝の友の寝顔は凜として
汚獨の世六根清浄生き辛い
老夫婦トンチンカンだがうまが合い

寝屋川市　岡本勲

キッチンで夫泳がす定年後
自転車で緑の風とデートする
ふる里の風逢いたくて汽車に乗る
アンテナの向き変えて見る余生です

高槻市　片山かずお

諍いが果てて無言の膳になる
割り勘の端数幹事を困らせる
いい笑顔お腹の中を見てみたい
ほどほどにしたいが猪口に手が伸びる

泉佐野市　稲葉洋

この国に盆と言う日のレクイエム
平和への夏繰り返し繰り返し
裁判員己は規矩を守りしや
高齢と後期をいっそ売りものに

岸和田市　中岡香代

鉢植えもシナリオあって咲き誇り
病院は眼鏡マスクも怪しまず
ざっくばらん過ぎても人は嫌われる
夕暮に少しネジ巻く昨日今日

門真市　矢阪英雄

生きのびて今年も紅い花にふれ
背をのばし明日へ生きると酒なめる
泣き言を言わないつもり目をとじる
前を見よ叱咤の声が逆転し

命日に亡夫の好きなメロン買う
薬草のお茶に仏もにが笑い
土壇場で内気な男の意地を見る
胸底に開けてはならん窓がある

吹田市　二宮栄子

人の目がなくても掃除するやろか
幼な子は口の中まで可愛いね
ラブソング聴いても涙出なくなり
過去形で告白し合うクラス会

豊中市　荒巻夢

居酒屋の意気投合へ夜が更ける
暗算に弱くてレジに任せきり
雑草も生えない土地があるんだね
まあいいか時代の枠で育つ子ら

池田市　上山堅坊

CMは満額補償する保険
響き合う友が数人いて温い
群れているただそれだけの駄馬で居る
偉人像馬の威厳を借りて建つ

茨木市　島田誠一

叫べ鳴け一日の命蝉の声
ステテコと団扇風鈴夏の夢
子等が住む都会に別の墓を買う
一人立つ風の岬に一人立つ

宝塚市　丸山孔一

拗ねる子を祖母は寝かせる術を持ち
怒るのが一番似合う父の顔
火が走る福を呼んでる二月堂
玉砂利を踏めば聞える神の声

尼崎市　河津正治

腹八分目指す体重維持してる
種子飛来隣と同じ花が咲く
どくだみはニキビ少女の頃のこと
ランドセル背に馴染む頃梅雨に入る

尼崎市　小池幸子

人よりも自然の力上でいい
少子化の村に大きな鯉のぼり
心にも水分補給して生きる
まだあったアイラブユーの期限切れ

神戸市　早川孝子

酔いどれてもう言い訳が通らない
迷いから醒めて昨日と違う空
すいすいと階段のぼる出世魚
階段で鍛えてくれる妻の笛

神戸市　山崎武彦

極めたと思った先にある下り
車中から動体視力鍛えてる
朽ちてなお夢を吸いたい木の根っ子
乗り易い男に飴をしゃぶらせる

明石市　糀谷和郎

栓を抜く音が暑さをやわらげる
人形に毒舌吐かす腹話術
握手した手の冷たさにある不安
あの人にもれた秘密は今日限り

西宮市　足立　茂

待合室他愛ないけど話が続く
二十四時の検査不安の心電図
わが事と思案充分聞き上手
季はめぐるバラ園招くバラ咲いた

加東市　黒崎　美紗子

気の遣い気づかいつ乗る車椅子
太陽公園ひと日巡りの石エリア
まだ画ける余力引き締め思い入る
今以って川柳と絵の二兎を追う

加東市　岩本　美緒子

読んだこと忘れ終わりで気付く本
生き甲斐になるまで遠い趣味の道
衣替え髪も一緒に染めてみる
パスポート使って孫に会いに行く

加西市　金川　宣子

十三忌亡父さん今は何処あたり
やりたい事山ほどあって待っててね
次々と出来るだいご味満喫す
二切が便秘を直すさつまいも

兵庫県　永井　かほる

穏やかな森林浴に甘んじる
バラ園の花にかこまれ時忘れ
庭のすみ遠慮しながらスミレ咲き
足腰痛お年ですねと医者は言う

三木市　山口　久子

カラフルな洗濯干せる月曜日
同窓会元ライバルの背が丸い
ボケ防止孫のメールが刺激くれ
亡母の声今日も聞きたい夢続き

三田市　辻　開子

年金の一人暮らしも板につき
絹こしに生姜をすって梅雨の膳
朝のコーヒー今日もおいしくありがとう
新釜に買い換えようか給付金

篠山市　谷田　多美子

鷹揚に構えたままで共白髪
華咲かぬ人生も賞めおくりびと
人生の余白を活かす老年期
優しさを求めて老いの里帰り

川西市　日野岡　和之

一杯の水に出会えた迷い道
打ち込んだ自慢のサーブすぐ戻り
顔洗う水は外気のままで来る
打ち鳴らす太鼓祭りが燃えている

鳥取県　加賀田　志延

寒暖の差にうろたえて二人住む
空晴れて杖を頼りの夫誘う
何処見てもキラキラ車不景気かい
化粧して背筋伸ばして街を行く

鳥取県　岩崎和子

今年またツバメもアユも来てくれた
清流でなくても河鹿鳴いている
卯の花が咲いて田植を急きたてる
人類は遊びで進化して来たが

鳥取県　鳥越鬼一

訪ね来た子らと語らい幸ひたる
愛なんて盛り過ぎれば霧のよう
新入りの美女が能率アップさせ
雲行きを読んで会議を泳いでる

鳥取県　岡村孝明

竹の子の菜に満足夢さそう
飼い犬に振り回されて日が暮れる
お陽さまが青空に恋虹が出る
ぽっかりと浮く白い雲田植歌

鳥取市　谷岡清子

給付金知らない老女村にいる
給付金亡母の年忌に溜めている
杭一本抜いて喧嘩の基となり
仏さま正しいほうに味方する

鳥取県　下田茂登子

スポーツを続ける事で身を守る
大きい手仕事たくさんした手だね
梅雨晴れ間わが家の梅も取り頃だ
朝一番血圧計に身をまかす

鳥取県　橋谷静江

近道を抜けて怠惰の風が吹く
米作りに富む日本が活かされず
じわじわと六十路の加齢速くなり
祝福が降る赤ちゃんのお誕生

鳥取県　西谷悦子

嫁いだ娘主婦がしっかり板につき
月下美人夜に咲いて誰を待つ
長生きも良いことばかりない暮し
私の字書いた自分がよう読まぬ

鳥取市　山口千代子

写真はいつも笑顔の私です
お月様相談聞いてくれますか
落し穴そんな遊びもしたことも
気付いたら貴方の傘の中にいた

鳥取県　飯野菖子

元気かであと続かない男親
大声の親父いつしか蚊帳の外
睨む目の奥に慈愛をみつけたり
身をけずり霊場めぐる杖と師と

鳥取市　高浜勇

心持ち手厚い看護嬉々とする
忍者の目睨みきかせた赤とんぼ
鯉のぼり大きな尾鰭夢をかく
砂の像が夕日に染まり見えかくれ

鳥取市　坂本なつみ

くせ理解手網引きつつ二人旅
久し振りマスクはずして幼友
銀色に輝く鮎の里帰り
躓いた石を二人で拾い持つ

鳥取市　大前安子

顔中を覆うマスクが愛らしい
めがね美人マスク美人が右往左往
合格に子離れできぬ母残し
帰宅後は名札はずしてボクのママ

鳥取県　岡本幸枝

欲張りでいたい恋にも仕事にも
諍いも笑いもありて三世代
貧乏神我が家素通りしてほしい
マスクでも喜怒哀楽の眼が語る

鳥取県　田口清帆

小さな夢消えて不安な高齢者
衣替え去年は何を着てたっけ
若いママ姑をモデルにして平和
高齢のモデルファッション何で無い

倉吉市　前田喜美子

逆もまた真なり夫が妻の役
逆説を説いたばかりに四面楚歌
隠すことなくて平和な日が暮れる
うわべだけ飾り中身は空っぽだ

倉吉市　酒井芙美子

衣替え学生服も軽ろやかに
さわやかな風にゆれてる田植苗
久し振りかじか鳴く川なつかしく
霧の朝カッコウ鳴いて初夏思う

倉吉市　藤井美津恵

天めざし指を数える老いの趣味
若やいで夕陽追いかけ散歩する
親の小言少しは解る年になる
娘に送る作る野菜は無農薬

米子市　見山温子

寿命差かどこも女でにぎやかだ
日暮しの川柳ひねり脳刺激
本読める時間出来たが目が霞む
老いてから老い方の本読んでみる

米子市　加藤正二

エコバック忘れ小声で袋もらう
母兄の二十五回忌顔揃う
終章の道はゆっくり小幅足
再会が不安だ振る手小さくなる

米子市　小塩智加恵

芝居上手に世の中渡る裏表
五月晴れ疲れを知らぬ鯉のぼり
いい気分朝一番の茶柱で
健やかな笑顔はじける優勝旗

米子市　猪森スミエ

ローヒール心は赤いままで履く
スタートはいつもわくわく尻すぼみ
欲張って四季咲きのバラ買って来る
お目玉も頑張れコールにして生きる

米子市　吉田陽子

雨もよし晴れもまたよし花あやめ
政治劇これ喜劇かな悲劇かな
猛犬も俺を見下げて知らん顔
インフルと不況で地球青い顔

境港市　中井虎尾

ここにいるただそれだけでよく眠る
五月です新茶の香り部屋中に
雑音も四捨五入して今日も生き
ふる里が恋しいと泣く鬼瓦

雲南市　渡部好榮

検診のひょっこり出合う紙コップ
ごめんなぽつり聞こえた青い空
雑音に慣らされました自由席
ややこしい話苦手とコップ酒

雲南市　菅田かつ子

気張らずに歩け歩けと白い靴
ありがとう君のヒントの一行詩
今日を終え五七五で睡魔よぶ
愛国心そんな時代もありました

雲南市　福間博利

跳び箱を十段積んで走り出す
嘘つきの尻尾を踏んでから笑う
すれすれのヒットを重ね大記録
新聞に載ると地元でちょと響く

松江市　相見柳歩

夫婦して気合でやった船神事
お気に入り十二球団一人ずつ
エプロンで体型カバー板につき
母さんは元気印とあてにされ

松江市　松浦登志子

藍染めの目にも鮮やか高瀬川
手を握り別れ惜しんだ始発駅
色褪せに母のハガキを大事がる
孫の芸身振り手振りに目を細め

出雲市　川島和歌子

つるつるのお湯に人生垢流す
旅に出で私は蛙だと感じ
酒酔の毒舌聞くのもボランティア
激安の広告見ても浮かぬ腰

府中市　岩本雅代

六月の陽ざしに凪いだ海笑う
海を見て大きくなれる山育ち
納得のいかぬ話が前に出る
目立ちたくないが無視では困ります

府中市　藤岡　ヒデコ

アメンボは水面走る忍者かも
早世の次男の傘を借りて立つ
俄雨暫時上がりを持つゆとり
雨止んで期待ふくらむ虹の橋

竹原市　六田　半徳

楢山とはこんなものかと八十独り
縄電車いつか独りになる怖さ
遠吠えの意見が的を突いている
せせらぎに故郷の亡母恋う山の宿

宇部市　高山　清子

残り火が火種となってもえ始め
難聴へ耳鳴りだけがついてくる
風に乗るうまく乗ったがつむじ風
なにもない一日でよい日本晴れ

香南市　近森　功

今が旬生きる喜びボランティア
スローライフ晴耕雨読の時刻む
念入りな化粧車中の一仕事
物差しは十人十色面白い

北九州市　小松　紀子

爺さんになったねヒゲを笑われる
反動をつけねば立たぬ腰たたく
とっておくあれもこれもとわびしいね
過去を捨て一人暮しが集い寄る

唐津市　岩崎　實

変人と言われ研究悲願なる
吾が里の棚田惨めな雑草地
二次会の道中そっと消えました
世の流れ親の時代の名前消え

唐津市　北村　松風

仏の間に丹精こめし百合の花
米寿なりお寺様より念珠受け
息子病み母の厄落しなりしか
十七針医学の変り小さき穴

山鹿市　阿部　ミツ子

「各地句会だより」掲載について

川柳塔社の小集句会の紹介・アピール・会の様子などお書き下さい。会員の集合写真を添えて下さい。順次掲載させていただきます。

行数―たて20字×54行（1080字）

麻生路郎句抄

（句集『旅人とその後の作品』から）

大空愛慾

胃病の子まま子のような膳につき
子を泳がせて沖の景色は目に入らず
どの子もどの子も息災でお元日
風よ吹け抱いている子へ歩く子へ
いつしかに母とおんなじ美顔水
腰が砕けたように娘の舞い納め
母の子に違いはないがアナキスト
お茶漬けを蚊帳の中から聞く息子
年頃は桜の咲いた様に生き
一人子のどんな玩具も淋しくて

亡きロンドンを想う

みじかしというかほんとに生きた子に
被人（きて）のない帽子があるに気がつまり
だす入りの一つ欠けてもがたがたし

学校の横に住みて

子を死なし学校に子の多いこと
おおきな事実子が死んでいる
まだ弟があるようにいう悔み聞き

ロンドンを懐う

三周忌今はつかわぬ硯石

二男アート危篤

汝の父はロック氏液をささげ立つ
子が病んで店をしめるのかと問われ
藪医者というているとは子から聞き

愛染帖

新家　完司　選

雷鳴にまだ生きる気で逃げ帰る　浜松市　岡田　史郎

（評）日頃は「いつ死んでもいい」とか「ポックリ死にたい」などと強がりを言っていても、いざカミナリが鳴るとコワイ！コワイ！

年金は減ったがお布施減らせない　堺市　志田　千代

（評）お布施は「お心のままに」が本来の姿。「収入が減りましたので…」と減額を申し出てもいいのだが、ちょっと言いにくい。

頑張れをムリするなよと言い替える　堺市　羽田野洋介

（評）励ます言葉の定番「ガンバレ！」を嫌う人が増えてきた。が、それに代わる適切なものがない。さて「ムリするなよ」は如何？

雀チーチク便座ホコホコ一句練る　寝屋川市　太田とし子

（評）何者にも邪魔をされない個室。温かい便座に腰掛けて雀のさえずりを聞く、最高のひとときを。名句が生まれる条件は充分。

上役の顔でワイフが指示をする　豊橋市　藤田　千休

（評）「指揮権を譲る」と言った覚えはないのに、いつの間にか攻守交替。すべてのことについて、指示される立場になっている。

実質の世帯主なら妻である　和歌山市　喜田　准一

（評）念のために「世帯主」を辞書で引くと「世帯の中心となる者」となっている。となると、どう考えても世帯主は妻である。

隅々をほじくるこころもとない日　寝屋川市　森　茜

（評）自信があり安定しているこころは、些事にこだわらず、鷹揚且つ寛容である。重箱の隅が気になりだしたら、要注意だ。

貧乏に馴れるようにと躾する　四條畷市　吉岡　修

（評）ほしい物は何でも手に入ると思ったら大間違い。そのことを子供の頃に教え込まないと、とんでもないオトナになってしまう。

花水木が似合うおしゃれな若い家　和歌山県　森下よりこ

（評）明るい春の光にまぶしく光る花水木。北アメリカ原産という血筋のせいか、出窓のあるような、欧米風のハイカラな家が似合う。

昭和一桁東海林太郎が耳朶にある　札幌市　三浦　強一

ご飯粒拾って食べた昭和の子　八尾市　村上ミツ子

夫よりちょっぴり進む腹時計

寺の庭かくれんぼした恋もした　堺市　村上　玄也

仏滅は信じないけど気にはする

多機能が使い勝手を悪くする　鳥取市　福西　茶子

うぐいすと輪唱春の陽をうけて

メイド・イン・チャイナおむつも墓石も　弘前市　高瀬　霜石

回り道したぶんスタミナはあるぞ

キムタクの足も水虫かもしれぬ　橿原市　居谷真理子

正直に学歴だけを褒めておく

さっきまで溜め息ついていた欠伸　藤井寺市　太田扶美代

玉ネギを年中吊ってある我が家

惚けてへん恋という字がまだ書ける　吹田市　穴吹　尚士

銀行の前でおぼろなパスワード

禿げているから善人と限らない　岸和田市　森元ふみよ

ヘリコプター三十階の窓揺らぐ

ベランダの胡瓜見のがし超メタボ　大阪市　萩原　大朔

義理で来て最前列の面映ゆさ　和歌山市　木本　朱夏

スイッチはOFFに手足を折りたたむ

大阪市　森田　明子
振り落としたいと思っている地球

堺　市　加島　由一
度胸ある妻に愛嬌ある私

大洲市　花岡　順子
薫陶を受けたと胸を張っている

三田市　福田　好文
そこそこの勝ち組集う県人会

西宮市　吉井菜々子
おやすみの落語へ窓の月灯り

唐津市　市丸　晴翠
懸命に生きた挙句の要介護

大阪市　川原　章久
伴走の足が縺れる老夫婦

鳥取市　山宮　愛恵
右の手を神に預けてリハビリへ

藤井寺市　津田シルク
天の川あれは御先祖様の列

三田市　上垣キヨミ
生きるとや傷は癒えたり生まれたり

藤井寺市　若松　雅枝
裏打ちをしたい目尻と首あたり

加西市　金川　宣子
若いつもりも荒行となるハイキング

奈良市　矢野　良一
蛇口全開愚痴は一気に下水へと

和歌山市　根田よしこ
スーパーの試食に出ない白い飯

鳥取市　夏目　一粋
お隣の焼肉煙ばかり来る

京都市　高島　啓子
ギャル言葉補聴器つけて聞き返す

京都市　都倉　求芽
給付金母を労う旅に出る

八王子市　播本　充子
お疲れと十回書いてくれた友

鳥取市　岸本　宏章
奉加帳最初に書いたことがない

高槻市　安田　忠子
可愛いと言われたエクボしわになり

西宮市　片山　忠
達観をするまで無駄なエネルギー

米子市　青戸　田鶴
引き出しにいらないものがよくたまる

京都市　都倉　求芽
どうと言うわけではないが梅雨の入り

京都市　高島　啓子
逆転に慣れて頑張る気がうすれ

鳥取市　夏目　一粋
野の花が好きだと退屈はしない

和歌山市　根田よしこ
あとだしのジャンケン経済評論家

奈良市　矢野　良一
砂像展終って閑古鳥が鳴く

加西市　金川　宣子
わけもなく鉄橋が好き汽車に乗る

奈良市　矢野　良一
誉め上手なかなか出来ることじゃない

奈良市　矢野　良一
雨降らずおたまじゃくしが降ったとか

奈良市　矢野　良一
帰りたい田圃畦道雨蛙

加西市　金川　宣子
太っ腹と言われ飲み代払わされ

加西市　金川　宣子
スケジュールつぎつぎ入れる夫の留守

大阪市　岩崎　公誠
美容外科時に失敗するらしい

寝屋川市　平松かすみ
ふるさとが同じ紀州で茶粥好き

京都市　坪井　孝一
母想い茶粥の湯気にむせている

橿原市　安土　理恵
女ですくやしい時のいちごパフェ

三田市　堀　正和
コンビニのパンツ僕には少し派手

米子市　政岡日枝子
道端を並列で行く老人カー

大阪市　谷口　義
たっぷりの顔が洗面器に映る

青森県　松山　芳生
平凡な名前で偽名かと思う

寝屋川市　籠島　恵子
手で掬う水に野山の味がする

篠山市　円増　純子
着メロがまた脱衣場で待たされる

枚方市　寺川　弘一
問いかけて下さる人がいる訛

鳥取市　有沢せつ子
庶民という一まとめの中で生きる

大阪市　岩崎　公誠
傍線に父の思いがある蔵書

長距離通勤昼は都会の人となる

枚方市　寺川　弘一
地方の銘酒訪ね巡礼したくなる

鳥取市　有沢せつ子
買った後値引きされてる悔しさよ

大阪市　岩崎　公誠
猫めしで正しい猫を育ててる

シドニー　坂上のり子

亡き友が手招きしたか逢えた友

鳥取市　倉益　一瑶

小鳥の餌じゃないです母の食事です

藤井寺市　鈴木いさお

仲人を乞われ夫婦の撚りもどる

奈良市　尾畑なを江

ヤル気出す手始めは先ず掃除から

吹田市　太田　昭

ホワイトカラーたまに汚れてみたくなる

和歌山市　福本　英子

耄碌をしてますのでとお断り

堺　市　奥　時雄

定年後定時定量同じ酒

鳥取県　細田　裕花

雨の日は夫婦別室にて読書

高槻市　佐甲　昭二

ベストセラー本屋で目次だけを読み

尼崎市　春城　年代

嵐山ボート浮かべた日のみどり

神戸市　山口　光久

いざというときは駝鳥も空を飛ぶ

海南市　小谷　小雪

うしろ襟合わせ鏡でチェックする

大阪市　坂　裕之

相棒があって登ってこれた坂

豊中市　荒巻　夢

妄想を楽しむゆとり片想い

鳥取市　中宇地秀四

盃にお世辞タラタラ注いでやる

大阪市　小泉ひさ乃

まだ若いもりもり食べてフラダンス

唐津市　仁部　四郎

会心の一句に2合ビン軽い

東かがわ市　川崎ひかり

十人中九人ケイタイいじってる

枚方市　海老池　洋

方言で喋って舌を喜ばす

堺　市　近藤　治子

手に乗せて玉にしてみるだんご虫

岸和田市　井伊　東吉

めでたしか残念なのか後期入り

米子市　白根　ふみ

カーテン洗い水無月の風になる

大阪市　田浦　實

花粉いっぱいつけた蜜蜂いじらしい

東大阪市　中岡　妙

カラオケを猫に聞かせて逃げられる

鳥取市　田村　邦昭

百までも生きるだろうか外は雨

豊中市　安藤寿美子

髪白く喪服の似合う歳になる

枚方市　丹後屋　肇

忸怩たる己の唾液呑んでいる

松江市　川本　畔

白百合や開き過ぎではないですか

大阪市　井丸　昌紀

なにしても最後は許してくれた母

豊中市　松尾美智代

孫生んでくれた娘にありがとう

三田市　北野　哲男

古里はスズメツバメと一つ屋根

鳥取県　山下　節子

良心を誤作動させる好奇心

高知市　小川てるみ

持ち腐れになってしまった一張羅

池田市　上山　堅坊

蓑虫のちょっとお洒落な動く家

大阪市　津守　柳伸

失せ物をコソコソ探す癖がある

鳥取市　岸本　孝子

阪神が強くなるよう神詣で

大和郡山市　坊農　柳弘

往生際悪い男の発泡酒

松江市　松浦登志子

シミ　シラガ　シワに続いてシンケイツウ

河内長野市　坂上　淳司

傘持って父出迎えたのは昭和

神戸市　山田婦美子

同じこと二度聞いてないつもりだが

大阪市　小谷　集一

長所より短所の方が魅力的

熊本県　岩切　康子

寺巡り仏の加護か雨が止む

大阪市　西川　冷子
年金族不景気知らぬ小旅行

高槻市　乙倉　武史
極楽か地獄かホーム混んでいる

羽曳野市　吉川　寿美
生活の知恵捨ててあるゴミ置き場

松江市　錦織　禮子
伝説の楢山に行く歳になる

和歌山市　玉置　当代
次世代に財布渡して役降りる

安来市　原　煩悩児
旅に出て孫へ孫へというみやげ

東大阪市　笠井　欣子
断れぬ梅戴いて塩買いに

和歌山市　磯部　義雄
犠牲者が出ると安全策を練る

大阪市　神夏磯典子
せっせせっせつくして先に逝きそうだ

大洲市　中居　善信
田の季節昔むかしの水喧嘩

堺　市　宮本かりん
すまないが口癖となる気の弱り

大阪市　榎本　舞夢
ともかくも天気と元気旅たのし

鳥取市　土橋　螢
鷺草を咲かせ煙を吐いている

西予市　黒田　茂代
自分のミスだから笑って許してる

東京都　清原　悦子
明日咲く花が揃って南向き

倉吉市　松本よしえ
月よりも青い地球が美しい

寝屋川市　岡本　勲
若鷲のさけびの歌よ知覧の碑

大阪市　岩崎　玲子
死亡ゼロこんなニュースをさがしてる

海南市　堂上　泰女
濡れ手で粟期待した株裏返る

高槻市　富田　美義
献花台ここの時間は動かない

大阪市　柴本ばっは
ふらふらのわたしバランス取る夫

熊本県　高野　宵草
降り止んだ西陽のチャンス散歩する

大阪市　奥村　五月
ハッタリも脅しもきかぬ歳となり

鳥取県　大塚美代子
三叉路に立って指標を確かめる

大阪市　大川　桃花
飛び降りた拍子に坐骨神経痛

松江市　津川　紫晃
大法螺を吹いて存在見せておく

弘前市　今　愁女
父の馳走白いご飯に筋子のせ

紀の川市　宇野　幹子
激辛のカレーで箍を締めなおす

大阪市　近藤　正
ホームレスまだ給付金届かない

三田市　石原　歳子
現役の主婦で年中忙しい

富田林市　中井　アキ
老人会役を下りたら呆け始め

高槻市　左右田泰雄
花時計　いつも男が待たされる

鳥取県　西谷　悦子
ご先祖に食べてもらえるだんごの粉

八尾市　田邊　浩三
広辞苑をお飾りにした電子辞書

大阪市　吉内タカ子
ポイントの僅かな値引き溜めたくて

和泉市　西岡　洛酔
愛妻の手に踊るのも良しとする

鳥取市　津村　律子
直球もカーブも交え夫婦坂

大阪市　太田としお
ライバルとハローワークで鉢合せ

大阪市　笠嶋　惠美
杓子定規つまらないから折り畳む

枚方市　二宮　山久
山登り達成感のにぎりめし

鳥取市　吉田　弘子
しょうもない事で悩んだ日を笑う

河内長野市　針生　和代
一日が血圧計に左右され

同人特集

海百句

平成十六年～平成二十年
同人吟から　編集部

大阪も海が見へますほのぼのと　路郎
海鳴りへ標本室の貝の耳　薫風

紳在月稲佐の浜に神が着く　松本知恵子
妻が舵取ってるうちは凪の海　竹治ちかし
水平線じっと見ているだけでいい　生田　義一
海見える窓を選んだ一人旅　山田　耕治
慟哭の海から還らない二人　石倉芙佐子
声高く冬がおどるか北の海　木村貴代子
水平線の彼方へちらり母の顔　山本　益子
日本海冬の怒濤が大股で　白根　ふみ
日本海パノラマにした砂丘の湯　石谷美恵子
冬の海怒りのかけらなどみせて　川本　畔
川の果て海はやさしく抱いてくれ　福原　悦子

潮騒のなぎさ相応の家建てる　古川　奮水
海へ出て水は生まれを問われない　水野　黒兎
海山へ無限の恩が返されぬ　三島　淞丘
海越えて祝いメールの飛ぶ四月　亀岡　哲子
兄弟で行く先違う海と山　宗　水笑
海に棲む仲間も恋の季節とか　堀畑　靖子
私もヨットも青い風を待ち　楠見　章子
原点に鰯が群れる大海原　森　茜
花筏やくそくのせたまま海へ　中井　ゆき
いか釣りの船と契った海光る　門脇　晶子
海の気を深呼吸して立ち直る　市丸　晴翠

青い海我欲ひとつを捨ててくる　小白金房子
夏の海鯨も増えているそうな　谷口　義
ひまわりの海童心のおおはしゃぎ　大内　朝子
本当の恐さ隠して海が呼ぶ　榎本日の出
青い海入道雲と熱くなる　鴨谷瑠美子
旅の町海が見えるとほっとする　澤田　千春
日本海烏賊のカーテン舞い遊ぶ　土橋　睦子
玉串を捧げて海の扉ひらく　神保坊太郎
荒れ狂う海を眺めている失意　中井　善信
人魚姫居るかも知れぬ海の底　熊代　菜月
何もかも呑み込み海が病んでゆく　籠島　恵子
笹舟に海を見せたら腰抜かす　山本　玲子
大海で溺れて見たい好奇心　須磨　活恵
日本語の海から紡ぐ一行詩　居谷真理子
泳がせてくれるあなたの海がある　伊藤　玲子
野心捨て猛者ものたりと春の海　西村りつえ
浅学な私も夢は海ほどに　下田茂登子
今　夕日呑んで日本海眠る　埒　寛子
金婚の夫婦ようやく海は凪ぎ　録沢　風花
海山の呼ぶ声遥かなり六十路　小川賀世子

菜の花の海が見たくて途中下車　青戸　田鶴
釣り三昧海の魔性も友にする　安達　忠央
あの頃に戻ろう海を見に行こう　安土　理恵
散骨をするには春の海がよい　安平次弘道
トビウオが海面飛翔でお出迎え　井上　森生
光る海朝の別れに眩しすぎ　江見　見清
漆黒の海を見つめて待つ日の出　大川　桃花
荷をおろし海の鮮を聞きにゆく　太田　昭
日本海凪いで不気味な風が吹く　太田とし子
海の幸お節料理も国際化　小川　注湖
目と鼻が応え花粉の海へ出る　桑田ゆきの
情報の海で三角波に会う　奥谷　彩子
絶海の孤島はいやだしゃべれない　古今堂蕉子
女は海ときに男を溺れさす　吉川　寿美
海外に出ると日の丸好きになる　久保田千代
子離れをしてから海が凪いでくる　高島　啓子
日本海やがて埋まらん黄砂くる　軸丸　勝巳
ストレスの極みだろうか海が哭く　武本　碧
海と空水平線で妥協する　津川　紫晃
軽い罪捨てよのたりと春の海　永田　俊子

海の日に生まれやっぱり夏が好き　前　たもつ
海を見てからの金魚は眠られず　升成　好
母なる海今日はご機嫌斜めだナ　森　茂美
雑魚ばかり釣れてもやはり海が好き　森井　菁居
六畳の海に鯨が横たわる　米田　幸子
海と山抱かれるところ水平線　毛利　幸
エーゲ海照らす満月艶めかし　山口　美穂
悲しみを海は真っ直ぐ受け入れる　山本　義子
北方四島祖国恋しと吠える海　米田　恭昌
美酒とろり伯父の背にある日本海　林　瑞枝
天と地の隔たり埋める深い海　平尾　菜美
悠悠とタナボタを待つ深海魚　柿花　和夫
ストレスは去年の海へ泡と消え　星野きらり
よく見れば海も砂丘もうちの庭　福西　茶子
逆光のまぶしさ浴びる春の海　飛永ふりこ
七十路の海で抜き手をきっている　山本希久子
君が代が終ると浮ぶ海征かば　山本　蛙城
少年を釣り好きにした青い海　両川　無限
岬から海に向かって経を読む　土橋はるお

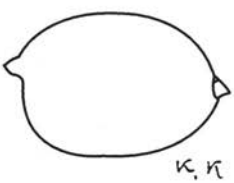
海の日はとにかく海を見に行こう　三宅　保州
沖縄の海は青くて哀しすぎ　小澤　幸泉
日本海あって鳥取好きになり　植田　一京
海に落つ夕日はキスを釣りながら　竹信　照彦
八月の海を埋めよう鎮魂歌　乙倉　武史
陸海空未だ還らぬ戦友よ　髙田美代子
満天の星に抱かれて眠る海　山本　宏至
台風がそれて私の海も凪ぎ　佐野木みえ
温暖化も核も知らない深海魚　藤井　則彦
妻がいて長閑な海にしてくれる　山口　光久
ヘチマ　ニンニク友の情けは海越えて　山崎　君子
一石を投じる海と知りながら　宮尾みのり
思いきり泣く気の海が凪いでくる　和田つづや
かなうなら月夜の海へ銀の櫂　近藤　豊子
雑魚放流海の匂いを嗅ぎ分ける　福士　慕情
海渡る鳥に迷いはないだろう　岸本　宏章
冷凍魚海の温度を恋しがる　安芸田泰子
情報の海で浮き輪が放せない　森田　明子
豊穣の海に囲まれても輸入　瀬戸まさよ

共選欄

檸檬抄

（薫風書、カットとも）

投句数　698句



「保険」　高瀬霜石選

約款を読めば頭痛がする保険　和歌山市　磯部　義雄
保険屋がとてもやさしいコマーシャル　羽曳野市　森下　一知
介護保険あるから嫁と別に住む　京都市　三宅　満子
損をしたような気分になる満期　寝屋川市　籠島　恵子
八十歳早く保険に入らなきゃ　鳥取市　中宇地秀四
一億も僕のいのちに掛けてある　吹田市　穴吹　尚士
お布施とや極楽行きの保険料　河内長野市　村上　直樹
天国への持参金ですこの保険　寝屋川市　岡本　勲
保険金生きてる内に手にしたい　篠山市　二階　幸子
保険屋てそない儲かるもんでっか　羽曳野市　吉川　寿美
損したがそれでよかったガン保険　枚方市　海老池　洋
わずかだが生きた証の満期金　加西市　金山　宣子
最高に効く新薬は保険外　大阪市　津守　柳伸
白いままの介護保険で終わりたい　八尾市　生嶋ますみ
宇宙旅行いかほどでしょう保険代　竹原市　石原　淑子

「保険」　木本朱夏選

ちょっとしたはずみで掛けた保険です　大阪市　谷口　義
保険という浮輪が揺れてしがみつく　高槻市　佐甲　昭二
齢と共わたしの査定下がるだけ　八王子市　川名　洋子
保険証なければ僕が否定され　大阪市　升成　好
保険屋はみんな駅前一等地　鳥取市　岸本　孝子
保険には希望の色がまぜてある　松江市　津川　紫晃
敵か味方か介護保険が追ってくる　紀の川市　宇野　幹子
白いままの介護保険で終わりたい　八尾市　生嶋ますみ
介護保険文句言うてるうちは花　吹田市　木下　敏子
誤算など風に飛ばしている保険　松江市　福間　佐奈
猫も年取って保険が跳ね上がる　シドニー　坂上のり子
保険かいな大正生れですガチャン　篠山市　遠山　可住
ばあちゃんは保険のように孫を連れ　豊中市　安藤寿美子
もう死ぬとテレビが保険急き立てる　枚方市　伊達　郁夫
同じ死ぬなら今がお得と言う保険　三田市　福田　好文

年金に続き保険も当てにされ　堺市　奥　時雄
元気だとなんの値うちもない保険　芦屋市　黒田　能子
オペ成功笑顔でもらうガン保険　堺市　西村りつえ
保険金掛けておきたい党がない　河内長野市　山岡冨美子
ポックリ寺へ保険証書も持参する　藤井寺市　高田美代子
悪役にされてしまった保険料　日高市　根岸　方子
ロボットも傷害保険掛けておく　京都市　高島　啓子
満期きて目が覚めました貨幣価値　横浜市　菊地　政勝
若田さん保険契約してますか　八尾市　前田　紀雄
保険いっぱい掛けてた頃は元気です　豊中市　松尾美智代
父さんの保険増額直ぐ決まる　八尾市　田邊　浩三
終身保険受取人は内緒です　高知市　小川てるみ
天使にも悪魔にもなる保険金　大阪市　田浦　實
保険屋さん一生涯を知るリスト　倉吉市　山中　康子
診断書より安かった保険金　橿原市　居谷真理子
お互いに内緒でかけていた保険　神戸市　山口　光久
流れ星今日で保険は満期です　大阪市　谷口　義
いい湯だね明日は保険の満期日　大阪市　榎本日の出
掛け捨ての捨ての部分が引っ掛る　堺市　大隅　克博
親戚に保険屋さんがおりますの　三田市　堀　正和
一豊の妻も保険をかけていた　鳥取市　斉尾くにこ
保険ですボスにお歳暮お中元　札幌市　三浦　強一
生れたらもう保険屋に囲まれる　弘前市　斉藤　劦

盗塁は見事保険のかかる足　大阪府　澤田　和重
この首を担保に保険かけました　鳥取市　夏目　一粋
自賠責保険もらわず死んだのか　鳥取市　土橋　螢
無事満期わたし死んでもタダの人　河内長野市　黒岩　靖博
保険満期葬式代よりバスツアー　大阪市　神夏磯典子
保険満期大屋根替えて家守る　鳥取市　中村　金祥
保険満期めでたい筈のつまらなさ　富田林市　片岡智恵子
改さんをされてたまるか保険料　和歌山市　喜田　准一
それとなく子らが保険のことを訊く　枚方市　小林　わこ
長寿への保険にサプリどっと摂る　羽曳野市　吉村久仁雄
たそがれが迫り契約チェックする　海南市　小谷　小雪
掛け捨ての捨ての部分が引っ掛る　堺市　大隅　克博
保険ゼロ老後はパッと散るつもり　海南市　堂上　泰女
癌保険厄除けのはずだったのに　島根県　伊藤　寿美
ボロ車もらい保険が高くつき　鳥取市　高浜　勇
かんかん照り子の遠足に持たす傘　大阪市　井丸　昌紀
一徹に保険を嫌う父の顔　東大阪市　森下　愛論
保険詐欺なんとか僕もやれそうだ　香南市　桑名　孝雄
サバイバルゲームに保険掛けておく　弘前市　高橋　岳水
できもせぬ出世払いに保険かけ　明石市　糀谷　和郎
病気した僕を敬遠する保険　堺市　村上　玄也
保険付き西瓜は叩きはじかれて　香南市　近藤　功
摘果する枝を保険として残す　大洲市　花岡　順子

保険金めあてに鳥が飛んで来る　松江市　津川　紫晃
人間のエゴの臭いのする保険　鳥取市　夏目　一粋
高額の保険で歳の差を埋める　八王子市　播本　充子
疑われるから保険増額などしない　吹田市　太田　昭
不況風　かけた保険がかえらない　鳥取県　佐伯　やえ
敵か見方か介護保険が追ってくる　紀の川市　宇野　幹子
好きだよと保険いっぱい掛けられる　東大阪市　中岡　妙
同じ死ぬなら今がお得と言う保険　三田市　福田　好文
一生愛します　これが保険です　大阪市　古今堂蕉子
あと二日入院したら保険でる　羽曳野市　宇都宮ちづる
食費つめボクの保険をかける妻　八尾市　宮崎シマ子
介護保険文句言うてるうちは花　吹田市　木下　敏子
それにしても妻は保険を掛けすぎる　海南市　三宅　保州
保険満期もう行く先は決まってる　河内長野市　針生　和代
いいですよキミの保険になりましょう　西宮市　山本　義子
保険増　愛の証にねえあなた　生駒市　飛永ふりこ
保険屋と妻が私の値を決める　大阪市　小谷　集一
保険証見せてわたしと認められ　高槻市　片山かずお
保険金の計算ばかりしてる妻　豊中市　藤井　則彦

秀　句

ゴメンナサイこの結婚が保険なの　尼崎市　藤井　宏造
保険屋はみんな駅前一等地　鳥取市　岸本　孝子
保険金入りましたと墓参り　藤井寺市　鈴木いさお

掛け金がかじった後のお給料　大阪市　尾崎　ゆめ
年二十日旅行保険をかける喜寿　三田市　北野　哲男
お布施とや極楽行の保険料　河内長野市　村上　直樹
お守りの保険黄泉へのパスポート　箕面市　広島　巴子
子育てはいざという日の保険です　河内長野市　木見谷孝代
堂々と男としての保険つき　米子市　政岡日枝子
ゴメンナサイこの結婚が保険なの　尼崎市　藤井　宏造
いいですよキミの保険になりましょう　西宮市　山本　義子
一生愛します　これが保険です　大阪市　古今堂蕉子
一億も僕のいのちに掛けてある　吹田市　穴吹　尚士
飲め飲めと保険増額してる妻　大阪市　奥村　五月
食費つめボクの保険をかける妻　八尾市　宮崎シマ子
保険額増えて不気味な飯と汁　鳥取市　加藤　茶人
それにしても妻は保険を掛けすぎる　海南市　三宅　保州
殺されるほどの保険はやめておく　四條畷市　吉岡　修
百万ドルの笑顔へ保険効きますか　和歌山市　武本　碧
高額の保険で歳の差を埋める　八王子市　播本　充子
ロボットも傷害保険掛けておく　京都市　高島　啓子
妻の美貌保険をかけておいたのに　奈良県　渡辺　富子

秀　句

保険証を突っ支い棒にして転ぶ　河内長野市　山岡冨美子
保険ですボスにお歳暮お中元　札幌市　三浦　強一
晴れ晴れと学資保険が間に合った　寝屋川市　森　茜

誹風柳多留一一篇研究 48

小栗清吾・伊吹和男
山田昭夫・増田忠彦
山口由昭
清　博美

359　**朝かへりそれおやぢがとおとされる**

小栗　朝帰りの息子、「それそこで親父が待ち構えている」などと脅されるという意であろうが、脅しているのがだれかはっきりしない。

①一緒に吉原へ行った友達。家が近くなって、面白半分に脅している。

②母親。親父に見つかる前にやって来て、「親父が怒っている…」などと脅す。

柳雨「吉原志」は母親の句に分類されているようだが、「それ親父が」という物言いが母親には似つかわしくない気がする。しかし一方、友達は朝帰りの同類であるから、友達の発言とするには「脅される」がしっくりこない。先達に敬意を表して母親説に従っておくが、私にははっきりしない句である。

皆知ッて居さつしやるぞと母おどし　一四二9

伊吹　友達説に賛。どちらとも限定しがたいですが……。

山田　①に賛。

母門トで大腹立てござるそよ　二四13

清　母親が「それおやじが」とは言うまい。①説かと思う。

360　**品川ハころも〳〵のわかれなり**

小栗　品川遊郭の上得意が坊主であることを踏まえて、男女共寝の翌朝の別れのことを「衣衣」と書いて「きぬぎぬ」と訓むが、品川の場合は「ころもころも」という方が相応しかろうとからかった句。

品川のきぬ〳〵袈裟ハかへしやせぬ　一三九5

清　賛。

361　**今の駕最ゥ帰るハとすけんいひ**

小栗　素見が「今しがた行った駕籠が、もう客を降ろして帰って行くは」と言っているというのである。吉原の土手での光景であろうか。宙をすっ飛ぶように素見達を追い越して行った駕籠なのだろう。

見物左衛門かごかきに邪广かられ　二五9

山口　賛。素見はとぼ〳〵。

清　賛。

362　**目があると女房にするとこぜをほめ**

小栗　男が瞽女に対して「お前は本当にいい女だ。盲目でさえなければ女房にするところだが…」などと誉めている。モノにせんがための口説き文句であることはいうまでもない。「俺があと二〇歳若かったら、結婚するのだが…」などと実行不可能な条件付きで口説くのは、昔も今も変わらないスケベ根性。

山口　賛。口説く気もあろうが、美人に瞽女への純粋な賛美のようにも思える。

清　「女房にする」という言葉遣いで、小生には、純粋な讃美とは思えないのだが……。

363　**生娘をくといてごうをさらすなり**

小栗　生娘は、うぶな娘。まだ処女である娘。（「江」）業を曝すは、前世の業によって受けた恥を世にさらす。（「日」）

まだうぶで色気のない娘を口説いたら、大声をあげて手厳しく拒絶されたりして大恥をかいたというのであろう。「業をさらす」という成語を使ったところが手柄という句。

木娘へふとい、出してむごくされ　安二宮2

生娘ハそつと申ときやつとい、　四二36

清　賛。

364　**ほうづきを荷ともに嫁ハ取よせる**

小栗　はっきりしないが、嫁が行商の鬼灯売りから鬼灯を買うのに、街頭で買うのが恥ずかしいものだから、家の中まで呼び込んだということか。まだ若い嫁なのだろう。

ほうつきを嫁ゑるほとに〳〵　傍四32

伊吹　里の両親からの荷物と一緒に鬼灯も？

山口　賛。伊吹説にも魅かれる。

清　礎稿賛。

365　**おさへやす桜田さんとばちでつき**

小栗　全く不明。ご教授願います。

『史伝』では歌舞伎作者の「桜田治助」の項に採り、「踊子との艶聞ありしか、未知庵云、この桜田さんは治助に非ず、桜田辺の侍客を指せるものなるべし」と傍注がある。また、「おさえる」は『江戸語の辞典』には「盃をさされた時、押しとめてもう一度飲ませる」とあるが、そうだとしても「おさえやす」とはどういう意味かわからない。「桜田さんから注いでもらったが、私はおさえます」と言っているのか、「注いでもらった桜田さん、あなたおさえなさいよ」と指図しているのか。「少しおとなしくしなさい」とたしなめているような光景にも思えるのだが。

増田　「押さえやす」は盃をおさえる（差されるのをことわる）ことではないでしょうか。「桜田さん」は武家への揶揄。「いまはちょっと遠慮します」と踊子が留守居を撥で突く図。

清　状況よくわからず。

366　**とち狂ふふりて袂へ文をいれ**

小栗　とち狂うは、ふざけ合う。男女間にいうのが通例。（「江」）

ふざけ合う振りで恋文を相手の袂に入れたということ。よくある光景を詠んだ句ということで、それ以上の意味はなさそうである。

でばじやれるふりで袂へふみをいれ　一三3

清　賛。

367　**なまりぶしよと金持ちの格子から**

小栗　なまり節は、鰹を蒸して生干しにしたもの。生干しの鰹節。（「江」）

金持ちの家の格子から、なまり節売りを呼ぶ声が聞こえるというのであろう。ここでなまり節は初鰹との対比。金持ちというものは、べらぼうな値段の初鰹を買うような事はせず、同じ鰹でも安いなまり節を買うような生活をするものだということ。金持ちを揶揄しているようでもあり、そうしないと金は溜まらないものだといっているようでもある。

やかましひ程啼く下をなまりぶし　傍三1

清　なるほど。金持ちの質素な生活ですネ。

乾く

安藤寿美子選

空梅雨に潤い消えた倦怠期　酒坊
太陽にさらされ嘘がひからびる　(安)泰子
半乾きうまいスルメを狙うハエ　振作
核心を突くと乾いた風が吹く　准一
老夫婦乾きへ孫の潤滑油　玲子
水掛け不動乾いてみたい日もあろう　俶子
干し鰺とわかめ梅干母荷物　日出子
乾き過ぎたスルメが棚に置いてある　善信
それよりも涙の乾く日が怖い　扶美代
派遣切り河童の皿も干涸びる　恭昌
嫁がせて親父の海が乾き出す　幹子
用件を切り出す前に咽喉乾く　倫子
優しさが乾かぬように霧をふく　シマ子
川涸れるとっくに河童引越した　修
すさむ世の乾く心に般若経　まみ子
乾燥が決め手コンブの値が決まり　淳
烏賊哀れ踊る姿で乾いてる　俊子
バスツアー干物がにおう喜怒の顔　花匠
打ち水が乾いてしもた立ち話　巴子
椎茸も人も乾けば味が出る　弘風
陽の匂い乾した布団に包み込む　いさお
野次飛んで答弁乾く喉仏　ゆきの

乾かした涙がシミで残る恋　(矢)五月
嘘ばかりついてやたらとのど乾く　圭一郎
リストラの渇きを癒す縄暖簾　輝夫
温暖化貧しいところから乾く　堅坊
会うまでは乾天の慈雨だった文　哲男
嘘に嘘重ねて口が渇き切る　寿美
マンネリへ日毎に枯れていく詩嚢　遡行
椎茸と高野に元気貰ろてます　あやめ
乾くからなお愛しい泣きぼくろ　英子
乾く日も湿る日もある老介護　螢
イントロの長さに乾くのど仏　柳弘
ひからびた父の正論無視される　富子
乾いたらリストラされる濡れティッシュ　千休
五感麻痺六感異常乾燥中　道子
傘寿尚乾く隙なく鍬に汗　左余

佳

ドライフラワーよ虚しくはないか　茂代
百歳の乾布摩擦がまだ続く　雅枝
ウインクと違いますわよドライアイ　登志子
愛を下さい乾いてるのは心です　美智代
ダム乾き朽ちた生家が浮かび出る　毅

人

眼が乾くあなたを見つめすぎたから　惠美

地

雨上がりすこし大人になりました　霜石

天

電子音響いて日本語が乾く　播本充子

軸

あれこれで預金通帳ひからびる

貝

福士　慕情選

大阪のおばちゃん貝になり切れぬ　像山
おばちゃんが貝になったら恐ろしい　正和
不機嫌な妻に犬まで貝になる　和郎
色っぽい話に貝も喋り出す　日の出
優しさに触れて開いた貝の口　富子
人間不信どうにも開かぬ貝の口　寿美
ボランティア貝棲む海を取り戻す　あずま
早春譜配って歩く蜆売り　岳水
しじみ汁お情けほどの貝を入れ　千歩
言い逃れできないここは貝になる　大朔
貝になることで守った社の秘密　輝夫
厄払い悟りの貝はうつを吐く　花匠
貝になる他に術なし四面楚歌　玄也
頑固一徹それが身上ですサザエ　強一
決心がつくまで潜るさくら貝　芳生
貝合せずっと別れたままでいる　次根
貝ボタンいつもあなたの胸にいる　ます
殻つきのカキが届いた大仕事　千代子
故郷の浜むかし馴染の貝がいる　シマ子
貝探す母の声聞く冬の海　愛論
念仏を唱え女は貝になる　螢
貝塚の代りに原子炉が残る　哲男

合コンでじっと俯く貝柱　一花
ヤドカリの貝は等身大である　明子
埋め立ての浜へ稚貝を輸入する　四郎
いっせいに尻を持ちあげ潮干狩　黒兎
幾年の風雨に耐えた二枚貝　一知
貝塚に縄文人の息づかい　小雪
古代史を貝の化石から拾う　圭一郎
貝の中できっと真珠が眠ってる　(花)順子
母眠る国後島の貝拾う　俊子
打ち寄せる波貝殻を連れて行く　悦子
巻貝の中にあふれる夢がある　(安)泰子
耳は貝殻遠い潮騒聴いている　俶子
貝殻を海に帰して恋終る　陽子
鳴き砂の恋を知ってる桜貝　アキ
無言の抵抗貝に学んだ処世術　ヒデコ

佳

もの言わぬメールばかりの貝の群れ　愁女
本心が見たくて貝をこじ開ける　淞丘
名も知らぬ貝が思いを寄せてくる　菜美
熱燗がとっても好きなシジミ貝　順風
貝殻を拾う散骨した浜辺　美籠

人

太宰百年　まずはホタテを食されよ　霜石

地

罪は罪貝になろうがなるまいが　充子
天
波の音聞いて大きくなった貝　松尾美智代
軸
子のバケツ貝殻カニは宝もの

ほがらか

古久保和子選

朗らかな空気が好きな紙コップ　像山
ほがらかに風見鶏まで目が回る　孝一
酒の輪に笑い上戸がいて弾み　強一
ほがらかに呑んで天下を取っている　和枝
ほがらかになれる魔法の種がある　婦美子
我が家までひびく隣家の笑い声　高明
ほがらかな人だ明るい影がある　千休
ほがらかな顔が出てくる試着室　義雄
遅刻してあの明るさはなんだろう　(志)千代
持つものを持って陽気な風になり　菜摘
ほがらかな母だ家族がまるくなる　(山)節子
ほがらかに咲いた花から実が熟す　幹子
ほがらかな空に油断をしてしまう　ミツ子
ほがらかに笑えば癌に効くらしい　(稲)洋
ほがらかな嫁で治った胃の調子　秀四
五十点ぐらいの妻でほがらかで　ばっは
昨日よりほがらかに生き頑張ろう　公誠
削るもの何もない身の朗らかさ　美義
就活十社そうほがらかで居られない　あやめ
ほがらかな輪に飛び込んでハトポッポ　敏子
天気晴朗花も野菜も歓喜する　俶子
下戸ですが二次会三次会が好き　(矢)五月

ほがらかなあの子私の娘です　シマ子
ほがらかな質で眉間に皺がない　寿美
久々に屈託のない君の声　小雪
ほがらかになればなったで小うるさい　恵美
ほがらかな母はきみまろ聴いている　准一
にこにこと破調の童謡まだ続く　哲男
大阪弁愉快な値切り方をする　正雄
朗らかなお面をつける淋しがり　淳司
二日めはまだほがらかな選挙カー　四郎
ほがらかな仮面をつけて百均へ　茶子
ほがらかな妻だが味方とは言えぬ　毅
朗らかでちょっと気ままな妻である　扶美代
ウィンドウ春だ夏だね素通りだ　千歩
肩の荷の重さは見せぬ招き猫　慕情
ほがらかが母の姿と信じてた　裕之

佳

髪染めてちょっと陽気な外出着　美千代
ほがらかに年金暮らし板に付き　雅枝
母さんのまわりに日溜りができる　霜石
ケータイもパソコンもないパラダイス　忠
ほがらかな男ラッパを放さない　淞丘

人

ほがらかな人ですきっと夢がある　一粋

地

笑い上戸淋しい時に笑い出す　日の出
天
ほがらかな夫が選ぶメロンパン　播本充子
軸
ほがらかにまた階段を踏み外す

初歩教室

題 ― 激しい

鈴木公弘

改めて述べるほどのことではないですが、川柳は文芸、文学の一つです。理屈どおりに描くものではないとは申せ、言語やその使い方には精一杯こだわってほしいと思います。書き手の意思が伝わってこそ、文芸としての価値が生まれるのですから。

【主体、対象が見えづらい句】

原 妻の手が癌の痛みを和らげる　ま す

添 夫の手が癌の痛みを和らげる

作者は夫、それとも妻のどちらのお立場でしょうか。夫なら原句OK。妻なら添削句のように描かなければなりません。もちろん配偶者が癌であることが大前提になります。

女性の作品の中には時々「僕」という表記が見られます。平素、女性がご自分のことをボクなどと呼んでいらっしゃるとは思えません。子どもの立場になって書いたと言われる方がありますが、川柳の発信元は原則「私」です。ご留意ください。

原 どん底で激しい雨の音を聴く　柳 歩

添 お財布の激しい雨の音を聞く

ここにいう「どん底」とは心身上の不調か、経済的な極貧状態か、このままでは分別できません。抽象的な表現は読者に気持ちが伝わりませんので、なるべく具体性のある代表的な事例を核にして考えていくべきでしょう。

原 激頭痛常備薬皆期限切れ　好 文

添 鎮痛の期限が切れて役立たず

やや言い過ぎています。いわば小道具を全部開示してしまった感がありますので、添削句では反対の側から描きました。

原 罪深く激しく焼える不倫愛　光 弘

添 罪深く激しく燃える不倫愛

原 不倫して激怒の果に離婚され　弘 泰

添 不倫して激怒の果てに離婚され

以上の不倫二句、他人ごとでしょうか？

選者は作品が理にかなっていれば入選にしますが、その内容についてはあくまでも作者が責任を負うことになります。したがって、細心の注意を払うよう務めてください。

原 激しすぎ父の罵声に心閉じ　弥 生

原 何時になく激しい父の変化球　絹 子

原 荒波に負けない私燃えてます　なつみ

原 玄関で優しい夫が激怒して　久 子

原 激しさに負けてばかりの気の弱さ　操

原 懐に入れた秘密がまた騒ぎ　ミ エ

原 我がままで激しい気性誰の血だ　智加恵

原 夕立ちの激しい音に目がさえる　周 子

以上の八句は、背景や理由が描いてあった（推察できた）なら、もっといい句になっているでしょう、川柳を作る場合に「なぜ」という観点は大切なポイントの一つです。

原 赤ん坊はげしく泣いて乳もとめ　健 柳

添 児は泣いて激しく愛を確かめる

原 激辛も受けて見栄張るやせがまん　志 郎

添 激辛のカレー見栄張るやせがまん

香辛料は何であってもいいです。したがって本質的には「流れ句」ですが、とりあえずカレーのルーにしておきました。

原 激しさを終う心の場所が無い　惠 美

添 恋愛の激しさ仕舞う場所がない

【もう一段の推こうを要する句】

原 親離れ激励受けて自活す　綾 乃

添 親離れ激励受けて自活する

原 激安の幟りに腰は上らない　雅 代

添 激安の幟へ向かう気は起きず

原 家計簿の出入激しい我家です　紀 雄

添 家計簿の出入り激しい我が家です

原 選手を激しく磨く鬼コーチ　ミヨノ

添 選手らを激しく磨く鬼コーチ

「選手」はセ・ン・シュですので三音字の言葉です。「ら」を加えて上5にしました。

原 政治不信激しい怒り奏えてます　文 代

添 政治には激しい怒り覚えます　冷子
原 激怒せず感激もない平和です　安子
添 激怒する感情消えて平和です　稔
原 激しい世一か八かに四苦八苦　ヒロ
添 激しさは一か八かの世に変わり　克博
原 お互いに激しい言葉傷がつく　清
添 お互いに激しい言葉傷をつけ　イセ
原 風当たり激しい間無口です　美紗子
添 風当たり激しい時は無口です　房代
原 激しさのない恋ですが火は消えぬ　いさお
添 激しさのない恋ですが火は消さぬ
原 パートの身激しい世から外される
添 非正規の首に激しい風当たり
原 燃える思い私も書ける手紙なら
添 手紙なら激しく燃える火が描ける
原 忘れまい激震の日を語り草
添 忘れない激震の日の断末魔
原 その薬強い痛みに効きますか
添 その薬恋の激痛にも効くか
原 店先で怒鳴り声聞く鯛の顔
添 店先の怒鳴り声聞く鯛の顔

【入選する可能性が高い句】

激情が埋めた二人の車間距離　大朔
激動の時代を生きて喜寿迎え　節子
派遣制度激しく下げた人件費　堅坊
現在地激しい恋の渦の中　宏造
ファンなれば激しい野次で叱咤する　孔一
思い込み激しい私やんでいる　タカ子
激しくもやがて忘れるマスメディア　道子
乱れ文字鉛筆の芯矢らせて　幹子
親と子の激しい議論ＤＮＡ　開子
選挙前出入り激しくなるお金　ちづる
欲しいのはお金じゃないと激怒する　孝代
窓打つ雨出かけた人が気にかかる　亜希子
ハローワークの風も激しく戸を叩く　かずみ
気性の激しい女は嫌い美人でも　秋星
古稀すぎて激しい熱のマグマなく　みち代
この時と激しく泣いて遺産分け　振作
風雪の激しさ語る浜の松　治子
激しいなさっき笑った顔で泣き　菜々子
叱責も時に激しく愛込めて　志延
激しいけんかもう出来ぬ年になり　照美
激辛は喉元過ぎてなおきつく　りこ
ゲリラ雨避難の準備始めよう　孝明
激しく燃える炎に人を飲む野焼き　律子

【佳　句】

アメリカを激しく揺する北の核　陽子
陣痛に耐えて母親勝ち名のり　すみれ
アジサイも激しい雨に耐えていき　宣子
生き残りかけて激しい水面下　勇
冤罪に激しい怒りこみ上げる　嘉彦
激安品まず産地見る癖がつき　憲司
葛藤の激しさハート片が散る　くにこ
恋人を激しくののしった亡父　利子
討論の激しいわりに実がない　正二
波しぶき浴びて奇声の川下り　こずえ

【今月の推せん句】

雨激し介助をおえて帰るみち　宮川　俊子

別居なさっている親御さんの介護ですね。ご苦労と虚しさが心の奥深くふかくまで伝わってきます。

激論の果てに左遷が待っていた　磯部　義雄

左遷は、川柳おなじみの場面ですが、今や左遷で済んでよかったね、という時代になってしまいました。

追伸に激しい川の音がする　福井　菜摘

無心の手紙を書くとしましょう。歯切れの悪い筆致で進めていきますが、書いているうちに貸してもらえるような気になって、追伸という延長戦に持ち込み「少しでもいいです」などとダメを押します。その低姿勢が江戸落語では、貸し手の琴線に触れて「小さいこと言うんじゃねえよ」と、人情話に変わります。そういったドラマの展開が「川の音」なのでしょう。想像を掻き立てる句になりました。

【私の句】

不正義を激しく責める赤い月
激流の真ん中辺がやかましい

（登載漏れの方は役員が添削して返送します）

秀句鑑賞

同人吟　吉岡　修

―7月号から

この秀句鑑賞は前回、ショッキングな体験をしました。

鑑賞文を書いた中の同じ句を翌月、木津川先生の川柳讃歌にもお取り上げがあって、先生の讃歌が出たのです。同じ句の鑑賞にこうも違いがあるのかと、先生の名文と自分の貧弱なコメントの差に大ショックだったのです。

そんなことで少々落ち込んでいて、ある柳友に意見を求めたところその人曰く、…修さんのはひらがなの鑑賞…と、うまいこと言ってくれました。これでなんだかすっきりして元気を取り戻したことです。

私流ひらがな体で一七一九句、ありがたく鑑賞させていただきました。

（もう、先生のと重なったりしませんように祈っています）

以心伝心きらいな人に嫌われる

古手川　光

これは致し方のないこと。いわば以身伝心正直に態度に出るものなので、私も常々そうならぬ修行をしたいと思っています。

笠竹が言うにあなたは名前まけ

山口　高明

驚きました。私も同じ総画数二十四で、幸運の名だと聞いています。今にいいことがあると、ずっと信じて八十余年。

同じような方に思えて嬉しくなりました。きっとその時はくると思っていようではありませんか。

豌豆むくしなやかな手と枯れた手と

生嶋　ますみ

姑さんとお嫁さんだろうか。母と娘だろうか。何かと語りながらの光景を温かく表現されて、ほのぼのとしました。

我が家では私もたまに手伝ってむきますがしなやかな手にいつも焦がれています。

無気力な埴輪のトラで情けない

井上　喜酔

同感同感。

埴輪か張子か。ぐしゃっと踏み潰したいトラ。この思いを、せめて句にぶっつけて、後半の朗報を期待しましょう。

道草を食って男が太くなる

牧野　芳光

だから好きにするンだ、と聞こえてきます。留学、参禅、NPO…。様々な学習、体験は勿論、ひょっとして紅い灯、マージャン、縄のれんなど、男の道草にこと欠きませんが、さてどのコースでしょうか。

よう言うて下さいました。大いに使わせて貰いましょう。サンキュー。

美人から道問われ買う宝くじ

坂本　蜂朗

結果は聞かなくても察しがつきます。折角のつきを宝くじに向けたのではそれまで。

とは言え私もきっとそうしたと思いますがこの句でよくわかりました。こういうつきはそのまま暖めておくことにすべきでした。

そういう反省が読みとれました。

天の声聞こえ遊びに腰を入れ

板山　まみ子

年齢に被いをかけて翔んでます

平嶋　美智子

お二人のような、はねっかえり精神でこそ川柳ももりもり。女性は夢がよく当るらしく聞きますが、そこへ天の声まで加わればもう無敵。被いもとって自信をもって翔んで下さい。よく気持ちが出ています。

大阪弁で南無阿弥陀仏という

谷口　義

クラス会東京弁が耳障り

奥　時　雄

一句目。なんだか面白そうですね。

娘の嫁ぎ先は大阪だが、お寺さんは代々京都で南無阿弥陀仏派。ご住職は普段東京の大学の先生をなさっているが、盆には大阪の娘の家へ来て下さる。京都、東京、大阪のどこ弁のお経なのか私には全く異和感はありません。この盆にはしっかり聞きわけてみたいと思っています。

二句目。東京から帰阪して三十年になります。この感じはよくわかります。そのうちまるっきりの大阪弁に戻りますけど、使い慣れている言葉と、文字にした川柳の味のことを思い新たに考えてみたいと思いました。

迷わずにすぐ飲みました給付金

村上直樹

後腐れないように飲みきって、一票なんか知るもんかと、飲み助の心意気に万歳。

にやにやと笑われてるな自信作

執行稲子

ある入選句の意味がわからなくて、選者の方に教えを乞いましたら、「私もわからん」と言われました。直感だそうでした。

音たてて私を過ぎていく時間

大久保　のん子

時間がたてる音ってどんなんやろ。

丁度今の私、締切りに追われて焦ってるさ中、確かに速く荒っぽい時間、脳をガンガン揺らす音です。恋人と過している時間の音とは全く違います。

これから注意して聞きわけてみたいです。

大志なら閉じ込めてある古日記

野下之男

人並の定年を迎え、小さい幸せに満足しているらしいおっさんと、ひとは見ているだろう。勿論大きい夢、大志はあった。日記に熱くなって書いたのも遠い記憶にある。それでええやないか。

時々そう思う私もそっくりですワ。

感動の数が鍛える人の味

冨田美義

脳科学者茂木健一郎さんの著書「感動する脳」を読んだことがある。百歳になっても脳は成長し続けるもので、それには脳に感動を与えることが重要、と説いておられた。映画を見たり、音楽を鑑賞したり、勿論句会に出るもよし、日常の刺激が必要なのだということであった。

思い出させていただきました。

退く男迫る女のかけくらべ

木村貴代子

この一行に凄いドラマが詠みつくされている思いで、一読感動しました。

任せると言うてひとつの荷を降ろす

喜田准一

私達自身「若いのに大丈夫かいな」と思われながら任せてもらって見事（?）果して来たこと。任せればやるもんですね。

家内ですと冷たい声が耳の側

石倉芙佐子

この位のショックにまけては道は遠い。とは言え男も女も、世の恋人たちが味わうことなのだろう。そしてのり越えてゆく。いいとこ詠まれたと思います。

怒ったら二つ笑ってから黙る

川本　畔

怒られてへらへら笑ったんではとんでもないことに。これは自分が怒った時のこと。日本中、いや世界中貼り出したい句です。

聞く耳と聞かない耳が折り合わぬ

伊藤寿美

ことあるごとにこんな葛藤があるのは煩わしいようだが、これが常識だろうと思います。結局は折り合って過ぎてゆくこと。

その辺をうまく表明された一句でした。

—水煙抄

秀句鑑賞

—7月号から

青戸田鶴

ヒョウ柄が浪花の街を占拠する

藤田千休

おしゃれな浪花の女性たちがほほえましく浮びます。

買う方が安いと言って種を蒔き

小沢淳

口では買う方が安いと言いながら、農薬のない自然の野菜を作っていられる様子と思われます。

羽繕いいつか私も風に乗る

北山絹子

若い時は収入や子育てで我慢が多かったですが、いよいよ翔べる時がきたようですね。

介護士の君にあげたい感謝状

近藤秋星

腰を痛めて縣命に介護される方たちに、年よりはみんな感謝しています。

口下手も出雲弁なら日本一

菅田かつ子

口数の少ない人でも、きっすいの出雲弁が出たら腹をかかえます。

ウイルスは恐いが惚けもまた恐い

高山清子

ウイルスはマスクで防ぐが、惚けは防ぐことも薬もないですね、

回り道塾が嫌いな御曹司

古田千華

腕白な坊やたちが、さわぎながら回り道して、塾まで歩いている姿が目に浮びます。

言いたいな人生わずか百年と

根田よしこ

あっという間に八十年、あと二十年人に迷惑かけないで、百年生きたいものです。

サヨナラは言わぬまたねと里を発つ

加藤スズコ

いつかくる別れは、お互い感じながら、またねというところが素敵です。

またいつか跳べるチャンスの足鍛え

西谷悦子

いつでも旅に出られるように、足だけはきたえておくように。

冷や汗も夢と分かって深呼吸

田口清帆

大切な会か旅か、夢とわかってほっとされた様子がよくわかります。

ありがとうの声にボールを拾い上げ

藤岡りこ

投げかえしてもらおうと、先にお礼を言っている様子がおかしいですね。

所詮恋なんて呪いのようなもの

尾崎ゆめ

「呪い」を「まじない」と読むか「のろい」と読むかで、内容ががらり変わります。日本語って難しいですね。

幸福駅行きのキップを持って老い

三浦強一

北海道には幸福駅も銭函駅もありますね。庶民のささやかな夢、希望をこめたネーミングですね。

綻びを縫って夫婦の仲直り

磯部義雄

夫婦のほころびは見つけたその日のうちに繕いましょう。愛という縫い糸で……。

あなたとの歩数を胸に刻み込む

稲村遊子

エッセー

札幌の旅

宮﨑　シマ子

第一日目

総勢22名、第33回全日本川柳２００９年札幌大会に参加するべく希望と期待を持ち千歳空港の人となる。札幌まで列車、札幌から小樽へと観光バス、後で聞けば松山や栃木等から大会に来られた方もご一緒であった。途中遥か向こうに雪の残った大雪山が見える。地元の川柳家でガイドの資格を持っておられる真壁唾溪氏が案内を引き受けて下さる。

住吉神社には北前船の豪商が建てた大きい鳥居があり、その境内に田中五呂八の名句「人間を掴めば風が手にのこり」の句碑がある。その風に吹かれて白い綿毛がひらひらと舞っている。ポプラの種胞子とわかった。

小樽は倉庫と運河の町、それに日本銀行始め沢山の銀行があり、その中の一つ拓殖銀行に小林多喜二が勤め、ここで蟹工船を執筆した事も教えられた。世界に門戸を開き、かつての豪商がその誇りを知らしめるべく競って建てた立派な建物が今に残っている。

運河の幅は半分に狭められているが、河面からの風はひんやりとしてさすが北海道とそのひんやり感を満喫する。石造り、レンガ造りの倉庫を眺めているとエキゾチックな気分になる。

第二日目

今度のメインである会場ではさすが緊張する。関西から来られた方にも何人かお会いする。会が始まるとアトラクションのヨサコイソーラン踊り、若者達が派手なアッシ姿で舞台せましの乱舞パワーをもらう。先生方の挨拶、お話、披講、北海道らしい盛大な力ある大会を味わう。

参加者五百六十九名、閉会後は別に参加された一名も加わり、二十三名の一緒の食事の賑やかなこと。解散後は三三五五に別れて夜の札幌の街を楽しまれたことであろう。

第三日目

ホテルを八時に出発した観光バスは道央自動車道を旭山動物園に向かってひた走る。このツアーに、昨日の大会で参議院議長賞を受賞された誌友の小沢淳さんも参加され、自己紹介、案内をしていただいたりして、千歳空港までおつき合い下さった。

次々展開するパノラマ風景に自分が少し大きくなったような錯覚さえおきる。

丘陵地にある動物園は老いの足には少々こたえたが、お天気もいいので気分もよかった。北海道もアツインダと思った。午後一時帰途につく、三日間だれひとり怪我もせず体調も崩さず、太陽の光と酸素を沢山もらい快適ないい旅であった。到着した伊丹空港はむし暑く雨足もかなり激しかった。お世話下さった方々、お疲れ様でした。ありがとうございました。

昂ぶりを静める伊丹雨の夜　　シマ子

路郎忌 本社七月句会

七月七日(火)午後五時半
アウィーナ大阪

本日のお話は、太田　昭さん。「本日は、路郎没後四十四年の路郎忌記念句会です。本来なら、路郎先生を偲ぶお話と思いましたが、〝笑い〟についてお話をさせていただきます。〝笑い〟には色々なジャンルがあります。日本には、古来〝笑い〟にまつわる名言、格言が数多くあります。外国でも同じく多くの格言があります。例えば、フランスに〝何を笑うかによって、その人柄がわかる〟という名言があります。〝笑い〟の効用は多くの医学者が証明しております。笑うことで、ストレスを解消し、運動効果と同じ効用があります。感情表現からの〝笑い〟は人間だけのものです。日本古来の笑いに〝落語〟の世界があり、落語の笑いは川柳に通じるものがあります。路郎先生も一句を一読した時、微笑を漏らすのは、川柳三要素の可笑しみそのもの一と言っておられます。これからももっと、生活を朗らかにする真の可笑しさのある川柳つくりをしたいものです。」と結ばれた。（郁夫記）

出席109名。初出席―宮田宣子さん（生駒市）吉道航太郎・茜さん（堺市）荻野浩子さん（堺市）

交換選者に番傘川柳本社の松本初太郎氏を迎える。

月間賞は高田美代子さん（藤井寺市）に輝く。

（司会―美籠・昭）（脇取り―月子・(矢)五月）（受付―舞夢・加お里）（清記―光久）

席題「葉書」　中野　健吾選

涼と書く暑中見舞いが汗をかく　新一
絵手紙の真ん中辺が笑ってる　ダン吉
雨に濡れ届いた葉書不採用　明子
おもてまでびっしり書いたお礼状　耕治
金釘の母のはがきに叱られる　たつお
葉書一枚寄越して男それっきり　朱夏
絵はがきで夫に知らすプチ家出　遠野
ハガキ出すとメールで返事くれる母　保州
葉書から手紙になって恋進む　扶美代
出欠の欠がどさっと来るはがき　たつお
絵ハガキの追伸表へと続く　正和
外国の絵はがき見栄も書いてある　千里
走り書き事が大きくなる葉書　完次
妻の留守昔の葉書始末する　像山
フランスの切手で絵ハガキはハワイ　求芽
出席の葉書を出してから迷う　和夫
メールが得意葉書一枚書けぬ子ら　昌紀
少年の葉書クイズを書いている　湖風
いい葉書もらい心の満ち足りる　昭泰
アツアツの絵葉書がくる夏最中　昌たもつ
ナンバーを打って律儀な葉書来る　初太郎
悪筆といわれながらも葉書党　航太郎
梅雨明けの頃には使い切る賀状　公誠
うす墨の葉書悲しい報せ抱き　奮水
音が出る葉書が着いた誕生日　月子
絵はがきの字が踊ってるフルムーン　祥昭
絵手紙のキュウリ何故だか曲がってる　慶一
逆さまの葉書が敵意むきだした　耕治
保母さんが書かせた父の日の葉書　恵美子
仏壇にしばらく置いているはがき　修
踏絵みたい返信はがき入れてある　天笑
五〇円のハガキで恋が始まった　佳
絵手紙を待っていたのに喪の葉書　扶美代
母の葉書何度読んでもウッフッフ　シマ子
丑ほどの人気は出ないかもめーる　正和
うれしさを葉書が運ぶ丸い文字　郁夫
大きい字がどんどん小さくなる葉書　見清
人
絵葉書の赤いトマトはおしゃべりだ　新一
地
文句たらたら天眼鏡の要る葉書　天笑
天
お見舞いもお礼もあたたかい葉書　恵美子
軸
ケータイに出せぬ心情出す葉書

兼題「裸」　太田扶美代選

やせこけた裸に国の疲れ見る　喜子
美しい裸が海に浮いている　螢
鶴彬丸太にかえし甦る　智彦
スタートは裸電球ともる部屋　美籠
裸婦像の前ではなぜか身構える　冨美子
曲線をなつかしんでるバスタオル　あかね
真にうけて体一つのお嫁入り　(志)千代
裸での留守居にピンポンは困る　見清
王様を裸にしとくイエスマン　楓楽
軍事衛星世界隈無く丸裸　天笑
これ以上脱げぬ姿で扇風機　完次
ランニングだけでも着てよお父さん　理恵
私が脱ぐと鏡がすぐ曇る　冨美子
さりげない目がクロスする脱衣場　時雄
見たくない裸と見てみたいヌード　みつ子
これ以上脱げない夏は大嫌い　俶子
もう一度裸で量る体脂肪　あかね
王様が裸と気付く水溜り　郁夫
裸に近いファッションの目のやり場　能子
鏡見ぬことにしている風呂上り　則彦
失うものなし裸木の父である　希久子
混浴は声だけだった露天風呂　尚士
裸婦像を見ると煩悩上下する　比ろ志
裸眼では見えぬ真実見る眼鏡　哲子
裸一貫よう頑張った夫です　ばっは
聴診器裸の命覗いてる　柳弘
郵政を裸にすれば謎が出る　紀雄
方程式裸にすれば清楚だな　初太郎
裸一貫再起をはかる怒り肩　光久
丸裸になって悟れぬものがある　シマ子
嫁が来てからはシャツ着る風呂上り　玄也

佳

テレビ電話でなくてよかったバスタオル　寿美
名が売れて裸にされた私生活　俶子
これ以上脱ぐものがない熱帯夜　好
スタートは裸一貫　まだ裸　大輪
履歴書がベール一枚ずつはがす　いわゑ

人

昔なら恐くなかった丸裸　義

地

くつろぎの裸になると客が来る　東吉

天

裸より裸に近い夏衣　和夫

軸

もう歳ですからと控え目な裸

兼題「伝える」　岩佐ダン吉選

ご飯ですよと二階の夫にメール打つ　雅明
思いやりほんとのことは黙っとく　一風
ケータイが消した伝言板の夢　見清
そのまんま伝言をしてまたもめる　正和
お伝えはしておきますと言うたきり　玄也
サヨナラを伝える後ろ手のピシャリ　航太郎
生き残っていくさの愚か伝えねば　正明
為政者に民の怨嗟が伝わらぬ　楓楽
火の海を逃げた戦を伝えねば　正和
無人駅伝言板はそのまんま　正和
人づてが余計うれしいほめ言葉　好
反核を伝え続けているドーム　朝子
九条を守り伝える子や孫に　鐘造
言い過ぎた口を手紙で詫びている　見清
追伸でやっと本音に辿りつき　好
ミツバチが消える無言のメッセージ　朱夏
風化させずあの夏の日を伝え継ぐ　賢子
シンプルに伝えてみようありがとう　寿子
感無量人伝に聞く褒め言葉　則彦
真実を伝えないのも思いやり　ふりこ
生きている内に伝えて欲しかった　舞夢
黒い雨語りつきない鶴を折る　なぎさ
真心が伝わり無二の友となる　ルイ子
お伝えはしときますがと重い口　美代子
彬の映画伝えたいことてんこ盛り　朝子
やさしさが伝わる母の丸い文字　集一
星ひかるメールの返事かも知れぬ　いわゑ
伝言板五分も待てぬ人だった　義
伝えたい事はオウムに覚えさす　大輪
ぼけぬうち戦のむごさ伝えとく　時雄
命あるかぎり伝えるキノコ雲　なぎさ
反骨を今に伝える百日紅　いさお

佳

訥訥としゃべる貴方に負けました　美花
末代へ彬の叫び伝えねば　東吉

九条を伝えています子や孫に　太郎
頼りない男へメモで伝えとく　月子
メールより言葉にしたいありがとう　善純

人
伝言板があった活気に満ちていた　正明

地
一歩引くことで伝わるものがある　冨美子

天
ありがとうすみませんだけ子に教え　一歩

軸
九条が生まれた訳を話したい

兼題「まさか」　川上　大輪選

次の世も一緒になろうと妻が言う　雅明
ラストダンス私となんてどないしょう　柳弘
家計簿の隅にまさかが伏せてある　朱夏
芸人の笑顔にきっと罠がある　湖風
一斉にまわれ右する蟻の列　朝子
シナリオの真ん中へんにあるまさか　浩子
お隣のご亭主に似た目鼻立ち　昌紀
パチンコ屋に行方不明の妻がいる　岳人
何回もまさかを越えて来た絆　集一
振り向くと貧乏神が笑ってた　比ろ志
やっと口説いた彼女がまさか男とは　いさお
びっくり箱の中で眠っていたまさか　美代子
えっまさか息子の声のニューハーフ　ふりこ
短命の総理が続く国の危機　満作
疑問符はまさかの事を知っていた　千里

青天の霹靂まさか路郎賞　朋月
物差しの違いまさかに馴らされる　なぎさ
女子トイレで髭を剃ってる音がする　修
正座して妻がまさかを打ち明ける　光久
逆転のまさかを狙う遠まわり　五月
いちにちを飲まず食わずで妻と居る　湖風
いつの間にか味方が敵にかわってる　一風
帰ったらお隣りが火事だった　(志)千代
まさかなどおますかいなと丸い鼻　淳司
右腕がまさかの旗をふっている　冨美子
まさかにも馴れて一本道進む　哲子
百均にまさかまさかが売っている　郁夫
この人にまさかの縁で嫁に来た　加お里
非常袋のまさかの水を飲んでいる　(志)千代
まさかならギネスブックに載っている　保州
このわたしがあなたの杖になるまさか　扶美代
おまえとはずっと一緒と思ってた　賢子

佳
八十の母が再婚するらしい　月子
出て行けに妻は本当に出て行った　弘風
新聞にボクが死んだと載っている　公誠
まさかの時には魂を売るつもり　楓楽
現在地忘れたままの奴凧　恵子

人
わが妻と同い年とは小百合様　和夫

地
百合の花八十キロになるまさか　像山

天
三つ指を突いて家内のお出迎え　尚士

軸
仏壇の中にまさかが二つある

兼題「寝　息」　松本初太郎選

満腹かすやすや心地よい寝息　庸佑
まるで寝息聞こえるようなデスマスク　あかね
リベンジを考え乍ら寝てしまい　正和
缶ビール一つで心地好い寝息　祥昭
安らかな老母の寝息にほっとする　いわゑ
よう寝てる母を気遣う介護の手　加お里
母の寝息窺いながら出る娘　智彦
何時までの幸か夫の寝息きく　(宮)宣子
リズムよい寝息に今日を終わらせる　能子
熱やっと引いて静かな子の寝息　集一
おだやかな寝息に癒される介護　和夫
大の字になってゆるんでいる寝息　完次
老母の寝息確かめてから自由　希久子
相槍がないはず寝息たてている　時雄
チャンネルを奪っておいてもう寝息　玄也
人並みに悩みあるのかこの鼾　天笑
安らかな寝息無性に腹が立つ　翠公
二度三度母の寝息を確かめる　ダン吉
赤ちゃんの寝息未来が洩れてくる　浩子
口に指一本当てて孫またぐ　一歩
相部屋の男は往復の鼾　淳司
大切なこと言っているのにもう寝息　恵子

反骨の士とは思えぬいい寝息　美籠
母送り嫁を迎えていい寝息　日の出
自画像の少し乱れている寝息　大輪
乗り越して知らない駅に着くいびき　尚士
赤ちゃんの寝息平和な小宇宙　冨美子
ひょっとして耳を枢に当ててみる　航太郎
戸締りと母の寝息を確かめる　保州
祈り届いて周りがホッとする寝息　みつ子
おっぱいをたっぷり飲んでいる寝息　湖風
おだやかな寝息になって朝になる　新一

佳

幸せの笑みがこぼれている寝息　好
美しい寝息あしたは嫁にやる　恵美子
満ち足りた一日穏やかな寝息　希久子
若いっていいな寝息の頼もしさ　哲子
赤ちゃんがすやすや未来握りしめ　いわゑ

人

さむらいの寝息が止まる風の音　湖風

地

縄文の寝息聞いてる深い森　岳人

天

正直に生きた夫のいい寝息　ばっは

軸

母という安心傍にいる寝息

兼題「斜め」　河内　天笑選

斜めから麻生路郎の男ぶり　恵美子
世の中を斜めに渡るニューハーフ　雅明
斜めになって逃げる用意は出来てます　准一
流れ星通天閣を袈裟斬りに　哲男
斜めにかぶる父のシャッポが懐かしい　朝子
お帽子はいつも斜めの美智子様　比ろ志
髪上げた斜めうしろも色っぽい　耕治
ピラミッドロマン湧かせる傾斜角　次郎
エベレストから命をかけた斜滑降　靖鬼
ピサの斜塔歴史の顔をしています　太郎
富士山を袈裟斬りにして鳶が舞う　和夫
広重の雨は斜めの線で降り　好
袈裟がけのポシェットおしゃれおばあちゃま　ばっは
カレンダー斜めに走る一ヶ月　哲夫
斜め上から僕の頭を見ないよう　昌紀
斜めからの熱い視線に動けない　いわゑ
斜め読みしてもポイント鷲掴み　ふりこ
世界史を斜めに読んで寒くなる　湖風
言い訳をする唇がはすになる　冨美子
斜めからじっと見ていたのはピカソ　新一
立ち飲みが斜めに並ぶガード下　朋月
常識を斜めから見る癖がある　義
斜め後妻の目線がデンとある　扶美代
奥様が斜めうしろにひかえてる　希久子
斜めから撮れとメタボが小煩い　明子
古のれんたとえ斜陽といわれても　いさお
傾斜地を棚田に日本人の智恵　玄也
斜に構え聞いております絵空事　(宮)宣子
斜めにかまえ愚直支える妻がいる　(志)千代
ライバルの斜め後ろに席をとり　耕治
誰でもよかったと社会を斜に見る　祥昭
元彼女斜めを向いてすれ違う　時雄

佳

少しよろけてまだ酔ってない酔ってない　大輪
隅っこで斜めになっている男　ダン吉
斜めから写せば髪は濃くみえる　時雄
斜めから君をちらちら見ています　完次
気付かない振りして斜め向いてはる　美智子

人

七夕を斜めに見てるお月さま　美代子

地

傾いた地球に貰う雪月花　たもつ

天

わたくしもピサの斜塔になってきた　高田美代子

軸

惑わせる魔の手横から斜めから

川柳塔まつり（10月12日）

懇親宴余興出演についてお願い

まつり懇親宴では場を盛り上げるために例年余興のご出演を願っておりますが、今回も実施したいと思います。

つきましては諸準備の都合上、演目・カラオケ曲名・所要時間・出演者名などにつき事前に左記までお申出願います。

企画担当　井伊　東吉
TEL FAX　072—444—3227

花地衛壇

毎月24日締切・35句以内厳守　編集部

米子住吉川柳会(鳥取)　渡辺多美子報

富田川尼子の里のひな流し　欣子
行楽に腰痛までがつきまとう　正二
春日和猫も花見としゃれこんで　多美子
ポケットに入れた切符を二度たたく　公一
桜散る花見最高ひらひらと　登美枝
しゃがんで見れば首をかしげるチューリップ　日枝子
春の大地萌えることだけ考える　ふみ
スタートの夢詰め込んだランドセル　すみえ

川柳大阪　長井善純報

そこそこの恋ならいいよ八十歳　美花
そこそこと痒みを告げる夫婦仲　喜楽
大またで春そこそこに夏の空　柳昌
そこそこの夫婦仲です悲なし　紀雄
そこそこに生きて後半丸とする　司
そこそこの苦みがうまいふきのとう　花笑
定年後そこそこ暮す金は有る　珠生
そこそこの妥協許さぬ芸術家　東吉
歩くだけ誤解を招くホテル街　照月
誤解して妻は三日も黙秘権　五月
生返事誤解されたか飯抜かれ　彦太
誤解だと言うが総理の軽い口　ダン吉
誤解などないようにして介護する　芳香
単純な誤解へ海が荒れてくる　笑風
好きでしたあなたを誤解してたから　青道
誤解とけ結び直した赤い糸　朝子
振り出しに戻れば誤解とけるだろう　まつお
あの世へはまだまだ要らぬ案内図　功
冷暖房図書館昼寝するところ　一歩
勧誘を妻断れと目で合図　いっふみ
図々しく小遣い上げて嫁に言う　とし坊
図星です母の想いは千里眼　かよこ
ローカル線地図から消えた駅の跡　章久
肥満体図々しいと誤解され　楽子
明日の地図男はちゃんと胸に描き　一風
知事さんへ喋りすぎるな図に乗るな　勝弘
誉められりゃ図に乗る奴を泳がせる　柳弘
近道は書かれていない母の地図　善純

竹原川柳会(広島)　古田太虚報

大合唱響く美声に酔いしれる　六口
柱時計響きが少し鈍くなり　房子
響き合い金婚無事に迎えたり　笹舟
山笑う五感にビビビ春の鼓動　幸子
イエスウイキャン世界に響き渡る声　輝恵
千羽鶴平和の願い響かせる　比呂子
一生懸命が響くやさしさが響く　蘭幸
夕焼けに満足が有り明日が有る　淑子
平和だなサロンで焼いた小麦肌　一路
癌告知まっすぐ生きて焼く乳房　敬子
夕焼けの向こうに亡父母の居る安堵　弘子
亡夫の日記焼こかいえいえまだ未練　栄恵
平凡で非凡なボクの玉子焼　静風
富士山と対峙して越す人生譜　節生
親孝行したくて出来た峠越え　慶子
引っ越しは父母待つ里と決めている　規代
転勤は人付き合いも丸くする　半徳
わたくしのために越さねばならぬ坂　千代美
乗り越えた力はきっと愛だろう　笑子
八十も越えてうれしい桜餅　力
十年の重さを越えてわが児抱く　汎美
楷書より草書の好きな筆の先　栄香
立夏とか二十四節が迷ってる　太虚
長靴でちゃぷちゃぷ入る水たまり　史子
目で合図送っているのはあなただけ　千枝

和歌山三幸川柳会　武本碧報

印籠を持っていればの話です　保州
その時はお化けに足を描くもよし　和子

いよいよとなればあひるも空を飛ぶ　碧
鎌首をもたげいよいよ悦に入る　絹子
極楽行きの切符を買って待っている　昇
煮詰った頃に切り札出してくる　准一
春ですよ新芽ですよと騒ぐ虫　美花
いよいよというまで父は鬼になる　起世子
いよいよとスパイクの紐締め直し　桂香
またとないチャンスに傘が開かない　俶子
何時か来るチャンス信じて球拾い　武
空腹の蜘蛛がチャンスを待っている　義雄
てにをはのひとつ出番を待っている　朱夏
今がそのチャンスと影が背を押す　みね
チャンスだと知っても足が動かない　理恵
十五夜にチャンスをねだる影法師　柳昌
旅立ちの程よい風に乗る綿毛　イセ
備えある人がチャンスをものにする　東吉
ラストチャンス十歳鯖を読むつもり　章子
じっくりとチャンスを待っている翼　菜摘
受け皿が間に合わないで来たチャンス　かず子
美しい夕日チャンスを待っている　次根
幸運を味方にチャンス物にする　元三
旅行へのチャンスをくれた給付金　かずみ
忘却という神さまのプレゼント　町子
度忘れが喉のあたりで止まってる　順一
約束を忘れてからの針の山　当代
傘忘れ相合傘になる至福　孝子
一つ忘れ一つ覚えてまだ跳ぶ気　幸
特効薬さがしています物忘れ　嘉平
連休も心休まぬ派遣切れ　純子
休んだら噂の的で休めない　紀子
メルヘンの森で心を休ませる　幹子
もう一度産休ですと言いたいね　登美代
連休があろうと変わりない介護　さち子

松露川柳会(鳥取)　小西　雄々報

メロンなど勿体無いと財布言う　興
仏前へメロンを一つ鎮座させ　裕
贅沢とメロン横目に我慢する　広子
初物のメロン切り分け家族よぶ　香音
箱入りのメロンうかつに手が出せぬ　美穂
久し振りメロンを買った給付金　鈴枝
山間に住んで自転車役立たず　久子
カラフルな自転車ならぶ子沢山　弘子
自転車の時代は移り自家用車　信雄
駐輪場放置自転車人を待つ　和代
自転車でがたがた道を思い出す　智恵子
初夏の風サイクリングに髪ゆれる　公美枝
日曜日エコで自転車乗り回す　静江
いい便りペダルも軽いポストまで　正光
自転車は納屋の片隅子は巣立つ　雄々

佳句地十選（7月号から）

有沢　せつ子

一徹の父が意外と妥協する　一風
幾らとは決まってないというお布施　次根
はしゃいでもたかがしれてる小銭入れ　完次
真正面向いて本気の話する　朝子
忍の字が境界線を越えて乱　光久
電柱に仔猫を探すクレヨン画　尚士
投げられた言葉やさしくして返す　扶美代
企みを閉じ込めている山椒粒　芳光
出来る子の親は静かな参観日　好文
騒ぐ血があって人形にはなれぬ　(野)節子

川柳ふうもん吟社(鳥取)　夏目　一粋報

刀折れ矢が尽き離農決めました　洋々
火の匂い絶えぬ女で歳とらぬ　孝男
母として役不足だと日々思う　一京
残念を捨てたら合って来たピント　無限
トントン叩きそっぱくな漁師鍋　蟹郎
赤いけど金魚に鯛はつとまらぬ　一瑶
あなたお茶同権時代当然だ　秀夫
何してもそっぱく後で手がかかる　美恵子
認知の母とピント外れの相槌で　妻子
おこがましくも釈迦をかついで金余り　大鯰

花は咲く当然なれど根に感謝　沢子
役不足椅子のやたらときしむ音　善夫
二兎追って去ってしまった恋の末　成子
防災無線今日もカラスの曲で暮れ　金祥
そっぱくだけれども仕事早い妻　稔
役不足立派な髭が迷わせる　節子
すれ違い夫婦のピントずれている　雅女
当然だまだ逝きません呼ばれても　滋
ぐーたらの婿捨てられて当然だ　寿子
そっぱくでもはっきり言える人は好き　菊香
過疎の村役不足とは言っとれん　房江
バラまきのピントがずれていませんか　圭一郎
まん中辺にピント合わせている授業　美雪
役不足どころか総理荷が重い　清信
ピント少しずれた天才芽が出ない　毅
不正献金辞任コールは当然だ　由美子
当然のように親捨て子は逃げる　茂登子
ピント合わせいらないカメラ持ち歩く　昌鼓
ボランティア役不足でも引き受ける　春名
遠近のメガネはピントもう合わぬ　行男
役不足らしい本気で動かない　秋月
円満は見ざる言わざる逆らわず　清帆
人の言当然とするお人好し　悦子
村一番のそっぱくな嫁あらわれる　益子
蛇行した愛がピントを狂わせる　一粋

岸和田川柳会(大阪)　土橋　房枝報

跳ね橋の絵に魅せられてアルル恋い　呂万
好奇心カバンに詰めて旅に出る　淳風
鶴彬訪ねて長い旅になる　ダン吉
老いの身に旅の道連れ杖ひとつ　俊昭
旅仕たく一番先に常備薬　房枝
恋患いお前にそんなはずはない　洋
主婦業も時に仮病を使いたい　幸子
喜寿の身に仮病不用の不整脈　弘子
昨日は歯今日は腹痛明日はさて　蛙城
優しさが欲しくて咳をして見せる　集一
砂浜にこさえた城をさらう波　玄也
こしらえを早くしすぎてまた化粧　楢代
赤ちゃんをこしらえてからする挙式　和美
ああ見事マッチ棒組む金閣寺　東吉
雑然の心しずめる澄んだ空　柳風
散らかしている時きっと客が来る　寿海
にぎやかに靴が並んだ春休み　泰弘
雑然とした下街の人情味　隆昭
雑然とした人生も味がある　珠子
うすっぺらな台本で足る茶番劇　義泰
アドリブで生きるシナリオ書きかえて　昭
印籠が出る頃さけて祖母にTEL　香代
一日のシナリオ抱いて陽が沈む　力子
シナリオを秘めてゆれてる赤提灯　浅子
産声に夢のシナリオ凛と聞く　仁緑

高知川柳社　小川てるみ報

破壊力競う軍事費など要らぬ　憲一
バンカラを気取り破れを穿くズボン　正躬
靴下の破れは愛の緩みかも　千鳥
破れ目を繕いながらきた絆　てるみ
待たせたら怒る女に待たされる　和広
残照に破れた夢が浮いている　健
恋人を見舞えば花が笑ってた　美恵
やさしさの足らぬ男へ花の種　暖
ヒアリング花としている春の中　京子
桜さくら何ときめく花だろう　美々
爛漫の花に切ない不況風　幸子
おくりびと心をこめて花柩　三千世
散り急ぐ花を諌める風もある　三郎
人生の区切りへいつも生きた花　典雄
花と散る覚悟を持って生きてきた　ふき
逆境も花の笑顔で耐える君　まさ子
千の風花も実もある人でした　和江

川柳らくだの会(鳥取)　岸本　宏章報

読み書きと笑いでぼけぬようめざす　せつ子
誤解とけ胸いっぱいに陽をうける　冨貴子
食べ過ぎを裁く胃酸が不足する　大鯰
着順は問わぬ完走だけ目指す　宏章

二次会へ誘って友の胸ほぐす　清帆
聞き飽きた言葉にあなた美人だね　孝子
日本一めざす自惚れ衰えず　邦昭
裁判員クジからもれてほっとする　寿賀子
飽きました食事の準備五十年　仁子
余生まだめざすものありなお至福　玲子
半分は胸におさめて生きている　紀子

ほたる川柳同好会(大阪)　水野　黒兎報

孤立する百も承知で核実験　柳童
百歳を越えてもニュースにならぬ世に　祥風
鉤裂きにパッチワークをのせてやる　春代
繕いが昔を語る歴史です　禮子
靴下を繕う時代遠く去り　長一
高血圧とことんまでのおつき合い　勇治
ひと言を損ね十年詫びている　輝
とことんまで頑張ったから今がある　美智代
繕った後から影が糸を抜く　宇乃子
とことんまで追及しない妻に負け　見清
割れ鍋に妻の綴蓋感謝する　幹治
子の躾とことんまでは追いつめぬ　信男
激情家百面相を笑えない　久子
百均を散歩コースに入れておく　雪子
入梅へ時を惜しんでいる掃除　桂子
入退院見とどけている百日紅　黒兎
百薬の長とは笑止その酒量　勝

川柳塔唐津(佐賀)　仁部　四郎報

妻の留守自動扉が開かない　蜂朗
病院のトイレ心の心電図　四郎
ソマリアの帰還を祈る留守家族　高明
手洗いとうがいマスクで予防戦　実
まだ旬だ米寿が謳う雪月花　勝視
饒舌の女たまには貝になる　輝夫
兆の字がひらひら消える怖しさ　晴翠

尼崎尾浜川柳会(兵庫)　田原　一兆報

こんど来たら二の矢も用意しときましょ　一兆
褒められて花は一気に開きだす　政江
最低の姿でわたし溺れてる　由美子
引っ込めたポケットのなか手を繋ぐ　菜々子
こだわりの技術を研く町工場　よしひさ
最低やファスナー噛んでちびりそう　祐康
さりげなく会釈を交すだけの人　雪菜
形式にばかりこだわる姑と住む　イサミ
こだわりの腕が匠を支えてる　靖鬼
紫外線強く文句の日本晴　真陶
適当に嫁姑の車間距離　五月
こだわって自給自足の定年後　よし子
爪染めた美人外堀埋めに来る　奮水
平凡に生きて自分の色変えず　江美
良い文句日々の指針にして生きる　亀与子
酔い覚めの水で胃薬飲んでいる　野薫
アハハハハ最低の日を吹っ飛ばす　紀乃
今最低これから浮び上るだけ　美代子
無口だが父の背なには何かある　比ろ志
これまでの敵介護のときにとる　かずお
仏像も小便小僧も夏衣装　哲男
枇杷の実が熟れると父の日を思う　鹿太
文句なら胸のすくよなタンカ切れ　里江
平凡でも目線は少し高くする　孝一
最低も記念の一つ胸を張る　美義
目標を三位狙いに切替える　正和
こだわりを捨てると人の味わかる　キヨミ
分譲地で冬眠していた不覚　耕治

川柳塔おっぱこ吟社(香川)　川崎ひかり報

走れない私の影が転んでる　賢
もう走ることは叶わぬ老の杖　ひかり
徒競走スグ前走るは課長の子　あきら
走ってもゴールは見えぬ生きる道　八重子
泣き笑い走り続けた人生路　よしみ
休みなく走り続けて五十年　いさむ
栄光へ走り続けた春ウララ　弘
先走りして赤恥をかいて居り　放任
弱点を見せて人気が高くなる　初恵

川柳塔なら　坊農　柳弘報

スマイルで隠し続けてきた未練　善純
水虫を隠しまだまだ若い足　彰治
海賊も裸足で逃げるイージス艦　紀雄
サンダルの裸足はつらつ風を切る　ふりこ
貧乏神裸足でそっと寄ってくる　博一
日本晴れ両手を上げて深呼吸　千梢
足跡が廊下に残る猫の恋　章久
憂さ晴れて勿体ないは後のこと　とし子
スマイルが心の内を覗かせぬ　萌子
証言は両手で吊り皮持っていた　弘風
涼しさは裸足に触れた草の露　孝子
生きている実感湧いてくる裸足　洋子
スマイルの効果鏡で確かめる　集一
美しい女おんなの黒を着る　寿美
お百度の裸足祈りも血のにじみ　一風
透明なバリア人妻美しい　真理子
妻の裸足眩しく見てた日もあった　理恵
スマイルも演技派よりも清純派　隆盛
美しい嘘で大人になっていく　良一
引き際の美学ピエロも背伸びする　恭昌
決断がつくと夕陽が美しい　太一
真心の達者スマイル連れてくる　次郎
追伸にスマイル一つ添えておく　義
美しく包んだ嘘をもてあます　恵美子
とっときのスマイル恋をしています　柳弘
スマイルで明日へ渡る虹の橋　朝子
美しい仕草でやんわりと拒絶　美千子
にんげんの誠が見えて来た裸足　國治
繕ったスマイル僕が疲れてる　ダン吉
反戦の義足はだしで歩きたい　道子
すぐに答えを出したくなって裸足　信子
地球の命肌で感じている裸足　美智子
青空でお握り同士がよく喋る　義久
清算の過去美しい一ページ　弥生
人間のスマイル神のプレゼント　順啓

川柳塔きゃらぼく(鳥取)　大塚　恵子報

何くわぬ顔で美人のスカート踏む　日枝子
三寒四温の寒が私の身を刺しに　繭
にっこりと笑ってほしいから笑う　富美子
ひ孫みているとまた長生きがしたくなる　やえ
汗を拭く右手に沁みてくる夕陽　瑞枝
アセチレン臭いなつかしい宵まつり　章江
古里で老兄の訛にひびかせる　なみ
五十年勤めた辞書は置いておく　晶子
生きている証三食昼寝つき　亜弥
連休のお陰体調取り戻す　春枝
くわしくはネット調べと医者が言う　寿々子
歳ごとに心と体もがく日々　初枝
桐の花気付きにくくて気高くて　ふみ
安らぎを私にくれる朝の花　那珂子
百均のワイングラスに蘭を生け　麗
今が花だと思いつつ過している　玲子
月の夜に迷った笛がなり止まぬ　恵子
久し振り料理する手が踊り出す　晴子
万緑に染まり疲れたスニーカー　てい子
マスクした鳥で混み合うエアポート　千代

西宮北口川柳会(兵庫)　黒田　能子報

色愛でて口で転がす新茶の香　キヨミ
葉の上で人をみつめる雨蛙　歳子
餅をつく兎を消した月探査　毅
面影をひ孫に残しセピア色　てる
影法師しっかり歩めとついてくる　玲子
夕茜はるかはるかに父の影　早加永
腹黒がばれやせぬかと内視鏡　茂
過去という化石の影を懐しむ　比ろ志
師の影を慕い向上心が追う　折杭
舞台裏汗と涙の黒衣達　孝一
ややこしい影がちらつくレントゲン　朋月
影法師一つ増えてる夏の宵　直
まあだだよ可愛い影が駆けぬける　緑
体内へ影を探しに行くカメラ　順子
足長さん影に回ってする援助　基輔
プライドを捨てたふりして自負の影　松煙
母の影重荷背負うて来た姿　哲男

移り気が恥の上塗りしてしまい　萬的
居心地の悪さ思わず席移る　千代
隣から欠伸を貰う午後のバス　正和
移し絵で遊んだ頃のわらべ唄　光子
移動する度にこころも痩せてゆく　忠
靴音をひたすら待って夕支度　江美
天才とひたすら信じ育てた子　弘子
いくつかの転機ひたすら生きて今　一兆
けれんなくひたすら生きて悔いもなし　りこ
惜しまずにひたすら介護する笑顔　光久
吉報をひたすら待っているポスト　美籠
ひたすらにわが感性を問う作業　耕治
冗談の中で迷うている本音　哲子
四本柱東京タワーも北口も　キク子
そちらでも虹見えますか娘にメール　章子
名産とお情け詰めて旅カバン　奮水
ワンランク下げて余生をしています　鹿太
四季の移ろい今朝もやさしい雨と来る　わこ

川柳花の輪(大阪)　妻谷　重風報

座をはずし戻った時のこの空気　風
ばあちゃんが来ると家中いい空気　一幸
善人が空気読めずに敵つくる　克衛
ピンチ抜け笑い話の後日談　泰子
ピンチにはいつもの声と笑顔です　やすの
ピンチですよおくじ三本抜けてます　重風
一枚のチラシで並ぶ客の群れ　ミヨノ
関白にさせる一枚上の妻　音成
事あれば一枚岩の夫婦です　善栄

川柳ささやま(兵庫)　遠山　可住報

手ごろだと思った趣味の奥深さ　純子
待たせたな手頃の杖で頼みます　美緒子
ワキ甘い辺りが欠点だろうなあ　二英
探すのは極楽行きの手本です　美紗子
筍を誉めてもらった両隣　多美子
勝負事あと一点の難かしさ　開子
子や孫におふくろの味残しとこ　かほる
手ごろでは失礼少し見栄を張れ　幸子
通知表点より皆勤ほめてやる　美智子
お手本は同じでいつか出る個性　哲男
楽しみはこれから古希は通過点　可住

岬川柳会(大阪)　八十田洞庵報

一寸した暗示に躊躇する怖さ　令子
衣装より心飾った方が好き　貞夫
煩悩を洗い流して雷雨すぎ　茂平
同窓会老いて残留十八人　利武
呼び捨てにして結婚ほのめかす　俶子
躓きつつ我が人生も古稀の坂　桜琴
満ち足りて生きる尊さ忘れてる　東吉
見られてる私じゃないの赤い服　洋子
足音を今か今かと待つ犬よ　範子
風の誘いに乗った花びら旅に出る　和美
躓いて躓く余生長い道　和香
残照に小さなうそを伏せておく　年子
着飾って求愛ダンスしてみたい　蛙城
不景気も畑の中はふっ飛ぶぜ　覚治郎
吹く風があの世この世を結んでる　みやこ
禅僧の一筆映える床飾り　福三
乗車客はしゃぐバス停老いの旅　悦子
捨てないでもう一度生かす再生紙　とみ
生きるため海外に行きドナー待つ　富美子
明日もまた命支える演技する　洞庵

長柳会(大阪)　村上　直樹報

みどり児の笑顔に見惚れ小半時　直樹
終電で睡眠してる春の宵　マサ
廃墟からよみがえりビル乱立す　輝子
物忘れ睡眠不足と言いのがれ　明子
巻き戻し出来ぬ人生千切られる　よしお
被災地が廃虚と化して慰霊塔　康博
緑風に頬なでられて午睡する　敬二
来る来ない花びら千切る淡い恋　幸子
千切れ雲親に外れて淋しそう　武男
関白はフロメシネルで会話する　光弘
天の天並みいる猛者をぶっ千切る　たけし
小屋暮し廃虚の街に日が昇る　けい子

人恋し軍艦が目を覚ます　和子
豌豆を千切るカラスと知恵比べ　孝代
渇水のダム湖の底に分教場　淳司
にぎり飯笑顔が並ぶ母の愛　エミ
あの雲はもう見たくないきのこ雲　正博
お別れにボタンを千切る好きな人　正一
睡眠薬効かなくなって深夜便　幸雄
廃虚見た母の基軸は戦わず　ふみ
世界遺産廃虚が語り出すロマン　三和子
廃虚にも落ちていたのか花の種　一慧
少子化の日本廃虚になる予感　正美
青い星廃虚にさせぬエコライフ　冨美子
人情の廃虚化憂う老いの愚痴　芳野
ノンレムの中に一瞬父が居た　正子
千切れるほど手を振る母は点となり　和代

川柳若葉の会(大阪)　宮崎シマ子報

老いて今物事深く考えず　慶子
友の相談深みにはまるその前に　シマ子
母吾が子深いきずなのいじめ何故　香住
雑音に背を向けている石仏　弘直
金メダル目指し世界が背伸びする　ますみ
思いきり伸びをしてみた気が晴れた　加津子
伸びのびと育ったらしく逞しい　烈
伸び縮みしながらうまくおつき合い　能子

川柳茶ばしら(愛知)　板山まみ子報

窓際にヘチマを植えるエコ努力　文男
呑みながら交す約束すぐ忘れ　遡行
逆らわず滝の流れのように生き　かつ子
大アサリ頑固親父のようなもの　雅美
滝しぶき浴びて苔むす地蔵尊　幸子
丹田に命みなぎる若葉風　美千代
大声でおしゃべり滝に負けぬ音　まみ子

城北川柳会(大阪)　伊達　郁夫報

丸腰で九条楯にする不安　じゅんこ
百均の籠に僅かの幸を買う　あさ子
三吉も歌手も育てた新世界　令子
母さんがシンボルですという家族　かずお
今に見ておれとトマトの花が咲く　妻子
壁一つまた一つ越え親離れ　知恵子
ひとことも言わず背中で語る父　克己
ひとことで水に流れるわだかまり　静枝
ひとことを言えぬ地獄の黙秘権　求芽
ひやかしにも毎度おおきに背に贈る　章久
にこやかに接しているが棘がある　野鶴
今マスクしてたら変に思われる　勝弘
プライドという名の壁が邪魔になる　満州夫
ひとことの優しさ心なごませる　ルイ子
顔洗ろて来いと駄洒落あしらわれ　萬作
拉致家族老いの背中に厚い壁　麗
金持の壁をトカゲが視察する　とし子
冤罪の壁を破ったDNA　満作
千年の祭り拡げるまんと君　弘風
気転利かせたマスク百枚邪魔になり　昭
百歳に学ぶ律儀な身だしなみ　東吉
好きなもの食えとお医者の言う不気味　直樹
やさしさがシンボルだった僕の母　一歩
好きですと言えず逃がした青い鳥　賢子
ひと時を善人になる花の寺　志華子
戸を開けて飼わねば弱る青い鳥　明子
ちょっぴりの欲たずさえて生きのびる　たもつ
あのときのひとことあの世まで重い　修
楽に来た道ではないがすぐ忘れ　典子
阪神よ頑張れシンボルの虎が泣く　倫子
美しいトリックマジシャンの気転　柳弘
冷や汗で重ね塗りする嘘の壁　順三
シンボルの虎がこのごろ猫にみえ　集一
修羅の壁破ってからの青い天　朝子
追伸に温いことばが添えてある　喜八郎

南大阪川柳会　吉川　寿美(吉)報

宝塚新入生も八頭身　修
出来るなら小学校からもう一度　一歩
学校は安全だったのは昔　東吉
しんがりを務める偉い人となり　三男

ど偉い人だたんと借金持ってはる　とし子
キュリーさんナイチンゲールうちの嫁　滋郎
偉いさんばかりでとんと酔えぬ酒　克己
夫には三つ指ついて仕えます　なぎさ
偉い人になれとは母は言わなんだ　太郎
偉そうにぺらぺら品格うたがわれ　萬的
父の樹の高さ越えたい竹とんぼ　寿美
核作るヒト科偉いと言えますか　楓楽
ノーマークの自家菜園の茄子熟れる　シマ子
喝采も野次もなかったノーマーク　更紗
名も告げず一億円を府庁まで　和雄
ノーマークそれでもスピーチ用意する　忠昭
この不況安く買えますノーマーク　弘泰
裏方に徹して今もノーマーク　志華子
裁判員制度選ばれ引き締まる　弘子
ノーマーク一筋の道行く牛歩　章久
真っ先に花を咲かせたこぼれ種　たもつ
ブランドに縁ない母の好い笑顔　柳伸
売れっこになっても師匠立てる弟子　柳弘
職退いて妻に弟子入り台所　弘風
曽良が居て芭蕉が今に名を残す　勝弘
四国路を歩き大師の弟子になる　栄子
洗い場へ残飯のない食べっぷり　百合子
洗わずに炊けるお米も売っている　千梢
山ほどの嘘を洗ってから逝こう　ルイ子
迷ったら冷たい水で顔洗う　直子

五月雨に錆びた心を洗わせる　直樹
正論を吐く二枚目の舌洗う　集一
母の日は心を込めて洗う墓　昌紀
三億円に洗脳されてまたジャンボ　祥昭
第六版脳みそ洗うために買う　ばっは

八尾市民川柳会（大阪）　宮西　弥生報

あじさいが満足するまで雨よ降れ　扶美代
満ち足りてまだ飽き足りぬ人の性　賢子
ワイワイと騒ぐ生徒を怒鳴る夢　浩三
丹精の花は感謝の彩で咲く　寿鶴
自画像にまだまだ青が欲しくなる　寿之
秀句おめでとう座布団を一枚　いさお
ゆっくりの今日をほどいていく枕　加央里
水色のシャワーむさぼる雨蛙　秋子
鞦韆は銀河より垂る夢一座　幸岳
即かず離れずよくぞ保った夫婦仲　耀一
フェーズ6舐めたら怖いパンデミック　紀雄
ポニョが浮くまでの湯舟でエコ家族　柳伸
どしゃぶりに頬叩かせて有頂天　欣之
横綱はいわし日本の食文化　草風
満足をしきった顔の隙だらけ　幸生
おいしいねそのひと言がききたくて　あかり
真相を抉るつもりの赤ワイン　森子
開放の躾けじめに重い檄　弥生

川柳塔鹿野みか月（鳥取）　土橋　螢報

老妻に鮮度もあった頃がある　宣子
新鮮な風をみやげに里帰り　和子
トゲのある挽ぎたて美味い焼茄子　実満
新鮮な朝を見逃がしたのは酒　盛桜
グループの新会員に目が移る　孔美子
やっかいを背負い慣れてる縁の下　諷人
国の借金国民に背負わすか　はるお
貧乏を背負いすくすく子は育つ　菊乃
善人という仮面背負った肩の凝り　彩子
寡黙にも家族背負いし父がいた　武彦
ランドセル親の思惑など知らぬ　茶子
鷲峰山背負って強い南風　弘子
かっこよく背負った泥が落とせない　八重
ブランコの背中押してる祖母がいる　露子
ブランコ高くパパが揺すって虹を見せ　惣子
ブランコの絆を漕いできた親子　永子
真夜中のブランコ漕いで母に逢う　みさ子
現代っ子ブランコよりも塾通い　房子
相乗りのブランコためらい傷がありぶらんこが運命線を描いている　富久江
ブランコに揺られて明日を考える　汲香
ブランコが取り持つ恋のうら話　久枝
ブランコが水平線を傾かす　くに子
道草にブランコ漕いで暇つぶす　石花菜
　　睦子

妖精が夜のブランコ漕いでいる　節子
マイカーを背負って旅のカタツムリ　かおる
手の相にしかと大吉握りしめ　みどり
従いてきた貧乏神と吉を引く　満
吉報がとどいて唇が乾く　螢

川柳クラブわたの花(大阪)　西川　義明報

おしゃれにと勇気いります花の杖　欣子
微笑んで優しく添える介護の手　妙子
生活音時の流れに添うて生く　俊子
いなくちゃ困る夫の留守に背伸びする　晴美
花粉です新インフルじゃありません　浩三
パート代衣装とランチ足が出る　孝子
うぐいすの声こだまして山笑う　和子
飛ぶ鳥を落とした時もあったとさ　八寿子
ベテランの力急場を救ってる　ふりこ
オバチャンのお喋りまるでガイドさん　ますみ
インフルが列島仮面にする恐さ　はじむ
インフルエンザ渡航歴なく感染し　たえ子
初月給息子がくれたお小遣い　美代子
気楽だがちょっと寂しい妻の留守　耀一
脳トレで頭の堅さ知らされる　知佐子
何もかも許して行こう八十路坂　民
好奇心若さ引きだすエネルギー　君江
新緑の濃いグラディションの山動く　博子
月給日夫が天使を連れてくる　愛子
聞こえぬとうまい言葉で惚ける老い　宏至
嫁入りの鶴の布団は翔べず老い　幸枝
褒めるのも叱るも愛のさじ加減　美はる
笑顔には笑顔で返すのがルール　義明
子に還る痴呆の母が子を案じ　いつふみ
婆ちゃんの皺の笑顔にある渋み　宏
テレビにて見る体操で身も肥える　正春
やりくりをする月給の泣き笑い　一風

翠　洋　会(大阪)　安土　理恵報

古い事しかと覚えている指紋　千梢
あげたいが使い古しの臓器です　日の出
古文書の紙魚が歴史を物語る　満作
眼差しの熱い写真はセピア色　れんげ
古い男と古い女がオムライス　義
蛇の目傘下駄履き姿似合う街　浩二
下町の路地に情緒の軒すだれ　正雄
それぞれの町屋の奥にあるドラマ　富子
歩いたら街の様子がよく見える　蕉子
街明り待つ人がいる温かさ　集一
子が育ち姑を看取った町いとし　みつ子
人の世にはぐれて地下の街に住み　尚士
土のない街で鬱病増えてゆく　楓楽
久し振り街なみのれん多いよう　知之
奈良街の名所旧跡あるロマン　舞夢
格子戸の家並ちゃわんのふれる音　理恵
ならまちで明治ロマンの風を聞く　昭
なら町の雰囲気こわすビル一つ　げんえい
奈良町を行ったり来たりああしんど　桃花
墨の香があふれレトロな店構え　茶々
時を超えならまち心に語りかけ　捷也
平城京ロマン追ってる旅ごころ　弘子
一服のお茶室町の香りする　恭昌
身替りの猿ぶーらりとのどかなり　志華子

川柳塔まつえ吟社(島根)　三島　淞丘報

ど忘れが多いと棚に笑われる　叮紅
棚から牡丹餅どう食べようか思案中　紫晃
藤棚の下ゆるやかな浮世かな　知恵子
棚の上へそくりいつか移動され　注湖
すぐやる課棚に置きたいものもある　禮子
もっと本読めよと棚の本が言う　宏
大衆の声が巷で渦となる　静恵
四世代笑いの渦に囲まれる　房子
うわさほど渦中の人は悪くない　薫
渦抜けて白いカモメで飛んでいる　日出子
朗らかな笑いの渦に巻き込まれ　長吉
判断の甘さ渦中へ引き込まれ　たけし
陶工の腕は炎を見逃さぬ　桂子

好きだから貴方の腕に五十年　幸子
いいじゃない酔ったふりしてすがる腕　治代
腕枕昨夜みた夢ひざ枕　政子
激動を一途に生きた細い腕　スズコ
生涯を農に汗した母の腕　和歌子
飛魚を掴んで夏を近づける　畔
名人と言われる芸も売ってます　茂美
退屈で売られた喧嘩買いに行く　昌枝
売り声の安い方へと足が向く　ちえこ
神を売る人が来るから鍵かけた　繭
売り出しの旗がしょんぼり濡れている　多喜
ねばねばと歯切れの悪さ嫌になる　邦代
靴底にガムのねばねば不愉快だ　英子
ねばねばは私の性に合っている　蘭水
ねばねばと粘る延長戦になる　柳歩
ねばねばの麻生太郎という男　螢
ねばねばに触ったとこが痒くなる　淞丘

米子住吉川柳会(鳥取)　渡辺多美子報

こいのぼり成長祈る空高く　欣子
風邪はやりマスクはおどり身を守る　登美枝
すれすれの線を保ってつまらない　未延子
パンジーが五月の空に疲れ気味　多美子
八十路だんだん峠急になる　正二
あきらめてからは響きがにぶりだす　ふみ
旅にまず女必ず菓子袋　公一
五月晴れ疲れを知らぬ鯉のぼり　すみえ

豊中もくせい川柳会(大阪)　藤井　則彦報

地球が見える高い所に住んでいる　(永)玲子
ふる里は銀河の向こう母ひとり　美義
ふりだしに戻るジグソーパズル解く　葉子
化粧した顔は他人になっている　(久)千代
しろがねは金より固い骨密度　求芽
ようやった煙草を止めて飴しゃぶる　千枝子
出発の日までせわしいのが女　則彦
ロープウエーで一気に登るモンブラン　美智代
雑草で生きていきいき酒もある　啓生
父の日の一日だけを祝われる　尚士
ウイルスが変異しながら攻めてくる　早人
高い雲血液検査異常なし　勇治
金は無いドナーカードは持っている　(岩)玲子
お互いにチェンジの夢を抱く夫婦　寅次郎
悪妻になってやるんだこれからは　寿美子
もっともっと高いところに居たほとけ　見清
汗知らぬ白手袋がテープ切る　幸雀

岩美川柳会(鳥取)　石谷美恵子報

知恵の輪にはまった妻が飯を抜く　幸安
知恵熱か風邪かと迷う赤ん坊　節子
ワンマンの親父意外に泣き上戸　孝男
お日さまはボスでワンマンそれで良し　完司
ワンマンの手綱捌きは美人妻　公子
ワンマンの父もやっぱり親でした　菖子
ワンマンもトーンも落ちた夫の老い　幸枝
ワンマンの大正生れ夫に持つ　和子
新緑に今日のいのちを慈しむ　螢
流行の水着がはしゃぐ海開き　重忠
流行の服着ただけの試着室　茶子
流行を追ってアクセク生きている　一京
インフルの流行秋と言う噂　一粋
健康にいいと言ったらすぐ流行る　雅女
仲人が枝葉をつけて婿探す　蟹郎
枝と枝ぶつかりながら森になる　一瑶
枝分かれしてから個性光りだす　忠良
これ以上枝葉で騒ぐのはよそう　圭一郎
みたこともない木の枝を挿木する　はるお
裏山の枇杷も豊年枝たわわ　睦子
家系図の一枝私ぶら下がる　たぬ
この枝は切るか残すか手がふるえ　稔
年金で網渡りする妻の枝　清帆
三椏はやがて貴重な和紙となる　和枝
どの枝を伸ばすか思案するハサミ　幸子
借り物の知恵がエンスト繰り返す　美恵子

六甲川柳会(兵庫)　伊勢田　毅報

衰える気力ゆさゆさ樹を揺らす　みつ子
紙屑にしてしまいたい請求書　いわゑ

海沿いの見知らぬ町で再起賭け　毅
ひまわりの海で少女は陽の匂い　武彦
透き通る海に心が洗われる　政一
荒海を避ける港になりたいな　利子
いつの日も見守っている母の海　(早)孝子
二人旅海の向こうにかけてみる　繁義
大入りのプールは海の傍にある　勝
沈む陽が火の海見せている平和　礼甫
潮騒でふと目をさます旅の宿　基輔
朝もやの夜明けの海は神秘的　悦子
大漁の釣果に女房不思議がり　洋一
何回も結び直したあとがある　能子
雨上り少しきどって帯結ぶ　美恵子
難局を乗り越え絆深くなる　順子
結び目が緩むと遊びしたくなる　和郎
口元をキリリ決意はゆるがない　登美子
結ばれた二人の笑顔日本晴れ　勤
約束を結んだ小指守りぬく　史郎
四十年ようやく結ぶ夫婦糸　忠貞
結び目が緩まぬように謎かける　光久
真っ直ぐな道を愚直に生きている　弘
急ぐなと自問自答し老いの道　寛子
不器用にわが人生の道を行く　春香
還暦は道の半ばと気合入れ　浩司
それぞれにいつか途切れる歩む道　義行
道ならぬ愛が招いた落し穴　(山)弘子

生きるなら真っ直ぐよりも丸い道　千賀子
雑草の庭に一本ポチの道　(飯)弘子
挨拶を交し山道譲り合う　美穂
終電のベルが言わせた君が好き　茂
花水木空へスカーフなびかせて　(小)孝子
目立たない位置で力を溜めておく　無限
風みどりゆっくり愛をふくらます　楓楽

富柳会(大阪)　古田千華報

面接日アングル変えて試される　和子
ぎっしりと詰った金庫夢に出る　糺
たんぽぽが春の試練に耐えて飛ぶ　壽峰
先ず一杯嬉しくなってもう一杯　七朗
絆半分にして空白になみだ　伸雄
三十路来て見合コン皆試す　高鷲
擡頭の新人がいて弾む会　アキ
若妻の未熟ためして怒られる　晴美
大不況ハローワークへ人の群れ　昌成
空白を埋めて炎が立ち上がる　未知
桃さくら今日のうれしい彩で咲く　よりこ
嬉しさが逃げないうちにお裾分け　深雪
太巻きにぎっしり詰める母の愛　佳子
嬉しくて今日のドレスが決まらない　登子
母さんになれたあなたの誕生日　奏子
スモールがビッグ征して夢果す　武人
喝采はないが嬉しい褒め言葉　澄子

ぎっしりと年輪無駄なものはない　彦次
試作品の中に溜ってきたマグマ　扶美代
脳細胞ぎっしりだったのも昔　紅紫朗
逆転の場面の方へ押す風よ　よしみ
ご自由にその一言で試される　恵
給付金俺の分まで握る妻　寿之
爛漫の春花売りの夢を買う　欣之
生きざまがぎっしり詰まる古い書架　信子
約束のひとつを返す花の首　鬼焼
春風に鈍い五感を叩かれる　森子
試し切り今宵は縦に真二つ　千華

倉吉川柳会(鳥取)　竹信照彦報

足腰が動くあいだは遊びます　由紀子
遊ぶのは今日も明日もはくたびれる　賀寿恵
パソコンに向い毎日遊んでる　泰輔
カルチャーに化けて遊びが大手振る　次男
健康で遊んでおれる今がいい　瑞子
遊園地子供の騒ぐ声しない　けいこ
妖怪が港の運気盛り上げる　鬼一
還暦で男の運は尽きました　いさお
転けたけど骨は折れずに掠り傷　和枝
しっかりと運握りしめ出る赤字　克枝
飛行機の真下運気の丸い虹　よしえ
運不運戦死した友生きた僕　重忠
ハローワーク運気をかけて通う日々　日出子

Uターン運気が老いて泣き笑い　小生
世渡りに運気逃れる事できぬ　かつみ
頭の中は昭和レトロのセピア色　完司
頭右歩調合せた戦中派　風露
先頭でガイド旗ふる観光地　喜美子
鈍感も敏感もいてもりあがる　康子
鯛焼きを頭から食う至福時　悠子
この頭親から受けた血が巡る　和子
稲穂にはなれぬ頭が顔を出す　酔芙蓉
身構えることなく土に生きている　節子
玄関に盾と竹刀が置いてある　石花菜
女の館二重ロックは身の構え　玲子
四国路へみんな古刹の寺構え　京子
門構え立派な空き家猫屋敷　貞子
三歳児ウルトラマンの構えする　萩江
構えても可愛いばかり子かまきり　美津恵
先頭は軽トラ初夏の道走る　照彦

川柳大阪　長井善純報

しとやかに見えてはいるが欲深い　東吉
貪欲に負けてメタボが同居する　司
欲にボケ真中に居て気が付かぬ　章久
死ぬまでは酒一合と酌む人と　一歩
産声に明日へ頑張る意欲湧く　義明
食欲が無いわ無いわと三杯目　芳香
母の日へ無欲な老母の肩を揉む　朝子
握り箸そうそう欲を出しはじめ　美籠
受け止めて欲しい私の燃える愛　柳弘
欲のない人とご一緒眠くなる　柳昌
プロポーズ今か今かと待つ返事　功
二階さん一郎さんもはっきりと　美世子
あの日から返事さえせず黙秘権　五月
良い返事お願いします袖の下　照月
気のきいた返事が好きで通う店　まつお
つないだ手握り返してくる返事　花笑
お金なら駄目と返事は先にする　一風
ふてくされ返事しない子また叱る　勝弘
核のない世界を描く僕のペン　ダン吉
このままじゃ未来予想も描けない　珠生
我が人生描いた道の程遠さ　喜楽
あれこれとプランを描く定年後　鉄心
同じもの描き方ひとつさまになる　和
結婚に夢描かない子供達　笑歩
眉描く顔に気合いが入ります　かよこ
リハビリの明日を描く靴の紐　いっふみ
サプライズ信じ余生を描いてる　紀雄
相応の夢を描いて生きている　美花
迷惑な私に似てるモンタージュ　善純

川柳塔すみよし(大阪)　岩崎公誠報

幸せな今をしっかり抱きしめる　りつえ
前兆はあの日あったと今思う　桃花
つるつるの肌が今ではつるし柿　朝子
今どきのなんて言えない自分いる　ヒロ
今日だけは好きな事だけしてみよう　芳香
告白の今がチャンスと月が出る　まつお
過去未来真ん中辺に今がある　岳人
今にして思えば苦労無駄でない　庸佑
もとの娘になどと今頃無理な妻　蕉子
今になって約束破るなんて無茶　太郎
前頭葉さまよう老母の今むかし　ばっは
いつの世も今の若者くり返す　定子
今ここで言えばあなたの顔たたぬ　かりん
五月病今母さんを恋うばかり　シマ子
今すぐに来てと言われる果報者　裕之
拉致の子は今どうしてる親ごころ　半銭
乗り越えた試練いまこそプロポーズ　美籠
今風の服が着たいとダイエット　チエコ
神様に命預けて今日も生き　(矢)五月
やっと今汗水吸った花が咲く　日の出
始末して今の不況を耐えしのぶ　(奥)五月
幾山河越えたからこそ今がある　賢子
目と鼻の先でもしもし今どこや　克博
今が好き今が嫌いとしのび逢い　遠野
今もなお天動説を信じてる　昌紀
置き去りにしていませんか今の幸　柳弘
腹八分健康保つ今がある　章久
傷ついた記憶へ今が突き当たる　哲矢

今までの自分と違う明日を行く　舞夢
今詰めた種が丸見え下手な芸　公誠

川柳塔打吹(鳥取)　野口　節子報

父の日のプレゼント待つ年になる　泰輔
父さんが好きな酒やめ淋しそう　富恵
借金は無いぞと亡父が言い遺す　照彦
酒好きの父に供える一升瓶　勝憲
退職後潰しも効かず粗大ゴミ　清
潰れたか店の跡地が駐車場
孫が居ない肝を潰した遊園地　よしえ
名の知れたつぶれ梅でも高級感　龍枝
考えて潰したはずがひと波乱　勝誉
一日を潰して母の相手する　睦子
不意の客今日のプランを潰される　美知江
茹でたてを潰してほっこりいもサラダ　美代子
企業戦士静かに星の潰し合い　たけ代
潰しても潰しても咲く黒い花　節子
敏感な喉が刺激にむせてくる　石花菜
盲目のピアニスト知り刺激され　京子
テポドンに刺激九条足が浮く　貴恵
ウエストに刺激がなくてボヨンボヨン　和枝
おくりびと死の尊厳を刺激され　公恵
まだ夢が欲しくて風を刺激する　孝恵
蜜蜂が花のふところ刺激する　美ッ千
地獄から刺激もらって飛び起きた　玲子
息するに貧富の差などありません　くにこ
鰻屋の前で思わず深呼吸　滋
病む妻の寝息をのぞく月明り　克枝
信念を曲げたら息が止まりそう　重忠
やれやれと溜息ついて金毘羅さん　螢
息合った二人ときにはぼろぼろに　禎元
息殺し出るに出られぬ墓の中　和子
息止めて肺の病気を探し出し　義人
油虫息を殺してねらい打ち　久芽代
包丁が息を荒げて西瓜見る　芙美子
溜息の度に幸せ逃げて行く　いさお
地球にも息抜きさせてあげたいね　紀美子
息はしているか心は燃えているか　三津子
　　芳光

はびきの市民川柳会(大阪)　永田　章司報

いつまでもマスクが欲しい妻の口　泰子
マスク美人取ればおかめかひょっとこか　悦子
坊さんもマスクしたまま南無阿弥陀　いさお
竹とんぼ消えたあの日の青い空　久仁子
根は横に竹は真っ直ぐ天をさす　アヤ子
猪おどし人間様が驚いた　敏
竹藪に雀が群れて黄昏れる　庸佑
竹とんぼ幼なじみは黄泉の国　一知
気にかかる人ができてからよく転ぶ　六点
心転がしまあるくなって生きている　ヨシ枝
次の日の朝まで転んだままの靴　一壺
年の功転んだとこで住みついた　美代子
転んだら起きればよいと笑う孫　恵子
大不況鉄腕アトム助けてよ　真一
ロボットの欠点人を愛した事がない　扶美代
不景気にロボット参上役に立ち　フジ
人間はいらぬとロボット幅利かす　ちづる
ロボットやないから移る豚の風邪　光男
言い過ぎた昨日が深い傷になる　ダン吉
きのう見た夢の続きをもう一度　正子
無責任な約束すると泣かれます　喜久子
ターミナルマスク美人の列が行く　りつえ
初物と大笑いしてメロン食べ　美喜
縄文の人も眺めた丸い月　獏沓

いずも川柳会(島根)　佐藤　治代報

金欠病防ぐ抗体まだできぬ　美千代
終点まで酒と女のはなしする　ひろし
筋道になかった風の平手打ち　桂子
筋道を通せば何もこわくない　キミエ
見えそうで見えぬゴールが人生だ　放舟
ゴールまで仕切り直しを繰り返す　美江子
本筋に入ると森を出られない　久枝
苦しさが楽しさとなるゴールイン　孝亮

小心で壁に頼ってばかりいる　テル子
人生のゴールの旗が見えてきた　祐次
私のゴールはきっと杖がいる　治代
慎重に消した足跡浮いている　佳子
隣の子ひと足先にゴールイン　嘉寿恵
誘惑に心尖らすバラの刺　歌子
防げない噂が風に乗って舞う　たえこ
ゴールまだ見えぬ拳を確かめる　しげる
筋書きの通りに育ちほっとする　敬子
ちょっと目を離すと消えている亭主　裕
石段を登りゴールの風に会う　房子
手を打とう筋張るほどのことでない　ちえ
一筋の発言前に進めない　房緒
ぶつかった壁から道を教えられ　多喜
女房が微笑青筋たてられぬ　煩悩児
筋道も時に開いて風を入れ　喜子
削除キー押して古傷みんな消す　淞丘
築地松風を防いで父の貌　玲子
最強のゴールキーパー母だろう　圭誌朗
楯になる父の躰は傷だらけ　寿美
消すのには惜しい言葉だ彫っておこう　蘭水
ゴール地点小さなわたしの旗を振る　きみえ
壁一つ越えた時から花になる　すみこ
海という壁は果てしなく遠い　章峰
筋がいいなどとおだてにのっている　茂美
ゴールみたいだ神さまが待っている　文子
私の弱音は壁に聞かせない　ちかし

川柳さんだ(兵庫)　北野　哲男報

モナリザは離婚届を出した笑み　晃
美しい頃の家内といつも居る　茂山
こっそりと信じて入る美人の湯　順子
大切に美人のたまご育てる　千代子
別嬪が胸の谷間で誘ってる　不明子
あきらめて心美人を目指す歳　忠
笑ってるそんな自分が謎である　ちあき
音楽でストレス流す宵もある　雅司
生き残る一輪の花いとおしむ　歳子
マイペースで歩くと皆に追い抜かれ　二英
春野菜採れてサラダの天こ盛り　好文
病床にエールを贈る蛍かご　キヨミ
身の汚れ洗い直せる里の空　婦美子
のぞかれて裸にされたゴミ袋　章子
電話での評価はいつも声美人　哲男
月初めなんでか妻がよく出かけ　正和
人生に謎があるから夢もある　一泉
うちの娘も個性派美人になりそうな　一子

京都塔の会　都倉　求芽報

イケメンの修行僧からきく法話　扶美代
核廃絶　如意輪観世音菩薩　尚士
聞くほどに小町はまさに謎の美女　昌乃
百夜通い適わなかった恋しのぶ　葉子
春もみじ生かされてます生きてます　公子
夫婦して他人丼食うている　ますお
ビリでよし東大生にかわりなし　克治
十指みなそれぞれまめに生きている　朝子
足ることを知ってそれぞれ欲が減る　典子
それぞれに歩いてるけど同じ道　英旺
それぞれを認めているが通す意地　文代
日記には人それぞれの足の跡　美義
それぞれの方程式で翔ぶ夫婦　宏子
おんな皆それぞれ違う色で燃え　保子
それぞれの命磨いて名を残す　欣之
それぞれに好きなことしてやじろべえ　わこ
ハローワークの空気冷めたい職探し　比ろ志
結局は妻に行きつく探しもの　福子
呆けたときの保険がないか探してる　則彦
手のひらにのる幸せを探してる　義子
それぞれに星を探して語り合う　弘之
ローカル線で探す昔の忘れ物　哲子
ありがとう夢を探した時刻表　益子
探さないで恋の魔法の夢ごこち　ふりこ
探し疲れてしばらく夢とひと休み　能子
最後まで探しにきてよかくれんぼ　かずお
闘病のキャリアは自慢にもならぬ　鹿太
ウイルスと人と果てしない知恵比べ　綾子
作戦は10分進めてある時計　求芽

水際作戦ウィルス網をすり抜ける　満子
天の邪鬼へ反対語から攻めてゆく　シマ子
猫だまし土俵の鬼に通じない　啓子
非常階段で作戦立て直す　義
作戦と無縁に生きる丸い石　輝美

川柳ねやがわ（大阪）　籠島　恵子報

情熱の火は丹田の底で沸く　集一
父のビンタいつも正義の音がした　祥昭
思いきり派手な傘買い雨を待つ　美智子
ふる里にふっと逢いたい人が住む　茜
ポスターはやる気に満ちていたお顔　賢子
夜目遠目傘の中ならまだ美人　朝子
ケットルに沸いてまっせと教えられ　じゅんこ
おむかえの傘に駄賃が高くつき　あさ子
雨降れとおニューの傘を振る子供　珠生
アメリカのずっといいなり核の傘　忠央
いつの間に棘を抜かれた白いバラ　ただよし
若き日の沸く血で問うた人生譜　鈍甲
破れ傘支えてくれた痩せた骨　とし子
この河を渡ると辛い過去消える　亜成
この橋を渡れば僕の城がある　博泉
酒の量減ったと妻が不安がる　栄二
駐車禁止のポスターの前駐車する　弘風
綱渡りでした二人の半世紀　仁清
からくりで熱い涙は出て来ない　弘一
傘の骨なみの存在感である　修
里帰り風呂が沸いたと一番に　三郎
沸点を上げて風向き読む詩人　柳弘
きみまろに無茶苦茶言われ客が沸く　さち子
家族みなまっとうに世の中渡る　ルイ子
風呂沸いた飯が焚けたとピッピッピ　かすみ
いらん時持って要る時持たぬ傘　銀杏
ピンぼけはしても母さん宝です　一風
沸点の違う男と勝負する　たもつ
恋一途炎の橋と修羅の橋　郁夫
渡る子等も減ってわびしい歩道橋　薫
地球と言う大きな傘が病んでいる　恵子
勇気ある男に荒い風当たり　あやめ
好きと言うこの一言に胸が鳴る　壽男

堺川柳会（大阪）　河内　月子報

近所まで来たので寄っただけと父　和夫
若返る玉手箱などないかいな　好
派手すぎず地味すぎもせず生き上手　扶美代
ご近所のニュースを聞きに美容院　梓
ミステリーお玉じゃくしが降ってきた　俶子
大声が出そうだ窓をさっと閉め　かりん
ピーポーに近所総出の気の配り　なぎさ
目玉だけ買って他には目もくれず　玄也
ご近所にミサイル好きの国があり　としお
ご近所で醤油を借りたことはない　千代
金の玉子採用取消しの不況　像山
ボヤ騒ぎあって隣の人と知る　舞夢
隠しごとなんぼかあって夫婦星　五月
棺桶の中で無念の目を閉じる　時雄
名司会派手な言葉は使わない　公誠
看護師さん何でも彼でも滅菌し　八千代
娘が黒で私は赤い服にする　さくら
雄たちは派手に着飾る鳥仲間　天笑
給付金派手にパッパと飲んでチョン　直樹
サイフには一円五円すぐ溜まり　日の出
出来るだけ派手な生前葬にする　つづや
パチンコ玉あそんでくれるだけで良い　半銭
はで派手の女の旦那の地味なこと　冬虹
どう派手を着ても若さが戻らない　のん子
未亡人増えた近所をひと回り　月子
かみさんがナンパされたと目をほそめ　恵勇
少年が宝にしてるラムネ玉　朋月
恋猫のかけ抜けてゆく派手な声　喜子
堪忍の涙が頬に目は真っ赤　ゆきの
玉の汗あすの勝負に賭けている　篤子
父の日に歳忘れさす派手なシャツ　雅明
赤いシャツ妻に派手かと聞いてみる　妻子
寝たきりを隣の猫がなぐさめる　たつお
神さまに奈落の底でめぐり合う　明子
風向きで献立分かる壁一つ　山彦

第33回 全日本川柳2009年札幌大会

表記大会は6月28日、京王プラザホテル札幌で開催、事前投句一九二九名、ジュニア六六四四名、当日出席五六九名の中から選考され受賞句が決定した。

〈一般の部〉

文部科学大臣賞

青い星宇宙遺産にしませんか　千葉　津田　暹

参議院議長賞

実印を彫って家族の盾とする　北海道　小沢　淳

川柳大賞

牛の瞳の中で毀れてゆく地球　北海道　進藤　一車

大会賞

時々は斜めに走る思考力　沖縄　小波津　芳子

切手箱出たら自由になる切手　大阪　天根　夢草

雪の夜影が咳して生きている　北海道　角谷　幸二

ねじ伏せた大地が熱をおびてくる　北海道　篠根　朱美

岬には深い祈りの星が降る　長崎　勝盛　青章

悠久の時を反芻してる牛　大阪　藤井　満洲夫

鉛筆の先に私の大宇宙　静岡　織田　順子

流氷の女神を哭かす温暖化　北海道　工藤　満知

この道を走るネクタイ締め直す　東京　安藤　陽子

両肩を下げてやさしい地平線　奈良　板垣　孝志

面いくつ格差を生きる音で掘る　北海道　高松　時子

〈ジュニアの部〉

北海道知事賞

広い野にぼくのしるしの杭を打つ　香川（小6）山路　哉太

札幌市長賞

大空はすべてを守るお母さん　大阪（中2）菰田　雅子

札幌市教育長賞

ポテトの芽太陽見上げかがやいた　北海道（中2）加藤　沙奈

全日本川柳協会会長賞

地球がね大きな口で笑ってる　広島（小4）金山　佑莉乃

ロボットはにんげんになるゆめがある　広島（小3）上岡　和真

人間は地球を守るヒーローだ　広島（小5）中川　直也

教育新聞社賞

イナバウアーポテトチップス皿の上　新潟（小6）仁平　健也

ジャガイモはよく見てみると顔がある　広島（小5）湯浅　光平

親の背がこの世で一番広いもの　熊本（中2）坂梨　惟央奈

鶴彬生誕百年記念川柳大会

9月11日（金）　住まい情報センター

兼題と選者「クリーム」新家完司
「前」井上一筒
「青空」久保田半蔵門
「夫婦」森中惠美子
「待つ」河内天笑

締切13時・会費2000円・懇親会4000円　欠席者は特別投句のみ1000円同封

特別投句「大地」

〒599-0222 阪南市箱作1366-14
森村美花宛　出席者はチラシ刷込みのハガキ使用　**8月20日迄**　2句

主催　あかつき川柳会　**後援**　日川協他

川柳ぐるーぷGOKEN
第8回 誌上川柳大会
作品募集

◎題・選者
「息」
武智 絹子（松山）第7回優秀者
山田ゆみ葉（京都）第7回優秀者
井上せい子（松山）第7回優秀者
播本 充子（八王子）第7回優秀者
「雑詠」
片上 雅仁（松山）歌誌「遊子」
古谷 恭一（高知）木馬
渡辺 隆夫（横浜）バックストローク
中野 千秋（松山）GOKEN
◎締切・発表 9月20日 消印有効
11月発表誌送付
◎投句料 1組1000円 何組でも可
◎投句先 〒790—0212
東温市田窪1976—17
野口三代子 方
川柳ぐるーぷGOKEN係 宛
◎賞・その他 特選他、優秀者次回選者
◎お問い合せ 原田 否可立
☎ 089—932—3765

ふれあいの祭典
兵庫県川柳祭 in 伊丹

事前投句の部 締切9月4日（消印有効）
課題と選者（3名共選）各題1句
「空」 樋口 祐子・岡田 篤・奥田みつ子
「歩く」 中野 晶平・北村 紅絵・浅雛美智子
「鳥」 山辺 和子・菅野 泰行・長浜 美籠
応募料 1000円 所定用紙（コピー可）
応募先 〒664-8503 伊丹市千像1—1
伊丹市役所 文化振興課内
兵庫県川柳祭伊丹市実行委員会 宛
ジュニアの部 原則として兵庫県内の小・中・高生 学校を通じて応募
「楽しい」（3名共選）1人1句 無料
発表大会 12月6日 締切11時30分
「酒」 村上 氷筆
「花」 前川千鶴子
「水」 上野多恵子
「のんびり」 平山 繁夫
「虫」 渡邊稲佐嶽
会場 伊丹市商工プラザ「マルチメディアホール」
締切 11時30分 会費 1000円
主催 兵庫県・兵庫県芸術文化協会他
後援 兵庫県教育委員会・伊丹市教育委員会 他

残暑お見舞い
申し上げます

季刊
「川柳展望」A5版 一五二頁
誌代 四、九六〇円（年間）
☆見本誌進呈いたします。

〒567-0009
TEL 072・649・5226
FAX 072・649・2334
茨木市山手台4—6—3—101
川柳展望社

川柳塔すみよし

会長　鶴田遠野

残暑お見舞申し上げます

岩崎公誠　古今堂蕉子
井丸昌紀　澤田定子
石丸正太郎　坂　裕之
板尾岳人　柴本太郎
榎本日の出　柴本ばっは
榎本舞夢　中井　萠
大川桃花　長浜美籠
大久保のん子　西村りつえ
小倉ヒロ　福岡末吉
大谷篤子　堀田温子
大隅克博　坊農柳弘
奥田チェコ　松井明江
奥村五月　宮本かりん
大内朝子　宮崎シマ子
河井庸佑　森松芳香
川原章久　森松まつお
岸田幸子　矢倉五月
吉川哲也　山本半銭
北村賢子

（あいうえお順）

お願い

川柳塔社では2010年10月に『川柳雑誌』『川柳塔』通巻1000号記念大会開催に当り『麻生路郎読本』（仮題）の出版を予定しています。

麻生路郎に関する**書簡・写真**或いはどんな些細な情報でも、お持ちの方は川柳塔事務所までご連絡下さいますようお願い致します。

川柳塔社

（06－6779－3490）

第23回 堺市民芸術祭川柳大会

と　き　9月13日(日)　12時30分開場
ところ　堺市立栂文化会館３階第１講座室
堺市南区桃山台２丁２番１号
TEL　072－296－0015
（泉北高速鉄道・とが美木多駅３分）
おはなし　「あみだくじ人生」　河内　天笑
宿題と選者（50音順）
「痛　み」　川野　弘昭　選
「　猫　」　久保田元紀　選
「賭　け」　古今堂蕉子　選
「嫌　い」　小寺竜之介　選
「捨てる」　本田　洋子　選
「スロー」　松本初太郎　選
「空　気」　矢倉　五月　選
席題なし、各題２句、締切13時半
出句料　1,000円（作品集、参加記念品呈）
賞　各題秀句に呈賞
主　催　堺市文化団体連絡協議会
後　援　堺市・堺市文化振興財団
連絡先　堺川柳協会
〒593-8305　堺市西区堀上緑町2丁16－3
河内天笑方　TEL・FAX 072-278-4706

尼崎川柳大会

と　き　8月29日(土)　午後３時開場
ところ　尼崎市総合文化センター２階
（昭和通２丁目7－16）
☎06－6487－0800
締　切　午後３時40分
課題と選者　各題２句　席題なし
欠席投句拝辞
「　恋　」　伊達郁夫　選
「菓　子」　森田律子　選
「祈　る」　長川哲夫　選
「ドラマ」　矢沢和女　選
「歩　く」　松本初太郎　選
「ほどほど」　長浜美籠　選
会　費　1,000円（発表誌呈）
懇親宴　２階レストラン　4 000円
主　催　尼崎川柳協会
後　援　兵庫県川柳協会・尼崎芸術文化協会
連絡先　事務局　山田　耕治
☎06－6491－1612
☆ご祝儀等の儀は固くご辞退申し上げます

井笠川柳会第29回誌上大会
蘖 ひこばえ

課題と選者
「医　者」
久保田　半蔵門　選
前　川　千津子　選
大　蔵　千　鶴　選
「　竹　」
岩　田　明　子　選
濱　邉　稲佐嶽　選
石　原　淑　子　選
応募要領　所定の用紙、又は便箋に各題２句を列記、〒番号・住所・氏名・柳名・TEL番号・所属柳社を明記、応募料と共に送付。
投句料　１０００円（発表誌呈）
締め切り　8月31日　消印有効
投句先　〒714-0081　笠岡市笠岡2289
井笠川柳会　TEL.FAX 0865-62-6200
賞　品　各課題共、天位獲得者の内から総合成績により句碑贈呈者を決定。その他の三才入選句に賞品進呈。
※入選句は年間賞の得点対象。
主　催　井笠川柳会

第59回 富田林市民文化祭川柳大会

と　き　9月19日(土)　12時30分　開場
ところ　富田林市中央公民館　２Ｆホール
電話　０７２１－２４－３３３３
（近鉄富田林駅下車南へ200m）
アトラクション：ハーモニカ演奏
（アンクル中原と仲間たち）
各題２句　欠席投句拝辞
課　題
「　豊　」　みぎわはな　選
「　野　」　岩田明子　選
「　渡　」　植野美津江　選
「纏　う」　土田欣之　選
「　要　」　墨　作次郎　選
「　虫　」　池　森子　選
締　切　午後１時３０分
会　費　1,５００円（お茶、発表誌呈）
賞　秀句賞
懇親宴　4,０００円（当日受付）
お問合せ　池　森子（電話 0721-25-0603）
主　催　富柳会・富田林市川柳協会 他

柳界展望

○6月16日、豊中もくせい川柳会25周年記念大会は、豊中市市民会館に於て132名の出席により開催。天位。

いきいきと流行り廃りのない顔で　谷口　義

○第4回松江市川柳大会は6月7日(日)松江テルサに於て140名の参加により開催。同人の天位。

薄氷を何度も踏んだらしい眉　政岡日枝子

○第60回玉野市民川柳大会は7月5日(日)サンライフ玉野にて開催。同人特選句。

見事にしずくする古戦場の桃　播本　充子

○7月8日(水)、朝顔川柳大会は、台東区生涯学習センターに於て180名の出席により開催。天位。

スタッフを横糸にして夢を織る　播本　充子

▽表　彰△

○(社)全日本川柳協会は80歳以上の功労者を顕彰。川柳塔社参与の八木千代さん(米子市)他四名が選ばれた。

○第2回20年度個人句集から川柳文学賞は『風』佐藤美文氏（さいたま市）に決定。6月27日の日川協札幌大会前夜祭にて表彰。

▼訃　報▲

●池端登紀子さん（同人、丹後屋肇氏の妻）6月21日逝去。23日に親族のみの葬儀が行われた。

▽柳界動向△

○第33回全日本川柳2009年札幌大会へ出席の為、西出楓楽理事長、板尾岳人相談役、山本希久子副理事長他21名北海道行。

○麻生路郎特別展開催。7月4日～8月16日(無休)9時～5時半、文学記念室（尾道市東土堂町13—28 TEL 22—4102）志賀直哉旧居他3館共通300円。

○番傘川柳本社の主幹に、礒野いさむ氏が重任。

▽訂正とお詫び△

7月号89頁上段16行目、久米寺→久米田寺。95頁下段6行目、深く続けています心の本籍地→探し続けています心の本籍地。108頁上段2行目、別別に出て手を振る曲がり角→別別に出て手を握る曲がり角。46頁第113回大阪川柳の会、選者板野美子→嶋澤喜八郎

▽新誌友紹介△

堺　市　遠山　唯教
紹介者　柿花　和夫
西宮市　酒田　浩司
紹介者　山口　光久
江南市　脇田　稚美
紹介者　早川　遡行
大阪市　片岡　松枝
四国中央市　篠原　久

常任理事会＝出席21名。①85周年記念大会、進行順序、各部分担の確認②特別常任理事会提案事項の検討③新年度常任理事・理事の推薦について④理事の任務について⑤高野山合祀祭の日程11月7日に実施。⑥定例確認事項、同人一名承認。⑦各部報告事項⑧その他次回8月7日(金)1時30分～

——○——○——

○文化祭吹田市民川柳大会9月27日(日)、締切12時15分宿題と選者「真」小野紅紫朗・「連想吟介」北山ヤギエ・「無」笠島恵美子・「遊ぶ」松本あや子・「酒」片岡加代・「蜻蛉」中野健吾。会費1500円、懇親会3000円の申込06—6833—0744中川隆充　9月15日まで。

○第24回渡辺銀雨賞すずむし全国誌上大会。課題「時」選者　岡崎守・千島鉄男・熊谷岳朗・高橋葉月・雫石隆子・松本幸夫・加藤鰹・津田暹・浅利猪一郎・田辺進水・赤松ますみ・平田朝子・久貝むらさき・鍋谷福枝・渡辺松風・瀧正治。投句料1000円、締切10月31日。投句先〒018—1724　秋田県南秋田郡五城目町東磯1丁目7—11湖東印刷所内すずむし全国誌上大会係宛。賞あり。新米あきたこまちを1位～10位まで他。

新同人紹介

金川宣子（かながわのぶこ）

—哲男・正和推薦

編集部からお願い

柳界展望欄掲載の情報を事務所宛お送り下さい。大会に於ける同人の天位にあたる句、新たに建立された句碑、出版に関する情報、住所変更、訃報等お知らせ下さい。

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳 藤井寺	16日(日) 午後2時締切 白・蜻蛉	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 髙田美代子
豊中 もくせい 川柳会	17日(月)午後1時50分締切 負ける・記事・カード・自由吟	豊中市中央公民館　阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2—8—4　江見見清
川柳 さんだ	18日(火) 午後1時から 地・記念・いっぱい・自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5—2—4　堀　正和
川柳塔 すみよし	22日(土) 午後2時半締切 世代・緑・夏	住吉区民センター　南海高野線沢之町下車3分 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉3-16-8-206 鶴田遠野
和歌山 三幸 川柳会	22日(土) 午後1時から スリル・もうひとつ・永久	和歌山商工会議所4F　第2会議室 〒640-8111 和歌山市新通7—17　古久保和子
東大阪市 川柳 同好会	22日(土) 午後7時締切 メタボ・引く・誤解・皿	東大阪市立社会教育センター3階 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3—3—21　片岡湖風
川柳クラブ わたの花	22日(土) 午前9時半から 墓・滝・焼く・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒543-0032 大阪市天王寺区細工谷1-3-25 レジデンスタワー上本町803　吉村一風
岸和田 川柳会	22日(土) 午後1時半締切 現役・こなす・さばさば ジャム	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-586 井伊東吉
八尾市民 川柳会	**第56回 八尾市民川柳大会** 23日(日) 午後1時締切 谷・面・魔・里・紅・木・父	八尾文化会館5F　レセプションホール 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
はびきの 市民 川柳会	23日(日) 午後2時締切 眠る・スリル・きょとん・黄	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8—31—11　塩満　敏
川柳 ふうもん 吟社	23日(日) 午後1時より 首を取れ・バラす・平和ボケ	鳥取駅2F　シャミネホール 〒680-0872 鳥取市宮長205—45　萩原美雪
松露 川柳会	24日(月) 午後8時締切 夏バテ・泳ぐ・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
南大阪 川柳会	24日(月) 午後6時から 大阪弁・鈍行・狭い・雑詠	住まい情報センター（大阪くらしの今昔館・5F） 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋筋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
京都 塔の会	31日(月) 午後2時締切 すくむ・行く・異変	ハートピア京都 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328—202　都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所（06-6779-3490）へご連絡ください。

8 月 各 地 句 会 案 内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
堺川柳会	**第27回夜市川柳大会** 1日(土) 午前10時30分開場 **詳細は本誌７月号71頁**	堺市総合福祉会館　５Ｆ 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3　河内天笑
城北川柳会	1日(土) 午後1時開場 度胸・問う・ぴったり・自由吟	旭区老人福祉センター３Ｆ 地下鉄千林大宮③番出口 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
富柳会	1日(土) 午後1時から 執着・割る・自由吟	富田林市中央公民館 （近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m） 〒584-0072 富田林市高辺台3-3-18-105　古田千華
倉吉川柳会	1日(土) 午後2時締切 口(くち)・別・考える	倉吉市　明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔なら	6日(木) 午後1時開場 満ちる・席・気軽	奈良市立中部公民館４Ｆ　近鉄奈良駅④番出口 〒634-0812 橿原市今井町２－１－24－901 安土理恵
川柳大阪	**川柳大阪800号記念大会** 8日(土) 12時開場 **詳細は本誌７月号71頁**	大阪市立中央青年センター 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14　長井善純
川柳塔まつえ	8日(土) 午後2時締切 矢印・不覚・干す・くすぐる	松江市雑賀町　雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町1388　安達幸子
川柳塔打吹	8日(土) 午後1時から 妙・連鎖・突く	倉吉市上灘町９　上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637－３　牧野芳光
川柳塔みちのく	8日(土) 午後5時締切 仏壇・拝む・ぐったり	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ１階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53－１　小寺花峯
川柳塔わかやま吟社	9日(日) 午後1時開場 吉・煙・罠・距離を表す言葉	近鉄カルチャーセンター２Ｆ　JR和歌山駅前 〒640-8482 和歌山市六十谷1188－14　川上大輪
西宮北口川柳会	10日(月) 午後1時開場 胸・数える・たまたま・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩3分　プレラにしのみや 〒662-0841 西宮市両度町２－19－515　山本義子
尼崎尾浜川柳会	11日(火) 午後2時締切 ノック・ずるずる・人生 自由吟	尼崎女性センター　トレピエ　阪急武庫之荘駅南へ200m 事務局 〒661-0953 尼崎市東園田町２-45-８　山田耕治
ほたる川柳同好会	11日(火) 午後1時半締切 夏・信じる・面白い	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール　蛍池駅駅前ビル５Ｆ 〒561-0813 豊中市小曽根2－4－1　水野黒兎
川柳ねやがわ	16日(日) 午後1時半締切 吠える・好き・距離・自由吟	寝屋川市立総合センター　寝屋川市駅からバス 〒572-0063 寝屋川市春日町９－９　高田博泉
岬川柳会	16日(日) 午後1時半締切 年金・ストレス・互い	淡輪17区集会所 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵

一賞選考規定（要約）

①路郎賞　川柳塔欄の入選句から5句
川柳塔賞　水煙抄欄の入選句から5句
昨年9月号から今年8月号までの一年間の入選句の中から自選し、8月号に刷込みの応募用紙を使用の上、**8月10日必着**で本社宛郵送する。

②第一次選は主幹・理事長・副主幹・副理事長・編集長・選考委員で行い、各賞20編ずつ選出し、第二次選者へ郵送する。

③第二次選者は折り返し、路郎賞、川柳塔賞の各選考結果を本社宛通知する。選考には順位をつけ、第一席（五点）、第二席（四点）、第三席（三点）、第四席（二点）、第五席（一点）の五編の番号を予め本社で用意したハガキに記入のこと。

④第二次選者
本社関係　主幹・理事長
地方関係【　】＝ブロック（　）選者数
【北海道・東北　関東　北陸（2）】
【京都・奈良（1）】【大阪（6）】【兵庫（3）】
【和歌山（2）】【鳥取（4）】【島根（3）】
【岡山・広島・山口（2）】【四国・九州（2）】
計25名

地方関係の選者は、適宜交代制をとり、均衡をはかることにする。

⑤川柳塔欄・水煙抄欄に六ヵ月以上出句した人に応募資格を認める。

川柳塔社各賞選考規定

①川柳塔社には、路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬抄賞・一路賞・各地柳壇賞の六賞があり、毎年十月に表彰する。

②自選集の作者は、すべての賞の対象としない。

③各賞とも、原則として同一人に同一賞を授賞しない。

④路郎賞・川柳塔賞については、準優秀作の場合、上位は差し支えないが、同位または下位には授賞しない。

⑤路郎賞・川柳塔賞の選者は、その任期中は路郎賞の対象としない。また、愛染帖・檸檬抄欄の選者も、路郎賞の対象としない。

⑥路郎賞・川柳塔賞の選考要領については、別途に定める。

⑦愛染帖賞は選者が決定し、主幹の承認を得るものとする。

⑧檸檬賞は二名の選者がそれぞれ五句ずつ選出した十句中から主幹が決定するものとする。

⑨一路賞・各地柳壇賞は、常任理事会の委嘱を受けた選者が受賞句を決定し、主幹の承認を得るものとする。

（備　考）
この規定は、現行の選考規定を一部改定したもので、常任理事会で承認の上、平成十八年度から実施するものとする。

平成二十一年度二賞選考委員

第一次選者（六名）

河内　天笑・西出　楓楽・川上　大輪・小島　蘭幸
村上　玄也・山本希久子・木本　朱夏

第二次選者（二十七名）

本社関係（二名）　河内　天笑・西出　楓楽
地方関係（二十五名）（　）内は人数　ブロック内五十音順

【北海道・東北　関東　北陸ブロック（2）】

小野句多留・今　愁女

【京都・奈良ブロック（1）】 坊農　柳弘

【大阪ブロック（6）】

穴吹　尚士・井伊　東吉・出口セツ子・寺川　弘一
平松かすみ・藤村　亜成

【兵庫ブロック（3）】

黒田　能子・牧渕富喜子・山口　光久

【和歌山ブロック（2）】 喜田　准一・武本　碧

【鳥取ブロック（4）】

石谷美恵子・夏目一粋・最上　和枝・両川　洋々

【島根ブロック（3）】

伊藤　寿美・竹治ちかし・松本　文子

【岡山・広島・山口ブロック（2）】

大石あすなろ・山本　玉恵

【四国・九州（2）】 市丸　晴翠・清川玲子

昨年九月から今年八月の間に誌友から同人になられた方へ

「路郎賞」「川柳塔賞」のいずれか月数の多い方を選択して応募してください。

ただし、「路郎賞」には川柳塔欄作品から、「川柳塔賞」には水煙抄欄作品からの応募となりますので、間違いのないようにお願いします。

平成二十一年度各賞選者

愛染帖賞　新家　完司

檸檬賞　**高瀬**　霜石　木本　朱夏

一路賞　小西　雄々　松原　寿子

各地柳壇賞　遠山　可住　播本　充子

編集後記

☆今月号には二賞選考の応募用紙が付いています。同人、誌友の方もれなくご応募お願い致します。118頁に記載されている応募規定を読んで自選の五句を書き8月10日までに事務所へお送り下さい。

☆今年も一次選二次選をくぐり抜け、どなたが栄光を勝ち取られるのでしょうか。10月号にて発表します。ご期待下さい。

☆海百句を特集しました、海の広さ、豊かさ、茫漠とした大きさはさまざまの事柄にたとえられます。

心象風景として捉えた海が多かったようです。

現実の海にしても荒々しい海や凪の海、その日により変わる海の姿があります。

☆私自身は自然の海辺には遠い環境に育ちました。旅先で見る海には感動したり、ある種の脅威を感じたりしたものです。

海の魚を食べ、母の海を漂い、情報の海に溺れたりしながら今日まで海と関わってきました。

☆水銀柱はどんどん上昇、近年暑さも一通りではありません。さりとてクーラーにばかり頼れず、何かいい消夏法があれば教えて下さい。

（希）

◇刑事裁判へ被害者や遺族が参加できる制度が二十年十二月から始まった。

◇殺人や傷害致死、強姦、自動車運転過失致死傷などの事件である。被害者や遺族が希望し、裁判所が許可をすれば検察官の隣に座って、被告に質問することができ、量刑に意見を述べることができるのである。

◇被害者や遺族は被告と顔を突き合わすのはいやという方もあれば、被告にいろいろと質問をして事実を直接聞きたいという方も多いと思われる。量刑に意見を述べる機会が与えられることは何よりである。

◇これら事件の遺族の心情は計り知れないものがある。過去の殺人事件の遺族は極刑のほかは考えられないと言っている。今度初めて参加した遺族は極刑を望みますと意見を述べた。

（光）

ひとこと

川柳との出会い

二年前の春、当時勤務していた六甲道勤労市民センターで一冊の小冊子に出合った。三宅保州著「川柳しませんか」である。「メダカの学校」が開校準備をしておりその一環として小冊子を配布していたのである。初心者の私に大変解り易く興味深いものであった。定年を間近にひかえ何か趣味でもと思っていた私に充分すぎる動機付けとなった。

このような出合いがあって早速「メダカの学校」の仲間に入れて貰った。初めは水槽の中で溺れないかと不安だったが、スタッフの方方の熱心な指導のもと、背を押されながら元気で泳いでいる。

今は勉強会後の反省会(呑み会)が楽しみの一つになってきた。これからも仲間の輪が益々広がることを願っている。素晴しい出合いに感謝している次第である。

友が好き一会が優し風のなか

（山崎　武彦）

○全日本川柳札幌大会に出席した。川柳塔の仲間の小沢　淳氏（札幌）が第二席の参議院議長賞を得られた。

実印を彫って家族の盾と

する　（兼題　彫る）

○文部科学大臣賞は

青い星宇宙遺産にしませんか　（兼題　自然）

自然や温暖化を剥き出しに詠まれた句が多い中で、「自然」の兼題で哺乳類ヒト科の地球への反省を詠まれていて、印象的であった。

○人間を詠むとは、人生やその汗や涙を詠むものと思い込んでいたが、人類の反省の想いをリリシズム豊かに詠まれたこの句に出逢い、もっと広い視野から人間を詠まねばと痛感した。

○来年は鳥取で開催されるが、実行委員長の鈴木公弘氏（川柳塔理事）が、開催の抱負を力強く述べ、大勢の参加を求められた。（尚）

二賞選考

応募用紙

	路郎賞（川柳塔欄・同人）
	川柳塔賞（水煙抄欄・誌友）

○印を入れてください。

月	月	月	月	月
頁	頁	頁	頁	頁

◎下段に掲載月と掲載頁を記載のこと。
◎裏ページの要項を読んで応募してください。

きりとりせん

地名

姓・雅号

応募要項

① 川柳塔欄・水煙抄欄に六カ月以上、出句した人に応募資格を認める。

② 平成20年9月号から平成21年8月号までの自分の入選句から5句を選ぶ

路郎賞――同人は川柳塔欄から応募

川柳塔賞――誌友は水煙抄欄から応募

③ 5句と掲載月、掲載頁を楷書で書き、8月10日必着のこと

④ P118・P119を参照して下さい。

川柳塔（同人）・水煙抄（誌友）投句用紙

種目「　　」発表（10月号）地名

都道府県市　姓雅号

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

きりとりせん

同人・誌友　マルで囲んでください。

投句先　〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

檸　檬　抄　投　句　用　紙

「削　る」　（８月15日締切）

10月号発表

髙田美代子　選 ――共選―― 牛尾　緑良　選

B　A

地名

市都
道
県府

姓
雅号

切らないで下さい

B　A

地名

市都
道
県府

姓
雅号

左右に同じ句を書いて下さい

川柳塔誌**新規**購読申込書

年　月　日

氏名		住所	〒　－	電話	－　－	紹介者	

○　年　月から半年　5000円
○　年　月から一年　9800円
該当の方に○をつけて下さい

〒543-0052
大阪市天王寺区大道1丁目14番17号　花野ビル201
川柳塔社（電話　06－6779－3490）
振替　00980－4－298479

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい

本社8月句会

とき　8月7日㈮　午後5時開場・6時20分締切り
—開場時間、締切時間を変更しています。ご注意下さい。

ところ　アウィーナ大阪　4階　金剛
天王寺区石ケ辻町19—12　電06・6772・1441

おはなし「ユーモア川柳」　新家完司
席題「　」　松原寿子選
兼題「　歯　」　山田耕治選
「ツアー」　北野哲男選
「惜しい」　山岡冨美子選
「人混み」　鶴田遠野選
「先　輩」　河内天笑選
（各題2句以内）

会費　1000円　投句料　500円（切手可）

本社9月句会
7日(月)　午後5時から

兼題「　縞　」「去　る」「スポット」
「産　地」「互　角」

作品募集

10月号発表（8月15日締切）

川柳塔（8句）　河内天笑選
水煙抄（8句）　小島蘭幸選
愛染帖（3句）　新家完司選
檸檬抄「削　る」（2句）　牛尾緑良共選
一路集（3句）「白　い」　斉藤劭選
「この世」　大内朝子選
「ペ　ア」　生嶋ますみ選
初歩教室「星（3句）」　鈴木公弘担当

11月号
檸檬抄「灯」
一路集「丸　い」「詩　人」「記　憶」
初歩教室「探　す」

「川柳塔」への投句について

(1)川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
(2)愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
(3)各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。
(4)各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いいたします。

第28年度　夜市川柳募集

第3回「反　応」　政岡日枝子選
ハガキに3句　**8月末日**締切

投句先　〒593-8305　堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方　**堺川柳会**

定価　八百円（送料84円）
半年分　五千円（送料共）
一年分　九千八百円（同）

二〇〇九年（平成二十一年）八月一日発行
発行人　河内權治
編集人　山本希久子
印刷所　美研アート
発行所　**川柳塔社**
〒543-0052
大阪市天王寺区大道一—一四—一七
花野ビル201号室
TEL・FAX（〇六）六七七九—三四九〇番
振替　〇〇九八〇—四—二九八四七九番

ホームページアドレス　http://www.senryutou.join-us.jp/

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成二十一年八月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻九八七号 卿 塔 八月号 定価 八百 送料 （八十四円）

オニザキの
すりごま

自宅の台所で始めた手洗いのごま加工・販売から50余年。
オニザキでは、手作りの風味にこだわり、独自に開発した製法で、ごまの香りと味わいを最大限に引き出し、美味しいすりごまを作り続けています。

株式会社 オニザキコーポレーションセールス
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング
TEL フリーダイヤル 0120-30-5050

医療法人社団
湯川胃腸病院
・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得
健康保険取扱 看護２A・緩和ケア病棟
・消化器科・内科・外科
・放射線科・ホスピス
・デイサービスセンター
診療時間
月～金 8:30～16:00
土 8:30～11:00
JR桃谷駅徒歩3分
http://www.yukawa.or.jp
電話 大阪(06) 6771-4861(代)

雑誌 05703－8